

の儘であるといふことである。すなはち、ある瞬間に於ては諸君は與へられた行爲をなすか或は爲さざるかである。もし諸君にしてそれをなせば、それは爲されたのであつて、なされないことを得ない。この爲されたると爲されざるとの相違は、實際的經驗的世界に於ては、完全に絶對的な相違である。與へられたる個々の行爲に對する機會は往つて再び歸らない。蓋、その個々の行爲のなされ得る瞬間は決して歸つて來ないからである。こゝに全宇宙の合理的構成がわれらの瞬間的經驗と確定的な關係に入るの場合がある。そしてもしも人あつて「絶對」——實用主義者が奇妙に縁遠く抽象的なものゝやうに想像するところの實在——と接觸しようとするならば何でもよろしいから、たゞその人に何か個人的な行爲を爲させ、それから後で、其行爲を取消すやうに試みさせて見よ。この實驗を以て、絶對の實在といふは何を意味するかを知らしめよ。この經驗が合理的なる人に教ふるところの眞理をして、また絶對的眞理とは何を意味するかを示さしめよ。

蓋、行爲は一度なされたる限り、取返へしのつかぬものだといふ此性質、此絶對的性質は、ある與へられたる行爲のために具體的狀態を招致し、従つてこの個々の行爲をその判斷の企てたる「功用」の一部として持つたところの判斷、判定、立意見等の行爲の眞偽に關しても同様な取返

へしのつかぬ性質を合理的に決定するからである。再び競技の比喻に歸り、競技者の或る行爲をやれと勧めるコーチアーのことを想像せよ。コーチアーの勸告に従つて、その行爲をなし、その競技を爲さんとする競技者を想像せよ。その競技が失敗であつたと想像せよ。一度なされた競技は取消すことは出來ない。その規則がそれを要求して居る場合ならば、點數記録にそれは載つて居る。もしもそれがそこに載つた限り、まさにその點數記録の内容は競技の規則によつて決して變更することは出來ない。競争に對しては點數記録は絶對的に取消しがたいものである。もしもコーチアーがその失策を勧めたのであるならば、彼の忠告は誤であつたのである。そして競技者の點數は競技の規則を破るのでなければ變更することは出來ないと同様に、失策者としてのコーチアーの記録もそれを忠告した點に關しては變更することは出來ない。これと同様なことは競技者の成功及びそれを要求したコーチに對しても同じくいへる。以上すべては、決して抽象作用や或は單なる理屈から出て來る結果ではない。これ實に確實な實際上の結果を結合して出て來たところの絶對的の眞理である。

再び人生に歸つて、われらはいはねばならぬ。もしもわれらの斷定が確實なる意味を有するた

らば、それは確實な個人的行爲に諮ることによつてその具體的の功用を得て来る。個人的行動としての各行爲は取消しがたきものであり、絶對的に如實なるものである。人生の合理的見渡しの光——われらが意見を立てる時、われらがわれらの意見に基いて行動する時、われらがそれに訴へやうとするやうな人生の見渡し——に照して判断されたわれらの行爲は、一定の目的に對して成功か失敗かの何れかである。もしもわれらが行動する時問題になる人生の問題が充分に確實なものであるならば、この競技の規則に照らさるべきわれらの行爲は、當面の目的に對して、また實生活に於けるその實際上の位置に鑑みて、或は正しき行爲となり誤つたる行爲となるの此の性質を免れることは出来ない。

通り言葉の句にあるやうに「もし間違つた時は、引き戻されるやうに紐をつけられて」行爲するやうな人は——即ち、自己の行爲を以て單に相對的な實在性を有するもの、如く認め、任意にそれを取消すことが出来るもの、如く思つて居る人は眞面目に行動して居るのではない。彼はよくいはれて居るとほり、ほんとに「競技をして居る」のではない。そして實際上、彼は絶對的實在を愚弄して居るのである。彼は常に眞面目でないのみならず、實人生を以て全然眞面目でない

ものと見て居るのである。蓋、彼が實際になしたところの個々の行爲はすべて、彼が取消すことを欲すると欲せざるとに拘らず、絶對的に取消し難いものであるからである。一度實行せらるゝや、それは永遠に、世界の點數記録の中に録せられる。

儲、私は主張する。それ自らがある人の意志の表現であると認められる斷定或は意見はすべてその企てられたる功用に對してこれらの取消し難い行爲の一を持ち、その意見がやれと勧めるところのその個々の行爲はこの目的に對照し人生(その記録の中にその行爲が載るところの)に参照して評價される時、その要求された目的に對して全く取消し難く正しき行爲である限りに於て眞であるといふことを。すなはち、意見は、その意見がやれと勧めるところの功用が或る人生の選ばれたる競技に於て、その競技の規則に照し、實際上得點であるところの行爲である限りに於て眞なのである。而して、その意見の功用として、人生の競技に於ける失敗であるところの行爲を忠告するところの意見はすべて誤れる意見である。故に私は主張する。個々の行爲をやれと勧めるところの意見の眞と偽との間のこの區別の絶對的にして取消し難きものなることは、人生の競技の得點表上に於て一度行爲がなさるゝやその行爲の位置は絶對的に定ると同一である。

この命題を否定するところの人は、たゞ、経験の一切の個々の事實の性質そのものをおもちやにするに過ぎない。それと同時にまた人生をおもちやにし、自分自身の決定的な意志を蔑視するものである。眞面目な人はみな、自己の日々の仕事をなすに當り、自己の行爲は取消し難いものであるから、自己の個々の行爲をやれと勸める指導意見は、まさにこれらの意見がその功用を彼の行爲に具體的に表現せしむる限り、(同じく取消し難き方法に於て)正或は不正の指導を與へるといふ確信を以て之を爲して居る。而して人生に關するこの見解は決して哲學者の抽象ではない。これは唯一の眞に具體的な見解である。これに反するものは單に非論理的なるのみならず、實際上空虛である。私は一つの行爲をなしてからそれを取消すことは出来ない。故に私は、この行爲はある一定の目的に對して、人生のこの點に於て正しき行爲であるといひ、そして後にまた、私はこの忠告はそれだけが眞なるもの、従つて絶對的に眞なるものとせらるべきものとほんとに思つたのではなかつたといふことは出来ない。絶對的實在(即ち、取消し難き行爲に屬する種類の實在)絶對的眞理(即ち、ある意見が與へられたる目的のため個々の行爲をやれと勸め、これらの行爲が實際上その目あてとせるところの目的に合せる時、それらの意見に屬する種類の眞理)――

この二つは「新らしきを産まぬ主智主義」のために哲學者によつて發見された縁遠い事柄ではない。かゝる絶對的實在かゝる絶對的眞理は最も具體的な、實用的な最も手近な事柄である。近づき得べき絶對的眞理の存在を否定する實用主義者は合理的意志の最も特色ある形相――即ち、それは常に取消し難き行爲を忠告しつゝあり、従つて、それがまさにきまつた忠告である限り、それ自身の確定的な目的に對して、取消し難く正或は不正であるところの忠告を常に與へつゝあるといふことを嘗て正當に考へたことがないのである。

近頃の議論の中で最もうんざりさせられるのは、常に「具體的」特質とか、「實用的」特質とか宣言して居りながら、一切の意志的生活の最も活氣あり最も具體的な形相を無視する哲學的意見が勢力を占め且つ人氣あることである。蓋し、意志の本質そのものは、それが活動のあらゆる瞬間に於て絶對的成果を決定するといふこと(何んとなればそれは取消し難き行爲をなすが故に)従つてもし賢明さを失ひさへしなければ、その意見の企てられたる功用が取消し難きものであると同様に絶對的に眞或は偽たる意見によつて導かれるといふことに存するからである。

私は繰返へす。もしも諸君にして絶對的眞理とは何ぞや、絶對的偽とは何ぞやといふことを知

らんと欲せば、何にてもよし一つの事をなせ、而して後にその行爲を取消さんと試みよ。と。その行爲が取消され得るものゝやうに思はせるやうな忠告を諸君に與へる意見は、いかなる人生の競技に關してもきつと絶對的に偽つたる指導を與へるといふ事は諸君に直ぐに解ることである。諸君の行爲を取消さうとするあらゆる努力は大間違である。諸君が取消し得るといふやうなあらゆる意見は、價値のない絶對的に誤れる不合理である。而してまさに、かゝる無價値と不合理とは、絶對的眞理は一の非實用的な近づき難き抽象であるといふ提説に屬するものである。

## 七

若し夫れ、絶對的眞理の性質に關するかゝる見解を懐いて、依つて以て、全體としての世界に關するわれらの意見が眞たり得或は偽たり得る意義を評價せんとする事に歸り來らば、今や、理性の内觀及び世界の性質の二つに關するわれらの記述は、意見の性質のこの充分なる分析によつて豊富にされたるを解するであらう。宇宙に關する意見は、生命（諸君の生命がそれに屬するところ）の全體の見渡し、が眞に合理的、目的及び合理的、要求なりと示すところの目的及び要求にいか

にいて諸君の行爲を適應せしむべきに關する忠告である。然らば、かゝる意見は皆、その眞なると偽なるとを問はず、諸君の意志及び諸君の行爲を一の最高意志、價値を判定し、人生の規則を確立し、完全なる内觀の光に照して目的を評價する最高意志の目的に調和せしめんとその努力である。即ち、諸君の意見をそれに訴へるところの内觀は、實に諸君が爲すと同様に具體的に價値判定をなし、評價し、確立し、判定をするところの實在物、従つて常に全智なるのみならず、意志を持つて居るところの實在物の内觀である。

救ひに對する諸君の探求は諸君自らをこの最高意志に調和せしめんとするの求め心である。かゝる意志が實在であることは、實世界に關して諸君が立て得るあらゆる意見は眞か偽かであるといふことが眞であると同じく眞である。然らば、諸君はたとひ知らずに居ても、人生の主と絶えず接觸して居るのである。蓋、諸君は（その窮極の價値、その現實的なまた全體的な成功或は失敗は、實人生の全體に面するところの内觀の見地からのみ實在であり或は知られ得、またその表現が全宇宙なる意志の目的に参照してのみ然かあり得るものであるところの）取消し難き行爲を絶えずなすゝあるからである。

けれども、もしも諸君が實用主義者たちと共に、「全體的世界は存在しない。完全なる見解は存在しない。世界を意志する意志といふが如きは存在しない。何んとなれば、すべては暫有的であり、時は過ぎ往き、新たなものは絶えず現はれ、而して世界は今やまさに不完全である。従つて何も永遠なるものは存在しない。」といふならば、その時は私の答は完全にきまつて居る。いふまでもなく、まさにこの瞬間に於ては、完全なる世界は存在しない。いふまでもなく、あらゆる新たな行爲は、暫有的世界に新奇を導き入れる。けれども、異つた一面から見れば、以上のことを斷言することですら既に、未來、而して實際上一切の未來は、その個々一切の内容、内容を、實在に屬し、實在全體の一部を形成して居るといふことをいつて居るのである。

このことを承認するのは、眞の内觀及び神聖なる意志は、無始の過去並びに無終の未來の全體を自己の前に、一個無時間ではなく而も刹那に永劫を藏する底の實人生の全體を包括するところの見渡しに於て要求し、また之を得て居るといふことを許すことである。而して、まさにかゝる無時間でなく刹那に永劫を藏する底の見通し、まさにかゝる念即無念の生命こそ、時間を離れずわれらの生命を離れざる、而もわれらの個々の生命のすべての中にあり、またそのすべてを通じて、

そのすべてに超越して實存する永遠を構成する。神聖なる意志は、われらの衷にあつてまたこの世界のすべての中にあつて、無始の過去、無終の未來に互りて一時に意志する。神聖なる意志は生命なきものではない。それはすべての生命を含みすべての生命を見通して居る。すべてはその休みなき流れ、その個々の行爲の繼起に於ては、暫有的である。而もその意味の統一に於てはすべては永遠である。

かくいふは決して、われらの自由、われらの自發的行動を否定するのではない。神聖なる意志は、まさにそれが永遠を意志するだけそれだけ、私の個々の行爲の各に於て私を意志する。私はその時、そこに私自身の獨自性を表現すべきである。而して、然る限り自由であり、選擇の力がある。また、神聖なる意志は「一時に」すべてを意志するといふは、そがすべてを時間上の或る瞬間に意志するといふのではない。たゞ神聖なる意志は、時間のすべての瞬間に於てなすところのその意志行爲の全體性の中に表現されて居るといふことを意味するだけである。

しかしながら、これは依然として哲學である、平凡人が自己の宗教として要求するところのものではない。と諸君は或はいふかも知れぬ。問題はなほも残る。すなはち、われらは果していか

なる内觀の根源によつて、われらの日常生活をこの神聖なる智慧及びこの神聖なる意志に調和せしむることが出来るか。私は答へる。それは、最も平凡なる最も單純な人間（合理的で眞面目な）に近づき得べき一の内觀の根源によりてである。而もなほ今のところではまだ明白に名前が附けられて居な、この内觀の根源は、一個美しく靈的な統一の中にわれらの個人的經驗、社會的經驗、理性、意志等の眞意義を含め、而して遂にはわれらに眞の宗教を與ふところのものである。次講に於て、われらはこの新根源を研究せんとする。

## 第五篇 忠誠の宗教

わが最初の二講は諸君には不満足であつたかも知れないが、諸君のすべてによく知られて居る宗教的内觀の根源を論じた。わが三四講は哲學的論議に導いたが、これは恐らく諸君の多數が満足どころでなく何等の親しみをも感じなかつたであらう。故に「もし前述の内觀の根源がわれらの有する根源のすべてならば、宗教的眞理はなほ甚だ遠く離れて居るやうに思はれる。」と諸君がいふのを聞き得るが如く想像される。私は諸君がいふのを聞くに「聖者たちは彼等が自己の親しき個人的な直覺をわれらに告げて呉れる時にわれらを慰めることもあるかも知れぬが、けれども、彼等はその經驗の互に撞着的な多様のためにわれらを混亂せしめる。社會的熱誠家は愛によつての救ひに至るの道をわれらに示さうと企てる。けれども、彼等がそこに神を見出せと命ずるところの人間世界は本來われら自身と同様に救ひの要に迫られて居る世界なのである。賢人たちはわれらを蔽へる星斗爛々たる理性の天を指示する。けれどもこの天は冷たさうに見える。而もその星はわれらの窮迫せる生活からは遠くかけ離れて居るやうに見える。そして、たとひ何人かあつて、

この抗議そのものに答へると同時にまた實用主義者たちの學說にも答へて、この理性の天界はまた生きた神の意志の表現であると主張しようとも、われられはなもわれらの最深の要求は、いかにしてこの神の意志が天に於けると同様に地上に於てなされるべきかを見ようとするにあるのだといふ事を忘れる事は出来ない。而もこれわれらの未だ見る事を學ばざるところのものである。然らば、前述の根源は、要するに何等生きた積極的な宗教をわれらに與へないやうに見える。」と。

一

諸君のあるものはこの點に於て、斯く、不満足を表白せられるかも知れぬ。而も私はこの不満足を以て正當なものと思ふ。もしも、これまでの講演が、實際、宗教的内觀の近づき得べき根源の説明を餘すところなく盡して居るならば、われらは、救ひに對する個人的必要、同胞との融合によつて救ひを求むべき社會的要求、眞理に對して或連絡あり一貫した見解を得んとの合理的要求、われらがそれと融合する事を要する人生の主の法則に自ら一致せんとの意志の目的等を同時に満足し得る宗教を發見するの望は絶えなければならぬであらう。換言すれば、別々の根源とし

て考へられたる前述の内觀の根源のすべては、彼等が解くことの出来ない問題をわれらに提出し救ひの經過の眞性質を無智の雲によつて蔽はれたるまゝに残す。この點に於てわれらが最も必要とするところのものは、前述の根源が提供せる教課をいかにして結合すべきかを示す或る種の内觀である。本講はかゝる根源の説明に全力を集注せねばならぬ。もしも人道の最善の友、最良の奉仕者たちの精神的生活が、この點に於てわれらの現在の問題を取巻いて居る困難をいかにして打克たんかを、ずつと前々からわれらに示して置いて呉れたといふ事實がなかつたならば、この新たなる企に従事することは全く絶望であらう。これらの人類の友、奉仕者たちは、實際上、私がか前講の結句に於て述べたところの内觀の根源（それによつて個人的經驗、社會的經驗、理性及び意志の成果及び發動原理が或る一つの創造的統一——われらの世界の最も高尚なる靈的獲得がそれに依るところの——に持ち來らしめられるところの根源）を用ひて居る。故にわれらは、本講に於ては、思辨から人生に還らう。而してわれらの指導者は、哲學者でもなく、不可言の宗教的直覺の天才でもなく、一面實に直覺と思想とを有し、而もまた實際に靈に於て生くるどころの人々であるであらう。

とにかく、われらの目的に對しては、われらの題目に近づく上述の方法は希くば是認せられたであらう。われらは諸根源を知り、その各の價值するところを知りたいと思ふ。故にわれらは各の根源を一々他と區別して考へなければならぬ。かくしてのみわれらはその各を一緒に纏め、一層高い宗教的生活に齎らすところのものが何であるかを見得るのである。われらは、もしも宗教に反省といふことがなかつたならばその行く先は何處であるかを反省しなければならぬ。もしもわれらが此の研究の當初に於て、手取り早く此の内觀の新根源を理解しようと努力して、本講に於て初めて論じ得るところのものに手を附けたであらうならば、その構成の中に這入つて來る動機を識別したり、その到達するところを理解したりする上に於て、今われらが可能なよりはすつと成果は尠なかつたであらう。われらは實に、光に向ふ人間の苦闘の歴史に於て、人をしてこれらの困難に打克つことを最もよく可能ならしめたところの此の内觀の根源の研究の準備の爲に、困難を力説しなければならなかつたのである。

この新根源は實に宗教（われらの現在の語義に於ける）の問題のみならず、なほ義務の問題を解決せんとする努力と親密な關係をなして人々の生活に入り込んで來た。私はまづ第一に、義務

の問題は宗教の問題といかに區別せらるゝかを語らねばならぬ。次に私はこの二つの問題の一を解かうとの努力が他に對していかなる光明を投げたかを示さう。

義務と宗教とは、諸君のすべての心中に於て、密接なる關係を持つて居る。二者共に、われらの理想、われらの要、われらの生活と理想との調和、或種の善の達成等と關係する。けれども諸君はまた、一方義務及び道德、一方宗教及び救ひのこの關係は、全くの明瞭さを以て決定することの容易でない關係であるといふことをよく承知して居る。現代の或人々は、諸君の知らるゝ通り、現在の彼等の精神状態に於ては、宗教から多くの助けを得ることは不可能であるといつて居る。而も宗教問題は自分たちには何等の解決をも與へないといふことを主張する人々も、その衷心に於ては熱烈眞摯に義務的である。然るに、他の一面に於ては、自己の心中に於て、救ひが極めて確實であるがため、實際上、義務の招命を輕んじ、或は少くとも、義務の思想の中に救ひありといふことを殆んど見ない程な人々がある。大多數の人々の意見に於ては、いかに義務的な生活を送らんとする努力をなすとも、天よりの資なる或種の神の恩寵が干涉して、救ひの過程を完成するのなれば、救ひには導き得ないといふ。然るに、世にはまた義務の生活はそれ自ら救



ひに導く傾があるのみならず、われらの義務を辛棒強く爲すことこそ、正に救ひを構成する全體であるといふ人々がある。

本講演の計劃は、信と行、神の恩寵と人間の忠順との關係に關するパウロの教義を直接に研究する事を禁ずる所以は諸君のすぐに了解せらるゝところであらう。けれども、單なる行は空しきものなりとのパウロの教あるに拘らず、歴史上多くの時代に於て、而して特に現時に於て、自分には義務の宗教以外には宗教はないといふ人々が存在するといふ事を思ひ出すと共に、パウロのことを一寸だけでも茲にいふのは、重大なる問題が茲に含まれて居るといふ事を示すに於て、また宗教と道徳との間の眞の關係は決して自明的でないといふことを示すに於て役立つであらう。

私はまづ簡單に宗教的關心と道徳的關心との區別をしよう。かくして後初めてわれらはこの二つがいかに密接に相關係して居るか、而も一定の條件の下にありては、いかにそれが相離れて居るか、時としてはまたそれがいかに激しく相對抗するに至るかを認むることが出来るであらう。

## 二

同じ人生の問題を考へるにしても、道徳がそれを考へる視點と宗教がそれを考へる視點との間には歴然たる對照がある。汝の義務いかんといふことに關する諸君の見解はいかにともあれ、道徳的關心はこの義務の觀念に集注すべきは明白である。すはなち、道徳的關心は正しき行爲とは何ぞやを定めんことを求めまたその行爲は必ずなさるべきを主張せんとする。そはまた人生の或理想に照して行爲の正なることを評決する。けれども道徳的關心はこの理想をいかに考へたにせよそはその主なる訴を能動的なる個人に對してなすのである。そはいふ、「これをなせ。」と。これに反して宗教的關心は、必要の感に集注する。或は、もしもこの必要が満足されて發見されることに宗教的關心が成功するならば、そはその必要に迫られて居た人を危險から救つたところのもの知識に集注する。宗教的關心は助けに向つて訴へる。或は忍耐強く主を待つ。或は救ひの現はれに歡喜する。故に宗教的關心は義務の問題に對しては、その相異なる多くの態度の中でどれを取つてもいゝのである。宗教的關心は行爲を通して救ひを求めてもよいが、或はまた、ある人々の心裡に於ては何等生きた仕方でも能動的性質に訴へないこともあり得るのである。或る宗教的氣分は所動的であり、冥想的であり、受身であり、奮闘的よりは寧ろ崇拜的である。だから、多

くの熱烈なる人士の義務感から来る焦慮を疑はしく感ずるといふことは宗教的關心の存在と全く調和するのである。

「たゞ立つて待つてだけ居る人々もまた奉仕する也。」これ實に、時とすると、慰安的な、時とするとまた多くの人々に取りて宗教的關心を表はすやうに思はれるところの警句である。

二つの關心の間のこの一般的對照は、道德家——即ち、特に義務の要求を力説する教師たち——が、例の高等宗教の訴の基礎たる二つの根本假定に對していかなる關係に立つかを考へる時種々特殊なる形式を取る。宗教(われらの語義に於ける)は左の件を斷定することに依存する。(一)、世には存在の一つの最高の目的、人生の或目的、ある主要なる善の存すること。(二)、人はその本性上この善を獲得するに全然失敗するの大危険にあること、従つて人はこの危険から救はるゝの要に迫り居ること。

諸、この二つの根本假定の中その第一については宗教は屢々(いつでもではないが)道德家と即ちいかにして正しく行動すべきかをわれらに教ふることに熱中する人々と同一である。例へばアリストテレースはその倫理學(道德史上最も影響多き書冊の一)を最高善の存在といふ根本假定

の上に基礎を置いた。道德を論じ或は宣傳した他の多くの人々も、一切の義務は一つの窮極の義務すなはち最高善に一致して行動せよといふ要求に從屬するといふことを斷じて居る。けれどもこの最高善に關する一致は、もし一方宗教家等の意見と一方道德家たちの意見とを比較する時は、全く普遍的ではないといふことになる。一般の傳習的道德は往々正しき行爲に關する格率——その格率相互間の關係及びその格率が人生の最高目的に對するの關係は不明のままに残るところの格率——の含蓄の少い形式を取る。各格率は義務を明かにするものと想像せらる。いふまでもなく、それは又いかにして或る特殊の善を達成し或はいかにして或る特殊の惡を除くべきかをわれらに告げる。けれども、この特殊の義務が或る最高善を獲得することとどういふ關係を有するかは、たゞこれだけでは明かにされない。

而して、傳習的道德をして自己の心裡や生活に優位を占めさせて居るやうな多數人は、あらゆる眞面目なる努力の根底に横はると私は思ふところの一層深い靈のことを全く知らないのだから、かゝる人士は自己の道德が或る宗教的動機を有するといふこと、或は自分たちは救ひの問題と交渉して居るのであるといふことなどは全く知らずに通るのである。甚だしきに至つては、義務を

説く専門的教師で自分の教へて居る法則を合理的統一に持つて行くことの出来得ない單なる遵奉主義者である人さへもある。而してかゝる人士に取つては、宗教が隅の主石とするところの假定は寧ろ躓きの石である。彼等は一體最高善が存在するや否や高價なる眞珠が存在するや否やを疑ひ或は怪しむのである。而も、彼等は或一定の行爲は之を行はねばならぬものだと主張することによつて道德の本質的形相を説明する。

けれども、宗教上の根本假定の中の第一についてはどうあらうとも、第二のもの、すなはちわれらは本來人生の眞目的を見失ふの甚だ大なる危険に於てあるものだといふ根本假定こそ、宗教家と義務を説く人々との間の關心の相違に一層大なる間隙を生ぜしめるものである。一つの最高善があるといふことを考へる點に於て、われらは一致して居ると想像せよ。けれどもこゝにいかなる程度に於て吾人は本來この最高目的を見失ふの危険に於てあるか。といふ問題は、われらはすべて過ちをなすべき人間であるが故に、意見の相違に於て多くの餘地を存し得る問題である。私自身がこの件をどう見て居るかは第一講に於て述べた。そして私にとりては宗教的要は熾盛にして明白なる要であるように思はれるのである。けれども道德家の多數は義務を以て宗教に代へ

得るものとなすの徒である。そして彼等は往々にして人間の本性に關し私以上にすつと樂天家である。彼等の意見に於ては、目的は到達し得る。或は少くと着々として近づき得る。たゞよく義務を守つて行爲しさへするならば、われらの救ひに役立つべき他の動機からの助けはなくとも、よいといふのである。

然らば高價なる眞珠は存在する。しかし、——かく、かゝる教師たちは主張する——何故に、汝はその眞珠を購ふために汝の持つて居るすべてを賣るのか。もともと汝は合理的なる努力によつてそれを手に入れる事が出来るやうになつて居るのに。——義務に忠順とはかゝる努力に導くところの精神に名づけたる名である。而してこれらの教師たちはいふ、忠順は他の規範的機能と同じく自然的のものである。と。彼等は主張する。「いかなる大變災もわが運命を脅かすに足りない。」「何故に正しきをなさないのか。これ實に汝自身の力に合ふことであつて、汝の最深の要に充分なるところのものである。汝は決して天からの助けを呼び求むるの要はない。汝はもしも欲するならば救はれ得る。何も救ひといふやうな陰氣な問題の要はない。」と。

かゝる樂天家に對して酬いるに往々にして熱烈なる宗教家は、たゞ甚だ相近くて一致して居る

ものだけの間で可能なかの不思議な嫌悪と反対とを以てする。精神的に近きものは相互に縁遠い者の知り得ない残忍さを以て戦を交へることがある。この場合に於ては、相争へる兩派の目的は御承知の通り同一である。兩者とも或る最高善に到達せんことを欲する。快活なる樂天家は熱心なる信心家が信仰の助けによつて熱情的に求めつゝあるところのものを行爲によつて達し得るものと單純に確信して居る。けれども、その各の一方は他を目するに神の敵に對するやうな深き嫌悪の情を以てする。「狂信家！」義務の徒は宗教的なる人をかく呼ぶ。「單なる道學者！」後者はかくいひ返へす。そしてこの充分に理由のある侮辱をいひ表すにこれよりいゝ名はないと感じて居る。こゝに含まれたる争點は實際微妙にして重大である。

もしこの場合に於て、宗教的な人と道德家とが宗教の根本假定の二つに關し意見が相合し、二人ともに世には求むべき最高の善あり、避くべき大危険ありといふことに一致するに至らば、この争はたゞますゝその強度に於て猛烈を増すばかりであらう。蓋、かくなれば、いかなる道が救ひに導くやといふ問題が起るからである。

この疑問に對する答は（人間内觀の發達の或る點に於て）單に疑はしく見えると想像せよ。宗教

的求道者と道德家の兩者の前に横はる前途を神秘が蔽うて居ると想像せよ。かゝる場合に於ては宗教的關心は、少くとも一時、敗北に會する。求道者は自分が打破られたことを認めなければならぬ。けれども宗教的關心のこの敗北こそ正に往々にして道德家の乘すべき機會であるやうに思はれる。こゝに道德家はいふ。「汝は汝の要する超人間的眞理を發見することは出来ない。汝は天に觸れることは出来ない。汝は依然として一個の人間である。けれども、いかにその仕事は困難であるにもせよ、いかにそれは汝の本性の懶惰や墮落に相反するにもせよ、破滅の危険はいかに大なるにもせよ、兎に角汝は人間の行爲をなすことが出来る。恐らく誰も救ひの道などは知らないであらう。けれども吾人は各自の義務を知り日々それを爲すことが出来る。吾人はどうすれば目的に達しられるかは解らない。けれども吾人は目的の何であるかを知つて居る。そして徒らに天を眺めて空しく生きんよりは目的に向つて努力しつゝ死ぬ方が増しであるといふことを知つて居る。」と。

かゝる場合に於ては、道德家は充分に、われらの救ひの要の深さ、危険の大きさを認めはするが、而もなほ努力的の義務の追及こそ往々にして彼に取つては必然的に宗教に取つて代るべきもの

と思はれるのである。然らば道德家は彼自身の位置を以て眞理を愛するものに適した唯一の位置であると考へ、われらと縁遠い希望なき神秘に注意を固着するやうに思はれるところの宗教的關心は専念なる道德的生活の障礙であるやうに思ふであらう。一切の危険、一切の疑惑に對しては彼は「永遠の否定」を投げ附ける。彼の唯一の解決は努力に存する。彼は父の家から遙かに隔つて居る。彼は父ありやなしや或は靈の安宅ありやなしやさへも知らない。けれども、彼はさながらの眞理に面せんことを欲する。また義務のために戦つて、勇士の死ぬるが如く死なんことを欲するのである。

けれども、いふまでもなく多くの人の心に取りては、人生の眞の教訓はこれと全く異つたる結果を齎らす。宗教的な人は或は救ひの道が實際彼に知られて居るといふことをたしかに感ずるやうになり得るであらう。けれども、それは彼には道德的個人の努力によつて開かるゝ道ではなくして、たゞ或る神聖なる力の、それ自らの動機から人類を救はうとするものゝ働きによつてのみ、開かれ得るものゝやうに思はれるであらう。この場合に、恩寵のみが救ひをなすといふ教義及び、かゝる恩寵なくんば行は空しいものに過ぎないといふ古い教義は、道德家との論争に於て何等か

の形式を以て宗教の教師たちによつて力説せられる。基督教の歴史は神の恩寵が救ひに必要である、従つて單なる道德は常に救ひをなすことが出来ないのみならず、甚だしきに至つてはそれ自ら破滅を保證する傾さへあるといふところの數種の教義の型を説いて居る。南方佛教の歴史上に於ても、基督教の福音的形式に密接に類似して居るところの教が表はれて居る。

かくてこゝに問題となつて居るところの宗教的關心は甚だ人類的なものであつて、一般に擴がつて居る。故に救ひの道にかく見るところの人は、努力緊張の生活を以てわれらの問題を處置するの唯一の正直なる仕方であると思つて居る人々に對する自己の反對を支へんがために、個人的でありまた社會的であるところの宗教的經驗の大きな群に實際上何人でも訴へることが出来るのである。何等かの事情に依つて正しきをなすに力なき自己の無力を一度感じたことのある人は、誰でも恩寵を必要とする。かゝる宗教的經驗が何を意味するかを知つて居る。従つて、救ひの要に關しても、自然的人間としての破滅の危険に關しても共に自分たちと見解の一致する彼等道德家を何故、或る宗教の熱心なる信者たちが責めるかといふことは了解するに難からぬ。實際上、兩派は共に、救ひの探求の基礎をなして居るところの此の二つの根本假定を採用するが故にこ

そ、ますます相互に責め合ふのである。

けれども、如上のものとても決して同胞の間に屢々表はれるところのこの悲劇的争闘が取るところの唯一の形式ではない。私はなほ、一つの形式を述べねばならぬ。或る宗教の歸依者たちの意見に於て、嘗に救ひの道の知識が開かれて居るのみならず、なほ目的の獲得、憩ひに入ること、目的の成満等も、聖者たちに對し、或は光耀された人たちに取りて、一つの現實的の經驗であるとされて居ると想像せよ。然らば、世には最高善の完全なる獲得といふやうな事もある。かく信心家は教へるであらう。こゝに於てか道德家たちはジエームスが、よく、自分が或る絶對者と實際に接觸して居ると思つて居る人たちに反對する時に屢々用ゐた文句を採用するであらう。ジエームスは畢竟かういつて居る。かゝる人たちの意見の唯一の用はそれが彼等に一種の「道德的休日」を與へることである。と。蓋、ジエームスは、私の考へでは全く間違つて居ると思ふのだが、最高善が何等かの方法に於て實際世界に實現さるべきものだと思つて居る人は、夫が爲に意識的に義務の招命から免ぜられ、たゞ次のやうにいひさへすればよいものであると想像したからである。

「神はその天に在り、世界に於ける何事もよし。」(ロバート・ブラウニングのピツパバツセス中の歌)

すなはち、かゝる世界にあつては、ジエームスの想像した通り、正しい人々は何もすることはないのであらう。けれども恐らく、依つて以て神がその天にあり得、或はすべては世と共に正しきことを得る唯一の道でなければ、それに變り得るものは、もともと正しき人の緊張努力の行爲の遂行を含んで居るところの道であるといふことを(かゝる二者擇一は彼自身の實用主義の精神に近いものであつたに拘らず)ジエームスは之を頑固に無視した。

けれども、宗教的な精神の人々の間には、最高善をば人生の主との或る安らげき融合の形に於てのみ考へ、單に神の現前に於ける平靜、或は一種美的な冥想的愉悅に過ぎないものとなして居る人が實際にあるといふことは眞である。而して彼等の或ものがかういつて居ることも眞實である。すなはち、「聖者たち、或は兎に角光耀された人達は現世に於てすらもこの安けさに入る。そして彼等に對しては實際何もなすべきことは残されて居ない。」と。いふまでもなく、かゝる人々に對して道德家は答へるであらう。「汝等光耀された人たちは自ら「道德的休日」をなす當然の權利を附與されたやうに考へて居るやうに見える。われら努力緊張の人々は汝の怠惰は之を人間として無價値なものとして排斥する。汝等の宗教は空なる審美主義である。そしてそれが禁欲的な、

この世的ならぬ冥想の外貌を取るとも、或は單に藝術のために藝術をよるこび何等義務の觀念なき高等教育ある享樂主義者の仲間の態度を眞似やうとも、それは依然として空なる審美主義である。」と。單なる平和の獲得によつての救ひを信ずるかかゝる徒輩に對しては、ジエムスの非難は正當に適用される。けれども本講演に於ては、私は決して救ひといふものをかゝる名辭に於て限定して置かないことは御注意を願はねばならぬ。救ひは勝利と平和とを含む。而もこの平和たるや、靈の力と緊張的活動の生命に於ける平和、及びそれらを通したる平和のみである。

けれども、私の今いつたやうな精神的怠慢の宗教の徒輩はそれにも拘らず、道德家の輕侮に報いるに矢張輕侮を以てするであらう。もしも彼等が藝術のための藝術の辨護者、最高善としての單なる美の辨護者であるならば、彼等は道德家の焦慮を以て消耗性のももの或は野鄙なるものとなすであらう。もしもまた彼等が寂靜主義者であるならば、彼等は單なる德行主義を以て救はれない魂の苦闘であるとなすであらう。彼等は主張する。もしも道德的努力が最後の言葉であるならば、われらは皆シシファス王のやうに永久に浮ぶ瀬のない地獄に陥るであらう。(譯者曰、シシファス王は希臘の一國の王なりしが、地獄の刑場にて石を山に轉ばし上げ、落つるを又も轉がし上ぐるやうに命ぜら

れしとぞ。)而してこの輕蔑はたとひ充分の根據はないとしても、考慮に價する。蓋、精神的眞理の或形相を最も片面的に力説したものでさへも、もしも諸君の眼が開いてさへ居れば教訓となるものであるからである。

以上は人間歴史の經過に於て宗教的な人と道德家との相別れた或種の別れ方である。要するに宗教家の或るものは、時に觸れて道德家を非難した。或時は最高善の存在を知らない遵奉主義者として、或時は破滅の危険を無視する空しき樂天家として、或時は神の恩寵の排斥者、或時はまた精神的平和の野鄙なる混惑者として。その代り、或道德家たちは宗教的關心の基礎をなせる根本假定を採用するものも無視するものも、信心家を非難した。或時はわれらの健全なる人間性の誹謗者として、或時は光らない光明を空しく探して居るものとして、或時はそれを自ら儲けるだけの勇氣を持ち得ない賜を恩寵から得ようと望むところの奴隸として、或時は「道德休日」をあまりに好み過ぎる怠け者として。而も道德家としての彼等の共通の叫びはアモスの時代以來いつも、「身を安くしてシオンに居る者は禍なるかな。」といふことである。

こゝに、われらはこれらの争闘のあるものを概観し了つた。私は彼等のすべてがどんな一般的

争點に同じく向いて行くかを諸君が見られんことを希望する。道徳家はもともと活動派である。彼等は善を求めぬ。けれども彼等の大假定はわれらのためになすべき或る正しきことがあるといふことである。だから、争點は、自力に非らざるわれらを救ふ或るものゝ要と、わが自力の道徳的活動によつて、大なり小なりの善を獲得するわれらの力との間にある。神聖はわれらの作るところにあらずといふこと。神の仕方はわれらの仕方でないといふこと。神の善はわれら之を爲し、或は近づくことを得ざるわれらの力以上のものであるといふことを、極めて排他的に力説する人——善を獲得するわれらの努力を輕んずるほど嚴密にこれらの事柄を力説する人は、何人も何處かで道徳家と衝突する。道徳家として、われわれ自身の精力に主として訴へることの多き、「もしもわれらはたゞ一人この世にあり、神々は盲目であつたにしたらところか」われらの義務はまさにわれらの義務であると考へるやうに思はれるほどの人は、また何處かでその高慢を嘲けり、或はその焦慮を輕蔑し、神の恩寵に對するその侮りを悲しむ宗教的な敵に遇ふ。

楮、これらの衝突は決して單なる思辨的な反對ではない。それは歴史上大なる役目を演じて居る。それは無数の人々を暗からしめた。またそれは人類の本性に根底深き動機から發達した。こゝにわれ

らに對し最も重要なことは、それがわれらの内觀の新根源の方にわれらを導くといふことである。狭い生き方にては分裂することも、一層深い一層眞なる生活の様式にてはこれを統一することも出来る。こゝにわれらの問題は新なる形式を取る。すなはち、道徳的動機及び宗教的動機の兩者に正當である生活様式はないであらうか。われらを救つて呉れる恩寵の要求と、われらの義務の追求に緊張する道徳的生活の要求と、調和するの道はないであらうか。

こゝにわれらはこの問題にわれらの道徳意識の側から近づいて行かう。蓋、今はわれらはすでに宗教的要求には親熟して居るからである。抑々人間の間には、それだけで既に本來宗教的であつて、またそれ自身のためにも宗教的であるが爲に、その結果として義務と宗教との間のこの衝突を少しも知らないやうな道徳の型がないであらうか。私は答へる。かゝる型の道徳は存在すると。世には一種の意識があつてそれを持てる人に精神的得達と緊張、平穩と活動、忍従と氣力、精靈に於ける生活と奉仕に於ける休みなき計畫との兩者を平等に要求する一種の意識がある。かゝる形の意識はたゞ高く智的に教養せられたる人にのみ屬するものであらうか。こはたゞ抽象的思惟の成果であらうか。哲學者の特別なる所有物であらうか。——或は他の一面から見れば、そは



單に無言暗黙の直覺によつてのみ起るところのものであらうか。そはたゞ甚だ敏感な神秘的氣質とのみ調和するものであらうか。そはたゞ靈のまだ幼稚な時代にのみ屬するものであらうか。そは特に或る信条に於ける信仰とのみ關係するものであらうか。これらすべての疑問に對して私は否と答へる。

この種の意識は最も謙虚なる最も物識り振らない人間の或者によつて甚だ多く所有せられる。但し、その人の生命の中にこの種の意識が著しき形相をなして居る人々も、恐らくはたゞ僅かに二三の近い友人によつて親しく認められるのみであらう。けれども彼等がその中に生きるこの精神こそは人間の所有の中で最も高貴なものである。而してかゝる人々は、われらが何かそこに純粹に人道的な活動を發見し得るすべての時代に屬し、大事業をなすことが出來たすべての人々に屬し、何等か高き宗教的意義の認め得べき要素を含んで居る一切の信仰に屬して居るのを發見するであらう。

### 三

私は次に甚だ簡單に、義務觀念そのものが基くところの動機を概觀し、それから、これらの動機が（人間の努力の最も高尚なる水準に於て）何に導くかを示すことによつて、私の意味するところのものを最もよく示すことが出来る。

われらの道德的關心は發達をなすものである。而もその發達たるや、そのすべての高尚な相に於て、宗教的關心の發達と少くとも平行するものであり、この二つの關心が相衝突するやうに見える場合に於てすらも互に平行する。道德問題はわれらの個人的經驗と社會的經驗との間に起る一定の交互作用によつて起る。理性はこの交互作用を吟味し、人生に對するわれらの計劃を統一することに興味を有する。意志は、問題の性質そのもの、上から、いつも、こゝに起る問題に關與する。蓋、道德はその他のことは兎に角として、諸君の道德は諸君の行爲に關係があり、道德的善は諸君の意志そのものが善でない限り、諸君のものであり得ないことは確實であるからである。富は單なる幸運の賜として諸君に來るかも知れない。快樂は、諸君が單に快樂に對する享樂力を持つて居さへすれば外から諸君に齎されるかも知れぬ。もしも、實に、救ひが全然恩寵によるものであるならば、救ひの場合に於てすらも、同一のことは眞であるかも知れない。けれども

道徳的善は、抑々もしも諸君が之を得ることが出来るものとせば、諸君の能動的協力を要求する。道徳的善は諸君がそれを我ものとすべく何事かを實行する場合に於てのみ之を獲得することが出来る。道徳的善の標語に曰く、「それを占有するためにはそれを勝ち得なければならぬ。」と。

故に、道徳問題は常に、「我何を爲すべきか。」といふ問ひの形式を取る。その答に對する第一の寄與は、われらの自己意識のあらゆる階段に於てわれらの個人的經驗によつて供給せられる。而してこの根源からわれらが得るところの一見單純な一つの教は「我はたゞ我の選擇するところのものを知り、且つそれを爲し得る時にのみ、我が選擇するところを爲すべき也。」といふ一つの格率に於て言ひ表はし得るであらう。—この格率は往々にして我儘な人々も主張しはするが、これを合理的に解釋し得るのはたゞ道徳の最も高き典型のみである。

この見地からすれば、私の唯一の制限は、一見するところ、私の肉體的の弱點によつて私に置かれたるところのものだけのやうに思はれる。もしも私に力さへあるならば、私がなすべき或はなすことを選ぶべき多くの事がある。けれども、私は往々にして私の意志を遂行することが出来ないが故に、私は私の遂行することが出来るところのものだけに自分を制限することを學ばねば

ならぬ。然る限り、われらの個人的經驗は、それがわれらの唯一の道徳的指導として取らるゝ時第一にその道を指示するやうに思はれる。

けれども、われらの個人的經驗のこの第一の教は決して一見するが如くしかく單純なものではない。何となれば、我の爲すべく選擇すべきものは抑々何ぞやといふ問題がすぐに起るからである。而して、われらのずつと初めに論じた如く、われらは何れもその本性上、極めて移り氣に充ち、多様な目的を持つて居るものであるから、一人で放つとけば、常に狭い生活をするのみならず、不調和な生活をするものである。従つてわれらは生活の或瞬間に於て選んでなした事が、他の瞬間に於てわれらのなさうと企てたところのものを無慘にも妨げるといふことを、事件の後にはいつも發見しつゝ生涯の多くを費してしまふのである。然らば、我意は、その儘に放つて置けば、自壞を意味するのである。これ人生の教ふところの教訓である。故に、もしも我に力あれば我が爲すべく選ぶべきものは抑々何ぞや。といふ問題は個人的經驗（たゞそれだけとして取られた）が決して確乎調和的なる方法に於て答へ得ない問題である。だから、われらすべてが遅かれ早かれ解るやうになるが如く、われらの最も頑固な制限は、選擇したところのものをやり遂

げ得ないわれらの肉體的の弱さではなく、たゞ放つて置かれたのでは、われらが志し眞に爲さうと選ぶところのものが何であるかを發見するの力我になしといふことである。従つて、正に個人的經驗は、たゞそれだけでは、決して確かな指導を與へないが故に、われらは他にどこか則るところを求めなければならぬ。

「我何を爲すべきか。」といふ問題は實際上、多かれ少なかれ、永續的に、社會的經驗に諮らなければ決して答へられない、われらのあるがまゝはもともと群居的で模倣的である。一朝訓練を経れば因襲的な動物で、實際しば／＼同類とも戦ふが、また之を愛することもし、餘りの孤獨に堪えないのみならず、仲間から全く隔離されては（われわれが既に交際によつて、一人ぼつちで居る時でも用ゐ得る技術を學んでしまはない限り）たゞたゞ情けなく思ふばかりのものである。だからわれらは、「我が選擇は何であるべきか。」といふ問題には社會的關心に可なり絶えず諮らなうでは答辯することは出来ない。而してこの社會的關心は實際豊富で人の注意を奪ふものであるけれどもそれはまた本來互に衝突的なものである。故にそれを來るが儘に受け容れたのでは、それはわれらに何等人生の規則を與へるものでない。

たしかに、社會的意志は一般にわれらにかくいふ。「汝の同胞と共に生きよ。何んとなれば、汝は同胞なしにはやれないから。いかにして生活すべきかを彼等から學べ。何んとなれば、汝は多かれ少かれ彼等に倣つて生活しなければならぬから。彼等に模倣せよ。彼等と協力せよ。―少くとも汝が要するところのものを知らして呉れるの助けとなるが如き觀念を得るに適度までは、また、汝が選擇するやうに至らしめられるあらゆることを汝の社會的訓練の上から見て充分にし遂げ得られるだけの技術を得る程度は。あまりに彼等に反抗するな。何んとなれば彼等は多數であり、而も、もし汝に對して蜂起するならば容易に汝を破壊し得るからである。故に、自分の思ふがまゝにやつて行ける力を獲得するに足る程度までは彼等の意志に従へ。」と。而して然る限りわれらの普通の社會的意志は多少とも矛盾なき相談を與へるであらう。けれども、社會的經驗はかゝる實際少しく無効果な忠告（空虚なる世間的思慮分別の相談）以上には、それが日々われらに去來するに當つて、何一つの理想をも供給せず、何等實際上普遍的な規則をも設定しない。蓋、私は社會的關係の範圍にうろついて居る限り、時とすると同胞を愛し、また時とすると彼等に對して反感を持つからである。或時は彼等の惱みに憐憫の情に堪へずして私は之を助けたいと

熱望する。而も或時は彼等は我が敵である。かういふ時にはもとより私は彼等を粉砕しようと試みる。かくて、社會的傾向は一つとして、それがわれらの日常の社會的經驗の經過に於て、われらに來る時に、いかにして自毀を免るべきかといふことをわれらに告ぐるに足るほどな指導を與へるものはないのである。何んとなれば私の愛の心及び憐みの情は我が心裏の社會的貪慾心と相闘ひ。また我が敵と戦ふからである。かゝる限り私は渾沌たる状態に残されるのである。

然らば、もし私が私の態度を要約するならば、私は實に、私の可能なる限り、而して私の選擇せるものが何であるかを發見し得る限り、また自己自身の選擇によりて自分を妨けることを避けることが出来る限り、私の選擇せるところのものを爲せと提言するものである。而して、いかにして選擇すべきか。何を選択すべきか。またいかにして私の意志を遂行すべきか。を學ぶの術は私に取つては、私は群居的であり模倣的であり、習俗化されたものであるが故に、一の社會的技術である。けれども、他の一面から見れば、私が普通に學ぶところの社會的技術にして、人生に於ける我が全體の目的を我に教へ、或は我をして矛盾なき自我たらしめ、或は多數の人士がその中に活動してその生を過して居る此の自己妨害的努力の渾沌から我を逸出せしめるに足るところ

のものは一つもない。

#### 四

諸君は既にわれらの既説の論議から、社會的關心及び個人的關心の此の渾沌によつてかく惹起せられたる状態を、我が理性はいかに見るかといふことを知つて居る。この渾沌がいかにほんとしてあり又いかに混亂して居るかは、諸君が毎日の新聞紙上に見るところの普通の社會生活の或形相に關する日々の記事が解説をなすに役立つであらう。かく新聞紙上に現はれるこれらの王者と人民。これらの謀叛人と死刑執行者。これらの罷業者と雇主。これらの商業家と破産者。一時勝利を得たかのやうに見えるこれらの人々も、今や正に敵或は壓迫者の足下に蹂躪されて居るやうに見えるこれらの人々。彼等は果していかなる處世術に現に従ひつゝありまた嘗て従ひ來つたか。諸、各人は各人のやり方で、彼自身の意志を持つようを選んで居つたやうに思はれる。けれども、各人は社會的動物であるから、その仲間から、自己の處世上一切の空しき小技術を學んだ。各人は自己の仲間の或者を愛し、また他の或るもの、敵であつた。各人は自己の生活標準（かく

露はに暗示せられたるすべての動機の多少とも偶然的にまた不安的な或る統一に依る標準)を持つて居た。日々の新聞は、いかにしてこれらの或者が他の者は失敗して居る間に一時その目的を達したかを告げて居る。私が諸君に向つて注意せんことを乞ひ、また、各人の理性が一層光耀されたる瞬間に彼に示すところのものは、或る瞬間に於て妨げられるこれらの人々の各は正に(抑々彼か自己自身の意志を持つた限り)、嘗にその仲間によつて妨げられたのみならず、實にまた自己自身によつて失敗せしめられたのであるといふことである。何んとなれば、彼のこの特殊なる意志は彼自身の目的に相應するに足るだけの大きさを持たなかつたところの或る出来心あつたからである。例へば、戀に破れ、或は事業に破れ、政治上に失敗した人々の經歷は破壊される。その名譽は失はれる。而も、まさにかゝる經歷を目標とし、まさにかゝる種類の名譽を價値ありとするものは、實に社會的動物たる彼の意志であつた。もしも彼が隱者たることを選び、或は聖者たらんとし、ストア主義者たらんとしたであらうならば、まさにかゝる經歷、かゝる名譽は彼にとつて何であつたらうか。彼戦ふことなかりせば、どうして彼は敗れ得ようか。而して彼の失敗、それは何に基因したか。疑もなく、彼の敵の熟練さにもよるが、それと同様に自己自身

の或る選擇によるのである。彼は自分自身の投機を遂行するの自由を欲した。彼はその自由を得た。そして彼の大身代を失つた。彼は誰を愛すべきか、またいかに愛すべきかを選択するの自由を欲した。彼は自分の思ふ通りをやつた。そして自己の目的に失敗した。彼は自己の野心に従ふことを選んだ。その結果は今見る通りだ。

以上は、普通の社會的争闘の經過に對する完全に合理的なる反省である。こは一層深く考へる瞬間に於ては、この論議の初頭に於て救ひの宗教的理想を定義せしめた種類の反省を暗示する。けれども、今はたゞこの型の反省はわれわれを導いてわれらの能動的生活を指導する或實際的規則に至らしめることを目的として居るやうに思はれる。蓋、われらの注意は今や救ひと呼ぶべき條件の上に固着せず、われら自身の眞意志に従つて或事を爲すことの規則に固着して居るからである。この規則は消極的にいへば、すなはち「汝のあるがまゝの個人的自我の中に、或は遭遇するがまゝの社會的經驗の中に、汝の意志如何、汝はいかにして汝の目的を達することを得るやに關する全體的眞理を求むる勿れ。」といふことである。もし諸君にして自らかくの如き道德的內觀の根源に閉ぢ籠つてしまふならば、たとひ、幸運によつて、彼等のやうな汚辱は蒙らないに

ても、諸君が新聞紙上に於て讀むところの、破産せる投機者、罷業家、擯斥せられたる壓制家、政治家、殺人者、廢王、失敗せる革命家等がその個人的及び社會的意志を二つながら共に妨げられてしまつたと全く同様に、諸君は自分自身に逆らひ續けるであらうからである。要するにその個人的と社會的との何れに拘らず、出來心に信用を置くなといふことである。

積極的方面からいへば、こゝに問題となる規則は「汝の眞の選擇如何。いかにして汝は自身を妨げずに生き得るかを見せんがためには、汝の生活の原則をして、いかなる運命が汝を取巻くにせよ、汝は内心に「我は眞に失敗したのではない。何んとなれば我は自分の企てたとほりに行動したのだから、そしてまた向後もなほさう行動したいと思つて居るとほりに行動したのだから。そして、運命の我に齎らす結果はどうあらうとも、或は我が一時的気分はいかに變化しようとも、或はあれやこれやの社會的移り氣が人をして我を愛するやうにし或は擯斥するやうにするすとも、我は我が意志を持つて居るのだから。」といふことが出来るやうなものたらしめよ。」といふことである。斯くの如きは、人生をかく吟味する際に、諸君の理性の最初の使用が暗示するところの道德的内觀である。或は賢人の道德的常識が屢々言つて居るとほり、こゝに問題となつて居

る規則は「汝の個人的生活及び社會的生活の意義をいかに靜かに考へて見ても、汝の行動の原理を悔ゆる理由を決して持たざるやうに、決してまた「かく選擇することによつて我は我自身の意志に妨げをなした。」といふ理由のないやうに行動せよ。」といふことである。

希くば、諸君がこれらの言明がその最も低い名辭、すなはち「汝の行動の原理を悔ゆる理由を決して持たざるが如く行動せよ。」に引下げられたのを聞く時、たとひそは既にカントの有名なる倫理學に於て抽象的表現を得て居るに拘らず、人生に對する一種常識に縁遠くない勸告をいひ表はすであらう。

たゞこの勸告は（諸君の正當に主張せらるゝが如く）もしもそれが自然的な人—發展するがまゝの本能を本能と思ひ込み、自己を魅し攪亂すると感ぜらるゝがまゝの社會的世界を社會と理解し、そして多少の慎重さと辛棒とを以て、自己のこの世に於て眞に成さんと欲するところのものを見出さうと試みて、躓いてしまつたところの自然的な人にいひかけられるならば、實に一見全く希望なき勸告である。かゝる人は叫び出すであらう。「しかしながら、私はどうして、それにすがつて居さへすれば、人生をどのように合理的に考察して見ても、決してその原理に従ふことを

悔いがないやうな生活原理を發見することが出来るであらうか。」と。

## 五

この點に至つては、遂に人生そのものをしてこの問ひに答へしめよ。私は私が心に抱懐する原理そのものを説明するために、言葉を準備しつゝあり、いかなる新事例を選ぼうかと考へて居つた時に、その日の新聞紙は例の不合理と不幸との報導と相並んで、一人の公僕の近づかんとする最後を報じた。この公僕はイダ・レヅキスといつて、ナルラガンセット灣のライム・ロツク燈臺の燈臺守として五十年間勤めた女であつた。彼女は人を救助した英雄的行爲のために屢々報ぜられて五十年以上も前から世人に知られて居つた人であつたが、今や彼女は遂にその死の床に横はつて居るのであつた。その後彼女は死んだ。私は官報が報告した以外のことは、彼女の經歷に就て一の知るところがない。彼女はその職責上彼女の義務が要求した限りに於て、この多年の間雨の夜も暴風の夜も引續いて燈火を點し續けたのである。彼女はいろ／＼の場合に於て全部で難船者十八人の生命を救つた。彼女の職業はかくて極めて危険なものであつた。なほすつと堪へ難かつ

たに違ひなかつたことには、彼女の職業は日々の忠實を確實に要求した。要するに、そは大体に於ては暗い卑しい職業であつた。但し時折、彼女の熟練と熱心とのため、並びに偶然の機會によつて、この特殊なる燈臺守は或意味に於ては有名になることは出来はしたが。

しかしながら、華々しい經歷を追はうといふことが決して彼女の本來の計畫でなかつたことは確かである。もしもわれらが公共的出世を求めると、われらは燈臺守の職業は選ばない。私はどうして彼女がこの職業を見出すやうになつたのかを知らない。彼女は或はそれを撰擇したのでさへないかも知れない。けれども、彼女が一旦その職業に就くや、いかにして自己の生活を生くべきかを選んだことは確實である。かゝる生活を生きたことが、世間に對して、いかなる意義を有するかといふことは、少し考へたらすぐに解るであらう。けれどもかゝる生活をそのままにありべきが如く生きるためには、いかなる精神が必要であるかといふことについては、かゝる公僕が或る程度まで公共に知られた年來の功績を以て死んで呉れて、われらの負ひめと彼女の献身を思ひ起さして呉れるまでは殆んど考へない。

私がこの事件の書いてあるのを讀んだ新聞紙は、その意義の評論の材料としてまた次の出來事

(どの位正確であるかは知らないが)を報じた。この事件については、恐らく諸君の或者は私よりもずつとよく知つて居るであらう。私はその言葉のまゝを引用する。(「ボストン、イーブニング・ト

十月二十三日)  
所載」)

「今を去ること四十一年以前、ミシガン湖リツトル・トラバース灣の燈臺守ダニエル・ウキリアムスは、遭難船員救助のためボートに乗つて出かけたが、生きて還らなかつた。三日間暴風雨は續いた。けれども、心痛める彼の寡婦は他人の生命を忘れなかつた。そして毎夜うねつた階段を昇つて燈火を點じた。彼女はこの義務を、政府が事情を知つて彼女にそれを續けてやることを命ずるまで履行した。而して、彼女は今もなほその位置にある。」

嘗に燈臺守のみがかゝる生き方をする人々ではない。世には或る家庭―缺乏や疲勞や痛ましき悲しみが永い間屢々見舞つて、將にそれを一度ならず二度ならず壓服せんとしたにも拘らず、諸君の多數によく知られて居る忠實なる人々が、運命に抗して數十年の後もなほも光りを點してその位置に止つて居る家庭、にも無數の光が照り續いて居る。

嗚、私は諸君に訊ねる。かゝる生活を支配する精神は何であるか。と。それは歌や物語によく諳

はれる精神である。蓋、人はつねに彼等がこの精神の發現たる印象的なる事例に遭遇する時それについて語ることを好むからである。けれども私の遺憾に思ふことは、人々がかゝる歌や物語を繰返へす時に、それは實際親しさが輕視を助長するといふことにはならないにしても(蓋、これらの全精神はかゝる行爲を思ふことによるこびを感じるからである。)虚の高調に導く傾向を生ずるといふことである。われらはかゝる生活の劇的英雄的出來事に注意し、その物語の華やかさ竦動させるやうな姿に魅される。故にわれらは何んとなくたゞ逸話や偶然の事變を取扱つて居るやうに思はれる。こゝに、われらは例外的な英雄的行爲の表はれの背後に、それ自ら年來の熱心と訓練の結果であるところの個人的性格―これらの劇的な而も要するに最上の意義のあるものではないところの機會に準備して居るところの性格、がなければならぬといふことを充分に考へることを缺き勝ちである。たゞ、われらは心中に於てかゝる場合の系列に目を通す時のみ、われらは嘗に大なる機會に適するのみでなく、合理的生活のあらゆる瞬間に適するところの精神、或一二の職業のみでなく、あらゆる種類の人間と條件とに適する精神を取扱ひつゝあることを知るのである。



問題の精神は彼等の旗印のためによるこんで死に面する勇士の生涯に於て往々よく説明せらるるところのものである。―但しこれは、彼等が單に野獸も亦それに面するが如く、(彼等の戰闘的血潮は湧き立つが故に)でなく、いかなる條件が「人間の破滅を防ぐ」ことが出来るかといふことも明瞭に見得る理性的な人が死に面するが如く、面した時に於てのみのことである。これらの勇士が、ほんとうに今私が語りつゝある精神を持つて居るかどうか、即ち、未だ身に新たなる悲みのために胸は一抔であるにも拘らず、現に自分の夫が奪ひ去られたその暴風雨の間を、なほも寂しき階段を攀ちて、夫の永久に手を附けることの出来なくなつた燈火を點した寡婦にも全く同様に表はされた精神を、持つて居るかどうかをわれらが知ることの出来るためには二つの試験の方法がある。勇士と燈臺守が同一精神によつて動かされて居るといふ第一の試験は、この精神を以てほんとに充實せしめられて居るところのこれらの勇士は、戦時に於けると同様に平時に於てもその精神によつて生きることが出来るといふ事實によつて供給される。例へば、運命と義務が彼等にさうすることを要求する時には敵に降服することすらも出来るといふこと―リー將軍がアツポマトックスでグラント將軍と會見した時に示したのと同じなる落ついた威嚴と不拔の勇氣、敗

戰の數年はいふに及ばず戦後に於てもなほそれを切り抜けて生きて行かねばならなかつた新な勞苦の永の年月の間に於ても、彼を鼓舞したのと同じ精神を以て降伏するといふことである。即ちこの勇士は、もしも眞にこの精神に鼓吹されて居るならば、死に對すると同様に生に對する用意が出来て居り、戦争に對すると同じく平和に處するの準備が出来、危険を物ともしないと同じに失敗をも意としない筈で―たゞ恐るゝのは懶惰と不名譽奉仕の放擲のみである筈である。今一つの試験は、この勇士はこの同一精神が他の職業或は他の奉仕、特に敵によつて表現された時に、それを平靜なる誠實心を以て認め之を尊重するの用意が出来て居るか、どうかである。蓋しその用意が出来て居さへすれば、その勇士は、戦争はたゞ運命の事變に過ぎないものであり、彼自身の行爲の眞精神、はまさにこゝで死に面すること、或はこつちの側で戦ふことを彼に要求する特別な機會とは關係なく何處にでも表現され得るところのものであると知つて居るからである。もしもその勇士の精神がこの二つの試験に及第するならば、彼の忠誠は、寂しき燈臺守がその憂愁に於て示し得たと同様に光榮が待ち設けて居る英雄によつても示され得る型のものである。なほ、この精神は殉教者たちがその信仰のために死んだ時に示し、辛棒強き母たちや父たちが

たとひ暗く卑しいものではあるとはいひ、眞剣に家庭のために辛勞する時示し、戀する人々が前にブラウニング夫人から引用したやうな言葉をいふ時に表白せんと思ふところの精神そのものである。而もかゝる事例のみを述べて居ると、こゝに問題になつて居る精神はたゞわれらが戦争を思ひ、勇敢なる死を用ひ、憂愁に對する英雄的の勝利を思ひ、或は戀人の起誓を思ふ時に、われらの想像を充たすが如き、陸離たる情緒約色彩のみに關係して居るが如く諸君に思はしめるに至る恐があるから、私は直ぐに、諸君の或者が人生の他の極端と思はれるであらうところのものに轉じよう。竊かに思ふに、ニュートンの如き、マツクスウエルの如き、或はダーウキンの如き人の一生の事業として敢へて惜しからずとなさしめたところの、科學に對する靜かな勤勉な專注は、また、この同一精神發露の他の一例而も甚だ偉大なる事例である。―同じき緊張に充ち、理想化されたる對象に對する同じき熱愛に充ち、就中最もよきことには、それがいかに辛からうとも、未知の運命によるこんで面接せんと心に充ち、いかにそれが惜しからうとも、必要とあらば一時的の享樂は人類が要とする大善の追及のためには―即ちわれら人間がその中にわれらの運命を開拓することを要求されて居る驚くべき世界に對する理解の追及のためには、之を放擲せんと

情に充ちたる事例である。燈臺守も科學者も、共に人間の指導のために、光りを保ち光を擴げんとして居るといふことが單に皮層的に似て居るといふみではない。

燈臺守、母、勇士、愛國者、殉教者、眞の戀する人、科學研究者。―彼等はすべて次のと同じ本質的精神を示し得るのである。

「長き寢ずの番を通じて辛棒強く

誰も見ざるに最も働らく」

こは、幸運よりも優つて居る。何となれば、幸運よりも價值ある或ものが彼等をその職に招く様に思はれるからである。かゝる人々は失敗しても恐れぬ。故にニュートンは月の運動に對する自家の學說に缺けた點の證明を求めて一時失敗した時ひるまなかつた。彼は科學の新なる進歩が、何故にあの範圍に於ては證明が缺けて居つたかを示して呉れ、彼の必要としたものを彼に齎して呉れたまで、説明を急いで發表して名聲を得ようとするやうなことは微塵もなく、着實に研究を

續けた。リーも亦それと同じく戦後新なる生涯に轉じた。かの寡婦も亦これと同じく、夫の失はれたにも拘らず、否、失はれたものゝためにこそ寂しい階段を攀ぢた。殉教者たちもこれと同じく獅子に面した。これらすべての人々は、久しきに互れる勞苦、或は途方に暮れた憂愁を通して、彼等をして自己の生命の主たらしめ、一切生命の主と合一せしめるやうにして呉れたところの精神によつて支へられた。

われらは既にこの精神を説明した。今やわれらはかゝる生命を支配するところの原理は何ぞやと問はう。その原理は、吾人が或る時には全然それに没頭しても、後になつて人生を合理的に考へて見ると、そんな風に生きるやうに選ばねばよかつたと悔ゆるやうなものであらうか。あるまいか。もしもそれはそんな原理ではなく、之とは反對に、人生を合理的に見ればいつも承認されるやうな原理であるならば、われらはその原理のいかなるものなるかを知り、それと偶然的條件（われらの想像に對してその原理を飾つたり變へたりするところの）とを選び分け、それがいかにしてあらゆる種類の合理的生活に適用されるかゞ解るやうにそれを讀まう。——かくて初めてわれらは道德問題の解決を手に入れることが出来るであらう。而してその時われらは、もしもわれらに

して實際合理的であるならば、いかに生くべきかの智識を得るや否や、われらは何を實際に選ぶべきかゞ解るであらう。

## 六

もしもわれらにして、今私が例示したやうな忠實な生活を注意深く考へるならば、こんな風に生きることを學んだ人々のあるものは、單純で無反省であるかも知れないが、彼等を導くところの動機は慎重な反省の多分に價するが如きものであるといふことが解るであらう。

私が今その人のことを思つて居り、かゝる事例がわれらに或るものを教へる人々は第一に、個人的性格の多大なる豊富さと強さを持つて居る個人である。彼等はたしかに剛毅である。彼等は自己自身の意志を持つて居る。彼等は選擇をなす。故に、彼等の個人的經驗が彼等の道德的に寄與するところは大である。こゝに或人々のいふが如く、彼等を單に「利他主義」「忘我」とたゞ他のために生きる」といつてしまふのは間違つて居るであらう。もしも諸君が暴風雨中の難破船の上であり、燈臺守が、諸君を救ふために出掛けて來たとしたら、彼は常に「他人のために生

きて居つた」人だから、彼は決して熟練に短艇を操つることを好み、或は單に水を愛するばかりに泳ぐことが好きだといふやうな利己的な享樂には身を任せたことはない。といふやうな信念を持つたとてそれでは諸君は満足しないであらう。否、それとは反對に、諸君は、もしも出来るならば、彼はいつも短艇を操つり泳ぎが好きで、自分が水上で勇敢なのが自慢なのも當然であると思ふのが愉快であらう。よろこんで或は正當な誇を以て水上に訓練された自我を持つて居れば居るほど、その人はそれを以て諸君を救ふことの出来る一層大なる自我を持つといふことになるであらう。われわれが絶對的な必要に迫られた時には、決して、或る人達のいふやうに、われらの窮境に於てわれわれを救ふために、「自我の考のない」人を欲するものではない。われらは今やわれらを救ふに際して示すことの出来る熟練と勇敢とを、彼等が個人的にそれが好きであるがために、訓練されて居つたところの強壯なる救助者を要求する。故に、個人的な自己發展は、危急に際してわれらがその人の忠實を尊重するところの人々に是非屬して居らねばならぬ。而して、もし人々にして何か實際上の奉仕に効果あるやうに忠實ならんと決心する時は、彼等の行爲の原理は個人的自己發展を含むのである。

第二に、私がこゝに考へて居るところの型の人々は強い社會的動機を持つて居る。彼等の忠實さは、やがて或る社會的に重大なる招喚の意義の彼等の眼に於ての認識である。而してこはいふまでもなく、それ以上進んで説明することを要しないほど明白な事實である。

けれども、第三に、これらの人々は、私が少し前に例示したこれやあれやの個人的成功社會的成功の形式に於ける機會や不定の關心と彼等の社會的意識の型とを、區別するところの一つの動機によつて導かれて居る。實に彼等には特別なる恩寵——天よりの賜、けれどもそれを獲得するの用意あつてのみ受領し得る賜——彼等にかく與へられたる生活を愛しそれに奉仕することなくば所有することの出来ない高價なる寶、——彼等の隠すことの出来ない、而も新なる大利を得んがために用ゐねばならぬ才能——彼等には彼等自身に屬するやうに思はれず、彼等にそれを増大することを要求する彼等の主に屬するやうに考へられる才能が與へられて居る。この恩寵この賜こそ彼等の目的原因と呼ばれるべきところのものである。時とすると、この目的原因は戀人の眼の深所に見らるる愛くるしい様子に於て彼等に現はれ、或は軍旗によつて象徴され、或は歌を通して表現される。時とすると、彼等はそれを一層嚴肅に考へて、「科學」「奉仕」或は「眞理」と名づける。

時とすると彼等はそれを明かに宗教的對象と考へ、賢くも「神の意志」とよぶ。けれども彼等がこれをいかに考へるにせよ、又はいかなる名を與へるにせよ、それは諸君が容易に知り得るところの一定の形相を持つて居る。

けれどもこの精神を持つて居る人々に取つては、この目的原因は、たとひ、戀人の場合の如きは、熱中する人はそれを愛する一人の自我に專注するけれども、決して一個人にのみ限られたものではない。蓋、戀人たちと雖も彼等は愛するものを理想化し、彼等の愛を語る場合には、彼等が實際に奉仕して居るところの人がどの個人よりはずつと優れて居るものでない限り、眞であり得ないやうな名辭に於てするといふことを知つて居るからである。われらが説明しつゝあるやうな或る目的原因に奉仕するかゝる人々に對する根本的目的原因は或る考へられたる而も同時に實在であるところの靈的統一で、多くの個人生命を一つに結び、従つて、われらが理性の世界の實在を超人的であるとなすと同一なる意味に於て、本質的に超人的なるところの統一である。けれどもその目的原因は、それだからとて決して單なる抽象ではない。それは生きた或るものである。「我が家」「我が家族」「我が國」「我がつとめ」「人類」「教會」「我が藝術」「我が學問」「人

道のため」或は今一度、「神の意志」かゝるはその目的原因につけた名である。吾人はそれらすべての對象を以て、安全に具體的にして必要に迫られてる人々が欲し要求するところのものゝ生きた表白と考へる。けれどもまた吾人はこの目的原因を以て多くの個人をその奉仕に於て統一し、彼等が要求するところのもの、即ち、靈に於て一となすべき機會を彼等に充分に與へるものと考へる。然らば、この目的原因は人間的需要に基き、人間的努力を含み、人間的意識及び人間的愛、欲望、努力のすべてのあたかゝさを以て生きて居る或るものである。吾人はまたこの目的原因を以て、その範圍に於て、その豊富さに於て、統一に於て、またその目的及び實行の合理性に於て超人的なるものと考へる。

目的原因とは實にかくの如きものである。而も個人がそれを愛するは、いかなる場合に於ても彼の氣質や發展の機會による。それが考へられ奉仕されるのは社會的經驗の事項である。個人的或は社會的の移り行く出來心に従ふよりも、この目的原因に奉仕するが一層價值あることだといふことを知るのは、個人が自己の生活を一層廣き統一に於て見渡す時に何時も得るところの内觀である。それに奉仕するためには創造的努力を要するといふこと、それは積極的行爲によるの外

は奉仕されないといふことは、その目的原因のいかなるものたるかを知るすべての人の認めるところである。かゝる奉仕に於てこそ吾人は、無我を通じまた無我になつて却つて自己表現を見出すといふこと、まさに吾人が自我を捨てるが故にこそ却つて一層自我的であるといふこと、これかゝる目的原因を發見したすべての人の日々の經驗である。かゝる奉仕は吾人をして新らなる勇氣を以て運命に面せしめる―蓋、この目的原因の奉仕者にはいかなることが起らうとも、彼は彼自身の幸運を求めつゝあるにあらず、目的原因に幸あれとのみ求めて居り、彼自身の失敗は度外視して居るのだから―といふことはこゝに問題となつて居る全精神の成果である。

かゝる目的原因に對する實際的態度に名づける名として私は、古來からあるよき言葉、忠誠といふ文字よりもよい名を知らない。そこでわれわれは忠誠の生活を支配するところの原理を説明するの用意が出来て居る。前述の事例はすべて忠誠の事例である。その各に於て、或る者は一個の目的原因すなはち自己自身の個人的水準以上なる一つの生きた靈的統一を發見して居る。この目的原因は決して他の人間の單なる累積や集合ではない。それは多數の同胞が統一された一個の生命である。忠誠なる原理の最も簡単な説き明かしは「汝の目的原因に忠誠なれ」といふ格率

である。この原理を今少し充分に説明すれば「汝の全自我を汝の目的原因に專注せよ」といふこととなるであらう。かゝる原理は「汝自身を失へ。」或は「汝自身を棄てよ。」或は甚だしきに至つては單に「汝自身を犠牲にせよ。」といふことを意味しない。そは「汝の能ふ限り、豊富にして充實した強い自我となれ。而して後に、汝の胸、汝の魂、汝の心、汝の力のすべてを盡して、汝自身を汝のこの目的原因、この靈的統一、そこに個人が統一され得、而して、彼等にして忠誠なる時は實際上個人がそこに一個の生命（その意義は自然的人間の何れの意義よりも超れまたその全部の個々別々の意義よりも以上のものなる）に統一さるゝところの統一に專注せよ。」といふことを意味する。

けれども、かくてはまだ、あらゆる徹底的忠誠的行爲を實際に鼓舞するところの原理を充分に説明したことにはならない。何んとなれば、既にわれらの見たるが如く、勇士たちは、この義務は（もしも出来得るならば）彼等の敵の敗北を仕遂げるやうに彼等に要求するといふ事實にも拘らず、彼等が敵の忠誠を賞讃し、何處に忠誠を見出すとも之を讃むる時にこそ、彼等の忠誠の精神を最もよく示すものであるからである。われらは敵の忠誠を讃むるかゝる精神を騎士道の精神と

いふ。諸君も私も、リー將軍はその勝利の餘慶を今吾人が享受して居るところの同盟側の敵であつたことを記憶するであらう。而もわれらは、彼を以てその自らの志向に於て眞の忠誠の精神の模範であると思ふ。またさう見なければならぬ。何んとなれば、彼は彼の持つて居たところのすべて、またあつたところのすべてを、彼が以て自己の目的原因と思惟したるところのものに與へたからである。敵の忠誠の意義に對するかゝる内觀を騎士道は要求する。故にこの騎士道の精神を含める忠誠の眞精神は、また一層深き一層普遍的なる形式に於ける忠誠の原理を説明することをわれらに要求する。忠誠の眞の原理は、實際上、二個の原理の統一である。その第一は忠誠なれといふことである。而して第二は次の如くである。汝の目的原因によく忠誠なれ、即ちよくこれを求め、よくこれを受け容れ、よくこれに奉仕せよ——依つて以て、全世界の汝の同胞のすべての忠誠が、汝の模範によつて、汝の感化によつて、いづこに忠誠を見出して、それを愛するといふ汝自身の心根、並びに、汝が汝の行爲に於て模範を示すところの種類の忠誠によつて、汝の力の及ぶ限り、助けられ、増進せしめられ、増加せしめらるゝやうに。

この原理は實現され得るか。それは生活を指導し得るか。それは新らしきを産まぬ抽象であるか。

こゝに寂しき燈臺守の生活と行爲とをして答をなさしめよ。われらの中何人か果して（彼自身の目的原因はいかなるものであるにもせよ）かゝる献身的なる人の忠實なる行爲によつて、自己の忠誠心を教へられ助長せしめられないものがあらうか。然らばかゝる献身家は、實は、單に彼等自身の私目的原因に忠誠なるのみではない。彼等は、一切忠誠なる人の目的原因に忠誠なのである。蓋、眼を開いて人生を達觀すれば、忠誠なる人のすべては、時あつてか、機會や人間の盲目さが彼等をして互に相戦はしむる時ですらも、事實、靈的同胞なのであるからである。彼等は共通の目的原因——彼等自身の選擇彼等自身の奉仕によつて普遍的忠誠を増進せしむるの目的原因を持つて居る。騎士道の精神はたゞこの事實を意識させるだけである。忠誠なる者は忠誠なる者によつて鼓舞され彼等によつて支へられる。彼等のすべては忠誠なるものを親類と思ひ、同朋と思ふ。具體的に忠誠であるところの人、即ち、多くの人類を一個超人間的統一に結ぶところの或る目的原因に全然自己を擲つ人は、何人にもあれ、まさにその限りに於て、實に全人類の目的原因に奉仕しつゝあるのみならず、合理的なる靈的世界全體の目的原因に仕へて居るのである。然らば私は繰返へしていふ。一切忠誠なる者の眞の原理は、それが同時に、普遍的忠誠の目的原因の

増進たるが如く、汝自身の目的原因に忠誠なれ。である。

緒、かく公式化された原理については、私はそれは普遍的道德の基礎となるに適したる原理であるといふことを斷言する。その保證、その價値を諸君がこの一つの原理から引き出すことの出來ない義務といふものは一つもない。徳といふものは一つもない。

慈善といひ、正義といひ、誠實といひ、果斷といひ、熱心といひ、正直、有能、賢明なる自我主張、油斷なき自制、忍耐、運命に負けざる、失敗に際しての忍従、諸君の日々の社會的義務、諸君の個々の自己發展、諸君の人權と威嚴、義務の招命に對する忠順、諸君の自ら認むる自己犠牲、諸君が一人一人それを要求せられるところの獨自なる道德上の任務に對して合理的に矜誇を感ずること——以上のすべては丁度今こゝに設定した原理の精確なる理解と發展とによつて、正當に定められ、保護せられ、評價せられ、實施せられるのである。

けれども私は、實に、内觀の根源について語つて居るので、少しもその成果について説いて居るのでないから、諸君はこゝにかゝる道德法から演繹されるものについては私に期待されたいであらう。しかし、私のこの斷定は決して單なる大言壯語ではない。私は別の著書に於て繰返へし

繰返へし忠誠を説明しその原理を人生にあて嵌めやうと努力した。今はたゞ、私が只今諸君に暗示したるが如き事例に於て諸君自ら忠誠なる人々の生活を考へ、その教ふるところいかんを見られんことを乞ふといふを以て足れりとする。諸君がかゝる考察をなさるゝの助けとして私はたゞこゝに吾人にしてもしたゞ忠誠であるばかりでなく、眼が啓かされて居るならば、それ自らに於ては忠誠の精神を體現して居る生活の目的原因或は様式のやうに見えながら、而も他人の忠誠を輕んじたり、或は他人の忠誠を食ひものにしたたり、他人がそれに對して忠誠であり得るやうな目的原因を彼等から奪ひたるやうな傾向を含み或は之に依存して居るやうな目的原因、生活様式は到底吾人の之を受容することを得ざるものである。といふことを諸君に注意しよう。諸君の隣人の忠誠を破壊することによつて生きるやうな忠誠は決してそれ自身の眞の内容に調和するものではない。而してこれ實に慈善及び正義が忠誠なる精神の成果である所以である。而して又之れもしも諸君の目的原因、諸君の忠誠の行爲にして正しく受容され遂行されるならば、すべての合理的人間の共通の利害は正に諸君の忠誠によつて、諸君の力の許す限り、奉仕されるといふ所以である。諸君の特別なる目的原因はいかにともあれ、(而して諸君の特別なる個人的目的原因——諸



君の愛、諸君の家庭、或は諸君の職業——を諸君は持たねばならぬ。諸君の眞の目的原因は、合理的存在から成る全世界の靈的統一である。諸君はこの動機を、諸君の力に及ぶ限り、諸君の一々の行爲によりて増進するのである。

而して是れ亦實に忠誠の原理は、そが一度諸君によつて正しく規定せられ奉仕せらるゝや——諸君の自我の全精力と力とを以て奉仕せらるゝや——諸君の生活をいかに眼を開いて達觀して見てもかく奉仕したことを決して悔い得ないやうな原理である所以である。然らば、これこそ正にわれわれの求めつゝあつたところのもの——一個絶對的な道德原理、一切の行爲に對する指導である。

けれども、これとても、忠誠の精神が諸君に教ふべき意味の全體ではない。かく具體的に而も普遍的に規定された諸君の目的原因は、また或る點に於て、諸君が常に（而も今や正直に何等感情的の虚飾なく）それについて、ブラウニングの詩の戀人が、かの私が第二講に於て引用せる抒情詩で

世界——いかにそは辱めもて

人生を圍める

汝の顔がそれなりし

御神自らのほゝ笑み現はれるまで！

といつたところのものをいふことが出来るやうなところがある。何んなれば、諸君の目的原因はまづ初めに諸君に靈的生活のこの統一を愛するやうに教へるところの或るものゝ現前によつてのみ諸君に啓示され得るものであるからである。この現前は、どこか人情的な、なつかしい、甚だしく、蠱惑的な愛くるしい形に於て諸君に現はれるであらう。それを諸君に初めて啓示するものは一人の人格——顔——或は多くの人間の生きた融合であらう。その何れにせよ實に諸君はそれを自己の目的原因として選ぶことが出来る。こゝに諸君の意志が必要である。忠誠は決して單なる感情ではない。そはある目的原因に對する自我の意志的な實際的な徹底的な没入である。けれども、諸君はまづ第一にそれを發見するのでなければ、決して諸君の目的原因を選ぶことは出来ない。而して諸君はそれを人間的な形に於て發見しなければならぬ。而して諸君はそれへの奉

仕を選び得る以前にそれを愛しなければならぬ。

故に、諸君はいかに深く忠誠のみに没頭しても、諸君は決して忠誠を單なる道德とは認めないであらう。そはまたその本質に於ては宗教であるであらう。そは常に諸君に對しては恰も神の恩寵が常に上から來るといはれて居るが如く、外から、上から、諸君に來るところの對象の發見であるであらう。従つて、忠誠は常に道德的内觀の根源たるのみならずまた宗教的内觀の根源である。眞の忠誠の精神はその眞本質に於て道德的關心と宗教的關心との完全なる綜合である。その目的原因は一の宗教的對象である。それは諸君の窮境に於て諸君を見捨てず、諸君に救ひの道を指示する。諸君の世界へのその現前は、諸君に取りて、靈の世界からの賜、諸君が自ら持つにあらず、諸君に對して救ひの道を示さんとする世界の好意によりて持つところの賜である。この賜は第一に諸君の愛を強要する。故に、その代りに諸君は無報酬に諸君自身を與へる。

それ故に忠誠の精神は、單なる道德家と恩寵の徒との間のこの痛ましき悲劇的なる争を完全に調停する。そはまたその統一的本性上調和的なる仕方にて、諸君の個人的經驗がその要に於て求めるところのもの、理想を決定し、諸君の社會的世界が相共に呻吟し勞苦しつゝ、われらの共

通的救ひとして渴望して居るところのもの、理想を定め、理性が世界の意味の神的統一として認むるところのもの、理想を規定し、合理的意志が神の意志として奉仕すべく諸君に要求するところのもの、理想を決定するの道をも供給する。然らば、諸君に恩寵が増し諸君が奉仕を持続するにつれて、忠誠を通じて、常に絶對的な道德的内觀のみならず、絶對的な宗教的内觀も亦漸次、確實に諸君に顯示せられるであらう。

蓋、忠誠は決して「道德的休日」を是認しないけれども、諸君に示すに靈的世界の意志、神の意志を以てし、辛苦に安きを與へ心痛のたゞ中に平和を與へるからである。而して忠誠はまた、諸君を決して神秘的恍惚の状態には入れないが、合理的全世界を相結ぶところの法則を諸君に開顯し、諸君に對して神の恩寵を示しはするが、諸君の全自我を緊張的に活動にゆだねることを要求し、何等哲學的訓練は要求しはしないが、諸君に告ぐるに最高の理性のみが是認し得ることを以てし、單なる休徵とか奇蹟とかいふことには關係しないが、いかなる運命も奇蹟も神業も起らば起れ、諸君は、諸君が忠誠である限りそこに常に安心して居りまた居らるべき靈の領域の恩寵に充ちた永遠の奇蹟を諸君に示すのである。

而して忠誠の精神は諸君自身の要と理性とを同時に表現し、また一切の有意的生活合理的生活を達観した人の見地からは認められ得べき唯一の目的を諸君に向つて規定するが故に、以上述べたすべては眞である。この目的たるや、諸君が影響を及ぼし得るあらゆる靈的生活の統一の増進、諸君の一々の合理的行爲によつて（まさに諸君の力が許す限り）この増進をなすの目的である。この目的は一切の合理的存在に對する一個の法則である。いかなる天使と雖もこれ以上のことは出來ない。

こゝにグリセルダがその夫から極度の残酷さを以て、その忍耐を試みられた時に、チヨーサーが彼女にいはしめた有名な言葉がある。偶然にも自分の夫となつたたゞ一人の人間に對つて一人の女の口を通じていはれたその言葉は仕様のない程感情的で奴隸的であるやうに思はれる。けれどもチヨーサー自身はこの古い物語は、それをほんとに解釋すれば、靈魂と神との一層深い關係の譬喩として見らるべきものであるといふ事をわれらに注意して居る。たとひさうあらうとも、現代の指導者の多くに取つては、この譬喩はこんな風に解釋されては充分に残酷に思はれるであらう。單なる道學者は、それが個人的自尊の道德的精神の權威に反するやうに見えるからとてそ

れを輕んずるであらう。たゞ測り知られぬ神命によつて與へらるゝ恩寵を信する徒のみが、かゝる残酷な譬喩に價值を認めるのだと諸君は想像するかも知れない。けれどもこの譬喩をかく判斷するは誤つて居る。眞に忠誠なる人―例へば我が燈臺守―我が愛國者或は殉教者、―リー或はニユートン、誰でもよい忠誠の眞精神を以て充たされて居る人―誰でもよい自己の點する光を通じて、自己の行爲の影響の及び得る限りの廣さの靈的世界を輝し之を統一せんと企てる人―かゝる忠誠なる人をしてグリセルダの言葉を發せしめよ。かゝる人をして恰かも人生の主（すべての忠誠なる者に、自己の目的原因への没頭によつて自己を發見するの恩寵を與へる）の面前に於けるが如くこれをいはしめよ。かゝる人をしてこの言葉を

「征服されたる年々を越えたる叫びを

聞く人にいひかけるが如く」

いひかけしめよ。かゝる人をしてこの言葉を彼の忠誠の全生涯の要約及び告白としていはしめ

よ。然る時にはグリセルダの言葉は最早奴隸的ではない。それは確乎たる勇氣に充ちて居る。單なる運命を物ともせぬ立派な精神に充ちて居る。不撓なる靈的自我主張に充ちて居る。然り、不滅の意志、忠誠の眞本質にして又實に永遠の領域に於てこの世を克服せねばならず、また現に克服して居るところの不滅の意志に充ちて居る。

グリセルダの言葉は次の如くである。

「けれどもたしかに、あなたよ、決して苦しまぎれではなく

この場合に奉仕して

心を盡して自らの魂をあなたに捧ぐることは

わたしが胸に心に永久に悔いざることであらう。」

自己の言葉を人間にではなく、人生の主にいひかけるが如くかくいひかけ、而して後に眞摯に辛棒強く而も愛の心を以てその言葉を自己の生活に實現する人は宗教的パラドックスが解つたの

である。寂しき暗き自己有限の天地から、社會的激動、世間的野心の渾沌から、運命の暴風雨の眞只中にて、「地獄の笑、喫驚させる音響の眞只中にて」彼は靈の聲を聞いたのである。彼は聞いた。そしていかに無學であらうとも——解つたのである。彼自身の燈火は燃えて居る。そして彼の行爲を通じて永遠の光はこの世の闇に輝いて居る。

## 第六編 悲哀の宗教的使命

人生に於ても或は内觀に於ても何等か著しき成果に達するといふことは、却つてそれがためにわれらを導いて新なる問題に入らしむるといふことはわれらに甚だしばし起ることである。本講の企てに於ける現在の状態に於てもかくの如きはわれらの經驗である。その根源を忠誠の精神とする宗教的内觀は前講のわれらの題目であつた。もしも私の見にして正しとせば、この根源はわれらがこれまでに考察したところのものよりは遙かにすつと重要なものである。それはこれまで述べて來つた根源すべての精神及び意義を統一する。そしてもしも正しく解釋せらるゝならば、それは眞の救ひに至るの道を指示する。

而も忠誠の成果についての我が梗概の結辭は必然的に嚴肅なる言葉であつた。人間はいかなる精神によつて、果して全然の失敗から免れることが出来るかを示さうとして、われらは、今なほ高等生活を取巻いて居るところの悲劇に面接せしめられた。「災難」――哀れなるグリセルダはその物語中に於てこれに面接した。われらは前講に於て、忠誠の精神は――それがその最も有名なる代

表者に表はれて居るが如く、その内觀による力に於て、どうかして運命に打克つことが出来るものゝやうに見えるといふところまで述べた。けれども、世に打克つところの性質のこの暗示と相並んで「この世に於ては、汝等艱難に遭はざるべからず。」といふ言葉の避け難き思ひ起しが立つて居る。

艱難は宗教的内觀とどう關係するか。これわれらの現在の問題である。この問題は忠誠の位置及び意義の研究からわれらに注意せざるを得ざらしめたところのものである。この問題について或る理解を得ることは、これまで述べたすべての内觀の根源の教訓を一層深く了解するに必要缺くべからざるものであり、また宗教の職能を定義する上に特別の意義がある。

われらの生活の或る時期に於ては殆んどわれらのすべてに取りて、またわれらの多くに取りては始終、人間生活の悲劇的形相は安固なる宗教的内觀のどの種類に對しても、深い障碍であるやうに思はれる。私はこゝにまづ第一に何故に然るか――人生に悲劇の存することは何故に、多くの氣分に取りて、また多くの人々に取りて、宗教的眞理に對する信仰の破壊となり、善きものゝ窮極の勝利に關する合理的保證の障碍となるかを、諸君の心に一層充分に理解せしめねばならぬ。

而して後私は、いかに悲哀が、いかに人間艱難の全重荷が、吾に内觀の道に横はる障碍でなかつたばかりでなく、また實に宗教的内觀の一根源であつたか、また合理的にかくあり得るかを示すことに本講の殘餘を專注したいと思ふ。而して以上は實に本講の標題の説明である。

われらは、本講演の目的が限る制限を充分に心に懐きながら問題に近づく。惡の問題は純正哲學的、神學的、道德的或は常識的等の多くの形相を有するが、私は今、何等それらの形相についていふことは出来ない。人間の悲哀はわれらの考ふべき題目として本講演の途上に現はれる。第一にそれはわれらのこれまでに考察した宗教的内觀のあらゆる根源は、人間は或種の禍と戦つて居るといふことを示したからである。而して第二には、この争鬭そのものには、宗教的内觀の新たなる一根源をわれらに供給し、かくて他一切の根源の意味に新なる光明を投げる傾ある形相があるからである。惡の問題の徹底的な研究には吾に一個完全な宗教哲學が必要であるのみならず、實在についての一個完全なる哲學が必要であらう。而もわれらはこの論議に於ては、或る根

源の検討にのみ限るのである。

何故に人間生活に惡が存在し、而してそれが勢力を占むることは、吾人のすべてに取りては時あつてか、吾人の多數に取つては始終、人生問題を宗教的に解決する上に於ける一障礙であるかの理由は熟知されて居る。故に私はその理由がどういふものであるかを、たゞ諸君に思ひ出させればいゝのである。

惡の定義に關し何等精細に至らずとも、われらが惡と考へるところのものに遇つた時に起るわれらの特色ある反動は、それを除かうとし、その出現を避け、或はそれをなくしようとするところの努力であることは明かである。苦痛、寒さ、炎熱、疾病、饑餓、死、われらの敵、われらの危険、これらはまさにわれらがそれを惡となす限り、その悪い面を全然なくしようといふ決心を以て面するところの事實である。

この傾向の特色ある成果は、すべての動物の中で自己の世界に於ける惡の出現を最も明かに知つて居る人間はまさにその理由のために、吾に善きものを得、自己の必要を支へる新らしき發明の天才であるのみならず、動物中最も破壊的なるものであるといふ事實の中に現はれて居る。人

間は自然的環境と戦ふ。而してなほ進んではその同胞と戦ふ。而もその戦ひの方法たるや、人間の悪の評価の基をなして居る本能的に悪を嫌ふの情は、人間が悪運命との戦に於て造り上げる習慣の爲にどの位強められるかを示して居る。悪の破壊者たる人間はかくて、彼の生涯の多くに於ては、破壊そのものゝ爲の破壊を愛する事にまた大いに動かされる破壊者として現はれる。この破壊を愛するの心は、われらの社會的意識道德的意識の甚だ高い水準の形成にすら大なる役目を演じて居る。歌や譚の英雄たち、また往々にして歴史上の英雄もまた、彼等が魅力を有するのは一部分は（或は主として）人を殺す事が出来るから、または實際に殺したからこそである。われらは禍に對する勝利を愛する。殺人はかゝる勝利を含むやうに思はれる。故にわれらは少くとも英雄譚に於ては殺人を愛する。神々はアキレズに、敵を屠るの光榮に充ちたる短き生涯と、人を害しない無名の長き生命との間に選擇をなせといつた。彼は短き生涯を選んだ。そこで彼は永久に記憶されることゝなつた。何となれば、彼が戦ふことを欲しない時ですらも、彼の「破壊的憤怒は多くの雄々しき英雄の魂を黄泉に送り、犬や空の鳥の餌食にした」からである。またヘクトアは戦に歸つた時、どうなつたか。ニベルングスの歌は、開卷第一に昔譚といふものは多くの怪異

や賞讃に價する英雄、偉大なる事業を語るといふことをわれらに確かめて始めて居る。それらの「大事業」は主として他人を殺すことに成立つて居る。而してこの殺戮は明かに「賞讃に價するもの」であつた。蓋、そはわれら自身の悪との戦のすべてに對するモデルを供給したからである。

歴史上の英雄については、いふまでもなく、われらは彼等の建設的努力を論ずることを好む。けれども、要するに、高き智慧からの判断は別として、平凡人が普通光榮と稱するところのものに於て、ワシントンとナポレオンとの間にいかなる相違があるか。勿論世にはナポレオンを以て理想的帝國の建設に努力する改革家と誤認する崇拜家は絶えないであらう。けれどもかゝる崇拜家と雖も、アウステルリッツ（譯者曰、一八〇五年奈翁露軍に大勝を得たる戰場）に於けるナポレオンに特に魅されて彼を論ずることには、平凡人と一致するであらう。而して彼等は甚だしきに至つてはボロヂノ（譯者曰、一八一二年奈翁露軍を敗りし露國の戰場）をさへ忘れないであらう。疑もなくワシントンの崇拜家は彼を光輝あるものとする。けれども、ワシントンの歴史のいづこに神聖羅馬帝國に終焉を告げしめ、舊地圖の歐羅巴の政策を破壊せしめた光榮があるか。

破壊者、人、はその勇武をかくの如く誇とし、死の使徒なる英雄を崇拜する。而して、いふま

でもなく彼の戦はつねに彼が以て悪となすところの或るものに向けらるゝが故に、彼の光榮ある争闘を指導する原理は、それに基く推理のあるものは矛盾するやうに見えるけれども、一般の説明は容易なる原理のやうである。この原理は「一切の悪は破壊さるべし。その一もなからしめざるべからず。そは存在を一掃さるべき也。」である。

いふまでもなく、悪との戦のこの原理がかく抽象的に述べられただけでは、それは、われら果して何を以て悪と認むべきかをわれらに告げない。この原理は、善と悪とに對する賢明なる評價は人生の事實を一層精密に研究した時に學ばるべきものとして残す。疑もなく、詳しく研究すれば、アキレズ其他の歌や物語の英雄たちは、人生の眞價に關する或る不完全なる評價に基き破壊をわれらがあまりに愛し過ぎるやうになつたがために、あのやうに光輝あるものとされて居るのだといふ事になるかも知れぬ。故にたゞこの原理を述べただけでは、抑々何が破壊さるべきかに關する意見の相違及び見解の矛盾に對して甚だ大なる餘地が残るのである。通常人が古英雄を崇拜する時になす自然的評價は、人間が破壊すべき主なる禍の一は、普通或る他人といふ形を取るといふことを含んで居るやうである。而して、かくの如く他人を殺すことに於ける彼等の成功の

名辭に於て人を評價することは、明かに矛盾を持つて居る。けれども、とにかく、吾人の主張し得らるゝが如く、悪が或はわれらの敵の中にあらうとも、或はわれらの苦痛の中に潜まうとも、或はわれらの罪の中にあらうとも、悪をいかにすべきかに關し、われらが決心をなす時、多くのものが獲られる。われらが人命の破壊をあまりに好み過ぎることのこの誤を正すには、文明の進歩或は恐らくは宗教の勝利にでも待たなければならぬであらう。たゞこゝに本質的に重要なことは悪を破るといふことは人間の使命の一部であるといふことである。而してこの一般的教に關しては、聖者も勇士もよく一致し得るやうである。

宗教もこの根本的公理に對しては何んともいふことは出来ないとは、吾人のいひ得ることであらう。以上の點に於ては一切は明瞭である。悪はこの世から驅逐さるべし。常識はかくいふ。氣候に對する或は疾病に對する或はわれらの敵に對する、あらゆる争闘はこの精神を以て遂行される。救ひの探求もそれ自らで—吾人はかくいひ得る—たゞこの差し迫れる禍との破壊的争闘の他の一例たるに過ぎない。われらの憎み心に於ける最も原始的なところのものはすべて、そのわれらの「永遠の否定」を以て悪に對することに於て、われらの魂に於ける最も高きところのすべ



てとかく一致して居る。道德的意見の一切の相違は何を破壊すべきかに關する相違に過ぎない。人は常に禍の破壊者である。

二

しかしながら、もしも諸君にしてかく述べたる一般的原理を許すならば、われらすべてが認むるところの形式に於て、また、それがわれらすべての人々に於て有する重大さの程度に於てこの世に於ける惡の出現は、實に宗教的内觀の途上に於ける甚だ重大なる障碍であるやうに思はれる。而してその理由は明白である。宗教は、既にわれらのいつたとほり、その救ひを求むるに當り、人生の主との或種の融會を求めぬ。即ち、宗教は、一面に於ては事物の眞性質を領有し、或は是認的に之を検討し、或は支配し、他の一面に於ては、惡との争鬭に於てわれらを歓迎し、われらの努力を援け、成功をたしかならしむるところの或る力、或る原理、或る心意、或る心情と接觸せんことを求めるのである。私は本講演に於ては、神學的信條を定める何等の努力をもなさなかつた。神學的信條は私の大いに興味を持つ題目を構成する。而もこれ、此論議の制限以上の

ものである。けれども、われらの宗教道德の歴史的關係の研究、前になしたる宗教的要の分析等は、諸君を事物の全體的性質に結びつける所の原理に或種の有効なる訴へをなすことを得るにあらざるよりは、諸君の宗教的要は満たされずして残らなければならず、諸君の最後の言葉は、高々のところで、道德的な形式を取ることは出来るかも知れないが、一個宗教的教義の形式を取り得ないであらうといふことを知らせた。宗教は、われらに對して一切の神秘を解けとは要求しない。けれども宗教は、その確立のために或る保證、すなはち、われらの救ひの要に關する限り、而してわれらの救ひを危くする危険あるにも拘らず、われらのためになるものは（もしわれらにして正しく眼を開いてさい居れば）われらに害をなすものよりも多いといふ保證を要求する。

この事實をもつとはつきりさせるために、かゝる保證のすべてがわれらから取り去られたと假定せよ。その結果はどうなるか。われらは救ひを要すと假定せよ。われらあるが儘にては、われらはわれらの盲目と狭さと、われらの妄念の移り氣とのために、忠誠な人の目的原因がその人に暗示するやうな或る靈的統一及び合理的生命と接觸を得るにあらずんばその解脱の道を發見することが出来ないといふことを許せ。けれどもなほ一步進んで、一切人間の目的原因はその仕方

時期も甚だしく機會的なものであつて、個人個人が然るが如く、氣まぐれな運命の吹き廻はしに從はねばならぬものであると假定せよ。原因の原因、全一的靈的世界の統一は、事實上、單なる夢幻なりと想像せよ。理性の内觀、意志の内觀、—それがその統一に於て考へられる時は、宇宙はその本質に於て靈なり、而して忠誠といふ目的原因は常に一個實なるものなるのみならず、實に實在そのもの也と、われらに啓示するものであると私のいつたところのもの—この内觀をして一個の迷妄なりと認めしめよ。實在に關するその他の靈的見解の一つをもあり得ざることゝなさしめよ。然らば實に、われらに残るところのものはたゞわれらの掌中に入り來る生活の個々の理想だけとなり、實なる生命がその全體性に於てこれらの理想を是認したり、或は増進せしめたりするといふ何等の保證もないことになるであらう。その時と雖も、たしかに、われらの救ひの要はまだ残るであらう。たとひ救ひがわれらのものとなつた時でも救ひとは何ぞとのわれらの定義は變らないであらう。けれども私がこれまで辯護し來つた内觀のすべての根源がかく迷妄なるもの或は不確定なるものとして放擲されてしまつては、われらの最良の頼みとして手中に残るところの者はたゞ善に對する道德的苦闘だけとなるであらう。かくては、われらは救ひに對して何等

保證を望み得なくなる。われらは宗教を神話的慰安の領域に棄て去り、たゞ僅かに不確實なる争闘に呼び集め得るが如き道德的勇氣を以て物凄い世界に對面するやうになるであらう。我が忠誠そのものもその宗教的形相を失ふであらう。何となれば、忠誠といふ目的原因の客觀的善—忠誠の出現がわれらの生命に提供するやうに思はれる神的恩寵—は最早われらの人間的決心の移り氣如何によつて左右される、力弱くして不確實な希望を意味するに過ぎないものとなるからである。事物の真相に達する宗教的内觀の一切の根源を排せば、結果はすなはち斯くの如きものとなるであらう。

今假定された場合に於ては、その結果は、正直な人はもしこれを受けなければならぬとすれば實際受け容れはするであらうが、誰も何等満足な宗教的内觀を含むと認め得ないところのものとなるであらう。たしかに私は、こゝにこれらの考慮を、それ自らに於て宗教を辯護する何等かの論議として、或はわれらが評論しつゝあつた内觀の根源の性質及び價值に關するこれまでの議論の助けを供給するものとして、提出するのではない。これまでの講義に於て私が論じた立場は、實に全然それ自らの價值に於て倒れもし、立ちもしなければならぬ。而して、もしも、理性及

び意志にして、忠誠の精神が理性と意志との教を解釋し、之を統一するが如くに、事物の全體的性質についてのの眞理を眞にわれらに示さないとするれば、私は單にかゝる教がなければ、われらには、人生の宗教的解釋にかちり附いて居る根據がなくなるから、といふ理由だけで、一寸たりとも理性及び意志の教を受け容れて置いて呉れと願はうとはしないであらう。もしもわれらが、單なる道徳的な堅き決心にのみ頼り頼み、宗教的對象に關する保證、救ひの道と救ひの獲得とに關する保證を放擲しなければならぬとすれば、私は、私一個としては、生命の召命を受け容れ、私の力の及ぶ限り、一個善な目的のために戦ひ続け、一度荒唐無稽な神話的なものと示された宗教的慰安の如きは求めない用意が全く出來て居る。けれども私は、これまで述べ來つた根源は、われらに實際の一個の内觀、善に道徳的なもののみならずまた實に宗教的な内觀を與へるといふこと、またこれらの根源は一切事物の中に動いて居る理性とのわれらの關係、全宇宙に自らを表現して居る一個神なる意志とのわれらの關係、その意志がわれらの忠誠を鼓舞する時これが自ら現はして來るところの、その目的に關する純粹の啓示とのわれらの關係に、光明を投ずるといふことを、主張する私の根據を一般的に諸君に示した。私の現在の目的は、これらの根據の拒

否は充分の根據ある宗教的保證の放擲になるぞとたゞ嚇かすことによつてこれらの根據を強へんとするものではなく、たゞ、宗教は實に救ひの經過に對する一個眞に神聖なる基礎の探求であるといふ事實を諸君に提供せんとするのである。

宗教と道徳と異う點は、われら自身の能動的な決心を超えたる或るもの—われら自身でない—事物の全體的性質に基いた一個の保證—この堅き決心は成功するであらう、而してわれらを導いて、救ふところのものとの融合に至らしむるであらう、といふことを主張する一個の保證を與へる或るもの—を求める點に於て宗教は道徳と異つて居る。

故に、もしもこの世に、われらがそれと接觸し得るやうな人生の主がなく、宇宙には善の勝利なく、救ひの實なる根源は一もないならば、宗教は失望の結果に了らざるべからずといふ事は、實際に眞實である。かうなつては、われらの唯一の據りどころは、實に道徳的意志でなければならぬ。この據りどころは、われらの既に見たるが如く、現代の多數人がよろこんで受け容れんと準備して居るところのものである。而もかくの如きは、私の意見に於いては、現代人の多くが實際に眞の救ひの道に充分に這入つて居らないといふことを自ら認むる所以である。彼等の確信の

現状にあつては、何等か意識的にまた確實に宗教的内觀を彼等が持つて居るかの如く思ふのはたゞ無用の業である。然らば要するに、宗教は一個實なるものとしての人生の主の出現を要求し、善が勝利を占めると主張することに依存する。

けれども、もしもわれらにして、「すべての悪は破壊せらるべし。」といふこと、「全體としての宇宙に於ては善が勝利を得る。」といふ二つの斷定を結びつけんとし、従つて宗教が見出すが如くに人生の事實に面せんとするならば、われらはすぐさま世に熟知された當惑に包まれてしまふ。これらの當惑の多くについて論ずることは、現在の論議の制限に於ては、既にいつたとほり禁ぜられて居る。今はたゞ私は、われらの生活に悪の出現が故に宗教的内觀の途上の邪魔となるやうに見えるかを示さうとして居るのである。而して、この瞬間に於ては、われらの全體の論議が今やわれらをその中に置くやうに見える状態を諸君が考へる時、諸君のすべてがすぐさま意識するやうにならなければならぬところのものを力説すれば充分である。

抑々宗教的要そのものの存在は人生に甚だ大なる悪の出現を假定するのみならず、人間生活に於てはつねにそれが優位を占めて居ることを豫想する。何んとなれば、人間は高價はる寶玉を失

ふの大なる危険にあるにあらざれば、決して救ひの經過の要に迫られないからである。宗教的な人と雖も、或は修得的樂天主義——彼に救の道を指示したやうに思はれるところの宗教的經過が苦心して得たる成果——を持つやうになるかも知れない。けれども、すべては普通に人性とよく調和して居るものだといふ確信を以て出發する人は、われらのいふ宗教といふ意義に於ては、その樂天主義の型そのものゝために宗教から排斥されるのである。かゝる「初概念」の樂天主義者、すべては概して人性とよく調和して居ると信する者は、既にもいつたとほり、道德家ではあり得る。但し、かゝる人は同胞の多くが遭遇せねばならぬところの困難な境遇には香氣に無頓着なのであるから、深刻な道德問題に氣がつかず、概して極めて單純な道德家である。

しかしながら、われらが第一講に於て引用したいろく／＼な皮肉家、叛逆者、賢者、豫言者等が見た如く、人間救ひの深刻なる要を見る人は何人も、人間の損失と失敗——自然的人間の惡の重さ——を認識することから出發して居る。もしも今あるが儘の世界が極めて悪いものではないならば、何の宗教の要があらうか。宗教はその起源を我が深き困厄の意識に發する——換言すれば惡は人生に於て甚が眞實なる位置を占めるといふわが意識に發する。Tempora pessima——「世は澆季

なり。』は斯くて單なる中世紀風の現世嫌惡の句ではない。人間に困難あるは、豫め假定された事實である。その基礎に人間の救ひに對する求め心は基くのである。

而して吾人にして宗教的内觀の根源の探求に於て進めば進むほど、われらの既に認めたる如く、人間世界の禍に對する吾人の本源的認識はますます深まりまた多種に別れる。吾人は、個人的悲哀の寂しさから出で、社會的世界に宗教的助けを求めんとするも、そはたゞ普通の社會生活の渦卷は、個人の妄念の争鬭よりはいかにひどいかを見出すだけである。たとひ理性に導きを求むるも、この理性は一見非理性の深淵の上に孕育の業をなしつゝある一種の靈のやうに思はれる。忠誠そのものが打建てられる時、そはそれ自ら不幸によつて取巻かれて居るのを發見する。たとひ、惡がわれらを驅つて宗教に助けを求めらるゝに於ても、宗教はかくますます深く人の悲劇を知らしむるのみである。宗教の初めの言葉は、かくて惡について、惡よりの脱却についてであつた。而もその後の言葉は一見われらの艱難に對する絶えざる論議となつたやうに思はれる。

けれども、これまでのところで明かに見えるとほり、善の原理の勝利とは一切の惡が皆破壊さ

れ、存在から一掃されることであるのに、宗教がかく、われらの生に於ける惡の出現を豫想し、歩々に新たにその出現を事新しく説明して居たのでは、どうしてそれはこの實世界に於て善の原理が勝利を得るといふ保證にわれらを導くことを企て得られやうか。

事情を簡單に再言すればかうである。もしも人生の惡は實ではあるが、而も一時的にして皮相的な偶然事であるならば、或は一例のよく知られた極端ないひ方の形式を用ひて「惡は全然「非實在」である」とすれば——然らば宗教は餘計なものである。何んとなれば、もしも人間の普通の場合は、實に、極めて眞に困難なものであるでなければ、即ち、惡が實在であり而も根底深き一個の實在でなければ、救ひの必要はないからである。けれども、他の一面に於ては、もしも惡があるがまゝの人生の條件そのものにかく深く根を持つて居るものであり、宗教的生活の高い水準に於てさへも、その惡は固着して居るものであるならば、宗教は全然の失敗に陥るの危險に瀕して居るやうに思はれる。何んとなれば、もしも、善がどうかして事物の眞中心にあり、——いはゞ實在の中心であるのでなければ、——救ひの希望は夢であり、宗教はわれらを欺くからである。けれども、善は、われらの今丁度述べつゝある假定によつて、惡が全然除き去らるゝことを要求

する。而も全然存在を許すべからざるもの即ち悪が、一面に於ては悪よりわれらを救ふために宗教を必要とし、而もわれらをして事物の眞性質は善なりと知らしむることによつてのみ、その救ひをなし得る底の仕方にていかにして事物の眞性質の表現たり得るか。こゝにわれらの問題がある。而してこれ困難なる問題である。

約言すれば、諸君のいひ得らるゝが如く、宗教は次に擧ぐる二者何れかを取らねばならぬ。すなはち、もしもこの世に於ける悪がさして重大なるものでなければ、宗教は無用である。或は、もしも救ひの要が大であり、それに到るの道が眞直で狭くあり、而も悪は實在の性質そのものに深く根ざして居るならば宗教は失敗のやうに思はれる。

### 三

われらの大多数が、普通もつとすつと直接な哀傷的な経験でもつて近づくところの問題を、かくいくらか小むつかしい辨證的仕方でも述べるのも、私は何等かの利益があると信ずる。好んでむつかしく辨證的に論ずる一つの利益は、かくすると時とするときと情緒が時々覆ふところの人生の大

問題の雲を拂ひ去る傾があることである。前に理性の職能を語るときにいつたとほり、抽象的觀念は或る目的に至るの手段に過ぎない。抽象的觀念の目的は事物の關係の明晰にして合理的なる検討をなすにわれらの助けとなることである。諸君が廣き展望を得んがために高所より景色を眺めんとする時は、距離が曖昧にし、景色の複雑がほんとの關係に於て見ることを困難ならしむるところのものを精確に定めるために、諸君は望遠鏡、兩脚器その他の抽象の器械を使はねばならぬであらう。而して、かゝる場合に於ては、望遠鏡或は兩脚器は、要するに、諸君の全展望を助けやうとする補助たるに過ぎない。楮、善悪の世界は廣き展望の、遠き距離の複雑なる景色の世界である。だから抽象的な一面的な考察を繼續的に使ふ辨證法を少しは用ふのも全體を一層よく見るの道を拓くに役立つであらう。

通常人は、私が今説明しつゝあつた問題をよく知つて居る。彼はそれがいかにして彼の宗教的生活に入り得るかを知つて居る。たゞ彼は常にそれを抽象的に考へないだけである。この問題は彼の心を千々に打ち砕く。悲しみに氣も遠くなり彼はいふであらう。「私は神を頼つて居た。それなのに神は我を見捨てる。どうしてよき神は一の怖れを我が生に許し得るのであらうか。」と。

けれども、通常人も、もし宗教的に考へる人であるならば、また、「私は深淵より叫んだ」といふことによつて何を意味するかを知つて居る。而して彼はまた、彼の神の觀念そのものゝ高き價値のその部分は、深淵の存在、及び吾人はその深淵から叫び得るといふこと、神はまさしく深淵からのこの叫びをどうにかして聞くものであるといふことを知つて居る。近頃の學者のあるものがいつた如く、「實用主義的に見られた神は、かくて屢々通常人の宗教的經驗に對しては、苦しい時の助け手として定められる。もしも世に苦しいことがなければ、かゝるものを求むる魂の叫びもない譯で、今叫び求めて居る魂によつてかゝるものが考へられない筈だといふことも極めてあり得ることである。けれども、この神こそは——全能にして、すべてをよく爲し、従つて苦しい時に頼れば、現に助けとなると想像さるゝが故に、吾人がそれに叫ぶところのものである。このことのすべては、吾人が、深淵を出で、向上の途にある時、或は、吾人が今やいふが如く「彼はわが足を盤のうへにおきわが歩をかたくしたまへるが」(詩篇四〇ノ二)故に、詩篇の言葉に於て神を讃めるやうになる時、充分に明瞭であるやうである。けれども、吾人が急に悲しみの窠に陥つた時、吾人の眼が下に向いた時、すべてを能く爲す神が運命の極度の不信を默認する時、あらゆ

る叫びを聞き得る神が、吾人の最も心を傷むる訴にも聾なるが如く見ゆる時、このすべてはいかに見えるであらうか。このすべては吾人の罪の報だ、といふ熟知せられたる説明は、自分がどうしてこの苦惱に價するかを知らない人の心に、ヨブの抗議の反響を惹き起すであらう。或は、神は罪を許すといふ事實に含まれたる奥義に一層深い而も意識的な辨證的批評を下のやうになるであらう。「何故に我々はかく盲目に罪深く造られたりしぞや。」と、或人はいふかも知れぬ。而して、これより宗教的内観は、實に、充分に混亂して來て、よし宗教的ならずとも、少くとも道德的なる挑戦のかのよく知れ互つた型に助けを求めらるやうになる。何となればそれは惡に對する抗議であるからである。もしもかゝる瞬間に於て、神は實にわれらの暗まされたる靈觀に對して、また神の恵みを待ちつゝあるわれらに對して、恰かも睡つてでも居るが如くであるか、或は旅行中でもあるかのやうであるならば、吾人は少くとも道德的に行爲し得る者として、惡に對するこの抗議をいひ、何故に神の全能がこの拒議を有效ならしめないかを疑ふことが出来る。かくて吾人は、いはゞ、不在なる神の仕事を神に代つて爲すべく英雄的に試み初める。これらすべてはよく熟知されたる經驗である。そしてあまりに屢々不用意の時にわれらに來

る。それは、情緒があらゆる内観を曇らせやうとする時われらに來る。それは一切の人間生活に屬して居り、宗教の全歴史にその役を演ずるところの或る辨證的經過を説明する。生活が人の心を粉碎するが如きかなしさを以てこの問題を例示し

・「激情の痛ましき犁が  
わが最後の巖まで打ち砕く」

時、われらは一層手早く問題に面することが出来るやうに、われらが丁度今したやうに、この辨證的經過の一面を抽象的に些か理屈めいて、感情的でなく述べるのは恐らくよいことであらう。今、抽象的にいつた問題は即ち次の如くである。宗教は左の兩刀論法に面するが如くである。即ち、人生には大なる本質的悪は存在せず、従つて永遠の破滅の大危険もなく、救ひの大なる必要もない。故に宗教は何等著しき職能を持たぬか。或は、世には大なる本質的の悪が存在する。而して人間の生活は救ひの熾烈なる要に迫られて居る。けれどもその場合に於ては、悪はわれら

の根源たる實在の性質そのものに深く根ざして居り、従つて宗教は、人間に眞の救ひを供給する事の出来るものによつて戦はるべきのみならず、いつも實際戦はれてあるべきところの、悪と戦ひ得る人生のまことの主と、融合する事をわれらに保證するの何等の権利をも持たないかの何れかである。蓋、(われらの假定して居るとほり)悪に對してなすべきところのもの、然り、初めから悪に對してなされて居るべかりしところのものは、悪を全然存在からなくするところであり、またあつたからである。

これ、すなはち、抽象的に論ぜられたる場合に於て宗教がひつかゝると見ゆる、兩刀論法である。この兩刀論法に就いては、或る實用的宗教の精神に於て、人間の魂が救ひを求めその苦惱に面する時に、その魂の限りなき苦闘が實例である。この苦闘は限りなく感傷的なものであり、人生に於ては往々にして内観を混亂せしむるものである。この兩刀論法がその上に基くが如く思はれる、原理の抽象的述べ方を考へることは何等かの價值があるであらうか。それは、もしもわれがよつて以て—こゝに實に常に神學の問題、惡の形而上學のみならず、内観の一新根源にも亦導かれ得るならば、恐らく價值があるであらう。



この内観の新根源は、われらがもしも一層精密なる注意を以てわれら自身の心情の聲に耳傾けるならば屢々観察し得るが如く、「悪は全く存在を止めらるべきものなり。」とのこの一般的原理は、一切の悪に對するわれらの全體の態度を表白せず、而して、たゞ人生に對する一層普通な一層初步な或は一層高められた、英雄的な、合理的なわれらの評價の不完全なる説明しか與へないものだといふことを觀察する時、われらに來り初める。

「悪はひたすらに除き去らるべし。」との原理は、實にわれらが、われらの日常生活に於て、自然的禍の廣大なる範圍に互りて何等の疑なく適用するところの原理である。けれども、この原理は普遍的ではない。まづ第一にその外見上の範圍を示さしめよ。肉體的苦痛は、それが充分に猛烈なる時は、その一層大なる表現に於て明かに堪へがたく思はれる禍の一例である。故にこの例は「悪は存在を止めらるべし。」といふ原理を説明するやうに思はれる。われらは、肉體的苦痛に關しては、たゞその除去を希望する。この事は吾人が同化せられざる悲哀と呼ぶどころのもの各

階段—それが初めて現はれた時に於ける災難の激動、損失或は失望のかなしみ、而もこれらがまだほんとのわれらの心に新たであつて生活計劃にまだその所を得ないやうに見える時—に就いても同様である。これらは典型的な禍である。而して、彼等はすべて、われらにとつてたゞ破壊すべく價するやうに見える禍を説明して居る。個人的世界及び社會的生活に於ける要素としてのかゝる禍の多數は、往々にしてわれらに數へがたきほどに見える。

悪疫、饑饉、壓迫者の殘忍なる行爲、無辜の人命が殘酷なる運命のために破壊さるゝこと、—これらすべては、われらの日常の評價にとりては、決してわれらの同化し、是認し、或は合理的に理解することの出來ない事實であるやうである。すなはち、その何れの場合を取つて見ても、われらはかゝる出來事が何故に人生の一部をなすべきかといふ理由を—それが實際事實であるといふことは知り得るが—發見することは出來ない。彼等はわれらの自然的理解にとりては、もしも出來得るならば無くされ或は移さるべきところのたゞ經驗の不明なる材料であるやうに見える。而してかゝる悪に對しては、われらの人間的見地から見れば、「彼等は存在の外に驅逐さるべし。」といふ原理はもとより何等の制限なく適用される。故にこの原理の外見上の範圍は實に甚だ

廣大である。

緒、かゝる禍の説明に對して、神學的或は純正哲學的の可能なる基礎を詳細に互つて論ずるの  
は我が現在の論議の問題ではない。私は、これらの大きな禍の數々の與ふる感動及び悲劇を等閑  
に附するの非難を受けても仕方がないほどあまりに多くまたあまりに屢々、別のところで、惡の  
問題について書いた。けれども私は、すぐさま次のことをいふことが出来る。禍がかくわれらに  
見える限り、それは實に宗教的内觀の根源ではない。と。他の一面に於ては、われらの禍は、か  
く全然暗黒に見られた時と雖も、道德的熱心及び眞面目の根源たり得、また實際に根源である。  
破壊者としての人はかゝる惡が彼の世界に出現して居ることを充分に承知しつゝそれらと戰つて  
居る時には、彼の生活に完全に確乎たる道德的満足を導入する。而して彼はかくするの權利を持  
つて居る。彼の宗教は何にてもあれ、彼はかゝる媒介を経ざる諸惡に對して心からの堪へ難たさ  
を以て争ふことは道德的に許されて居る。かゝる努力が社會的の形を取る時は、それは最も高き  
人道への助けとなる。苦痛、疾病、壓迫との戰、傷口に繃帶し破壊より魂を救ふの努力—それら  
すべては人間の忠誠に對する最大の機會の或るものを構成する。

それにも拘らず、人間が肉體的苦痛、惡疫、饑饉、壓迫の如き惡と忠誠に戰ふ時、彼はその結  
果として、彼自身の忠誠なる行爲によつて、何故にかゝる個々の惡がこの世に許さるゝかの理由  
を見出さうとはしない。これらの惡は、それが彼に奉仕の機會を與へる限り、惡に對する一個の  
勇士としての彼の忠誠に訴へる。もしも彼の目的原因が、彼にとつて、破壊さるべき惡との此の  
戰に入る活動を含むならば、これらの惡はかくして間接に彼の宗教的生活の爲めになつて居る。  
けれども、かゝる場合に於て、彼の宗教的内觀の根源たるものは彼の忠誠である。彼がかく破壊  
的に戰ふところの禍そのものは、依然として、彼にとつては不明なものである。何故にそれらが  
この世に於てその位置を見出すかは彼には解らない。けれどもそれらの禍がそこにある以上は彼  
はこれをどうすべきかといふこと—即ち彼の忠誠的奉仕の一としてそれを絶滅し、その存在をな  
くすべきことを知つて居る。

しかしながら、もしも彼が宗教的な考のある人であるならば、彼は決して、彼がそれと戰ふ  
ところの惡が、たゞ彼に彼の奉仕の機會を與へるためにあるのだなどゝは一寸だつて考へはしな  
い。然らば、然る限り、實に、われらのひたすらに打破すべき禍は何等宗教的内觀の根源を提供

しないといふことは眞である。

されど、私の主張しなければならぬが如く、われらの知つて居る禍はすべてこの性質のものではない。そのこの世に於ける出現の理由のわれらに知られない不可解なる悪運とのこれらの争闘は、廣く深く恐ろしきものではあるが、世にはまた他の種の禍がある。而してこれらの禍に對しては、われらは全然破壊的ではないところの態度を取る。われらは一層精密に考へると、これらの禍が善と離し難く結ばれて居ることを發見する。——こゝにこの種の禍に結合して居るこの種の善が、その禍から引き離し得るやうな生活はわれらに一も考へられないほどよくそれは密着して結びついて居る。これらの場合に於ては、「悪はひたすらに存在を止めらるべし。」といふ原理は明かに誤だといふことになる。かゝる悪に對するわれらの知識が一層明瞭になるにつれて、われらは普通、その悪には、いつでも、實に絶滅され、除けられ、破壊さるべきものと我等に思はれる或點があるといふことを發見する。けれども、この悪の一時的或は少くとも經過的の形相の絶滅はかゝる場合に於ては、破壊よりは寧ろ生長を含むところの建設的經過の一部——全然生命から投げ出されることよりは寧ろ新生命への一つの橋渡しに過ぎない。かゝる悪はわれらがそれを

同化し、觀念化し、われらの生活計劃の中に取り容れ、意義を與へ、全體の中にその位置を與へさへすれば除き得るところのものである。

偕、かゝる悪は、私の主張しなければならぬ如く、人生に於て、特に高等なる生活に於て甚だ大なる役目を演ずるところのものである。就中、これらの悪に對するわれらの態度は、われらの合理性の最も高い水準に於て、人生の全問題に對するわれらの態度の甚だ大なる部分を形成する。

これらの觀念化されたる悪の現前に於ては、破壊者、人、は創造者、人、と變化する。而して彼は少しも彼の是認されたる道德的區別を棄てず、何等の「道德的休日」に耽ることなく、また、破壊によつての外は當面の事實に合理的に面することが出来ない場合には破壊をも厭はずして、創造者となる。彼はいかにして生長を破壊に代へ、創造的同化を新らしきを産まぬ對立に代ふべきかを發見したからとて、決して自己の道德的事情の取扱ひ方に於て緊張して居ないことはない。否、彼は却つてそれらの悪がどうすれば、彼の意識にとつて、善なる一全體の部分となり得るかを知らぬが故に、ますますかゝる悪の現前に於ては一層有効に忠誠である。

この種の禍は宗教的內觀の根源たり得、また一層よき場合に於ては、實際になるのである。これらの禍のわれらの世界に於ける出現はわれらをして、われらの世界の靈的統一を一層よく理解せしめる。而してそれらの禍は往々にして、われらが一に甚だ深き甚だ痛ましき精神上の苦痛を以て面する甚だ深刻なる甚だ悲劇的なる禍なるが故に、それらの悪はわれらに暗示するに、他の種類の限りなき恐ろしい禍（今はわれらに理解することの出来ない、そして、現在に於ては、われらにたゞ全然の破壊に價するだけのものゝやうに見える禍）がいかにして、世界包括的見地から見れば、われらがそれに屬する一層大なる生命に於ける表現の段階として、形相としてのその位置を有し得るかを以てする。われら自身の禍を同化し靈化するわれら自身の力の中に、われらは時々かゝる一層大なる靈的經過の暗示を得ることが出来る。これらの經過そのものゝ中に於て、われらはまた、われらの忠誠なる努力を通じて、われら自身の眞の使命を働く事が出来る。但し、この一層大なる經過が如何なるものであるかは、同情ある飼犬―その主人が國家或は全人類の最も高い精神的福祉を増進するために生涯を擲ちつゝあるところの―が、何故に主人の顔は今憂に鎖されたか、なぜ今はよろこびに充ちたかを知ることが出来る位しか、現在に於いては、

われらはそれを理解することを期待することは出来ない。

換言すれば、吾人が單に破壊するでなしに靈化し觀念化することの出来る悪は、われら現在の見解にとりては、一見絶望の悲劇の不可解の渾沌が人生を取巻くやうに見ゆるといふ事實にも拘らず、理性及び忠誠がわれらに提供するところの善の靈的勝利は迷妄である必要はなく完全に事實と調和して居るといふことをわれらに暗示する。世界は無限である。我が現在の見解を以てしてはわれらはその世界の意義の統一を直接に掴むことを期待することは出来なかつた。われらは、よしたしかに詳細にはなくとも、その靈的經過の性質を一般にわれらに示すことによつてわれらの救ひの助けとなる內觀の根源を持つて居る。而してその靈的經過たるや、內觀のこれらの根源が絶えず指示するが如く、實在の本質を構成するところのものである。これらの根源がそれ自らに於て堅實であり、信賴するに足るべきものであるか否かは、それ自身の効果に於て考察さるべき問題である。

私は、われらの簡單なる評論の必要とする限りに於て私の立場を述べて了つた。これらの根源が人生の主の實在及び救ひの經過の性質の兩者に關し教ふるところのものについてのそれ以上の

評價は諸君自身の思索に委ねなければならぬ。私の現在の關心事はたゞ惡の出現がこれらすべての根源の面を覆ふに至らしむるやうに思はれるところの暗雲についてである。

私は何故に惡疫が、また何故に失意がこの世に存在するのを許されるかを詳しく諸君に示すことによつて、この暗雲を全然一掃しようと思はれる事はない。けれども私は實に惡は存在し、而して人生には甚だ暗黒なる惡があり、それはたゞに人生にあるのみならず、最高の生活に缺くべからざるものであるといふことを諸君に示すことが出来る。

私が、これらの惡が内觀に對する不明な障礙を構成せず、理性の光、忠誠の太陽を覆ふ雲でなく、否寧ろ内觀の一根源だと主張する時、私は神秘を解くわれらの力を誇張するものでない。而して私の主張するが如く、これらの惡は、われらの破壊すべきかくの如き惡のこれらの相そのものとのわれらの道德的争闘をゆるめる少しの口實ともならず、かゝる根源を構成する。これらの惡は、かゝる災難に對する道德的意志の勝利がいかにして「生命の最も合理的なる型はまさにかゝる災難の存在を要求する」といふ承認と完全に調和するかをわれらに示す。われらの世界に於けるこれらの禍の出現は、怠惰の言ひ譯をしない。「道德的休日」を是認しない。この世に

於ける神の勝利をたゞ徒らにかゝる勝利の實際上の獲得に、自ら合理的に緊張的に興ることもせず、—神秘的に冥想することに耽ることを許さない。けれども、禍のこれらの形式がわれらに示すところのものは、もしも—而もたゞもしも—吾人が神の意志を爲すならば—惡の單なる排除によつてではなく、苦しみを通して、神の意志がいかにして完全になり得、またなるかといふことを教へる教義を吾人が知り得る場合があるといふことである。禍のかゝる場合は内觀の眞根源である。かゝる惡は忠誠、靈的勝利、善なる實在とは何ぞやといふことに關する最深の眞理の或るものをわれらに啓示する。これらの禍は救ひのためになる。これらの禍は暗雲を除却し、われらをして世界の意志と面と面と向はしめる。

以上、私は惡一般について語つた。現在の目的に對しては、吾人がこれらの惡を、或る本質的に活動的、構成的な道德的經過によつて、創造的に之を同化し觀念化し、かくて彼等を征服して善の一部となす時にのみ—吾人が單に彼等を存在から驅逐する時でなく—合理的に面接するところの惡に對する一つの名前を私は必要とする。かゝる惡に對する一つの名はギリセルダの所謂「災難」である。けれども私は、本講の標題に於ては、漠然とした非専門的な言葉を用ひて悲哀

といふ名を選んだ。肉體上の大なる苦痛は、諸君は一般に、少くともその瞬間に於ては、之を觀念化する事は出来ない。諸君はその時その場合たゞ堪へ難き或るものとしてのみそれに面する。而して、それを單に排除することによつての外は何等のよいところも見ることが出来ない。これと同一なことは、運命の碎破的打撃についても、それがまさに碎破をなす限り、眞である。以上のすべてを諸君はその時その場合狭く見るのである。これらが苦となるの奥義は、かくてその時これらがたゞ狭く見られるといふ事實そのものに横はる。従つて、これらはたゞそれだけで内觀に對する障礙である。

けれども一個の悲哀は——諸君がこの言葉を用ゐる時に既に諸君が悲哀と稱する事實を同化し觀念化し初めて居るのである。諸君が悲哀を觀念化し初めたといふことを、深き悲哀に浸ることその事が往々にして漠然と、時とする<sup>と</sup>明瞭に、暗示する。何んとなれば、悲哀は既にその時諸君に取つて悲劇的に尊いものとなることもあり得るからである。たとひ諸君にはそれが出来たとて、諸君は失戀の悲しみ、死別せる人や、或は「歸らぬ日」を忘れるやうとするであらうか。そして、かゝる悲哀のさ中に於ては、諸君の唯一の傾向は單なる破滅であらうか。かゝる悲哀に對

する諸君の態度を一層精密に考察すれば、悲哀は單に暗雲でなく啓示であることを示す。悲哀は靈的領域への道、及びこの領域の性質を諸君に示すことを始め、また限りなくそれを續け得る。

故に、私がここに悲哀といふは、諸君がその時その場合、たゞ存在より驅逐すべきものと信ずるが如き經驗では全然ないところの惡の經驗を意味する。悲哀が根源であるところの内觀は、諸君の衷に靈的領域とは何ぞやといふことに關する新見解を喚起するやうにする内觀である。この見解は決して或近頃の學者たちが盲目的に——哲學者の技巧的抽象——研究の「軟」教義を以て、人生の「硬」事實に道德的人道的に面することに代へんとする殘酷なる努力であると宣言したところのものではない。否、この見解は最も具體的な生活に對する、全世界中最も高尚にして最も實際的な教の中心である。この見解は困難に面し、それに堪へ、それに打克つ。詩人、豫言者、殉教者、賢人、藝術家、すなはちあらゆる國土の靈界の傑英等はこゝに慰安と決意と勝利とを見出した。哲學者は高々のところで如上の人士の見たところのものを報告することが出来るのみである。而して實に、これらの英傑たちがその生活に於て、その宗教に於て、表現することを學んだところのものを、その觀念を以て眺めることをしない思索的努力は「軟」なる型である。

私はこゝに、諸君に向つて悪が一個善にして合理的なる靈的世界に於て占むる位置に關しての單なる思辨的教義を述べて居るのでないから、私はこの點に於て、も一度、出来るだけ直接に人生に訴へる必要がある。私をして諸君のために、内觀の我が現在の根源の用の注意すべき一例を近頃の文學から提供せしめよ。その例は、明かに、何等完全な決定的な宗教的信條が、こゝに問題になつて居る内觀を用ひた結果として辯護されない場合の例である。而して靈界についての一個現實的永遠的の眞理—賢人の教に於ける甚だ舊い眞理、而も現代に對しても深く必要とされた眞理—がその物語の描く事例によつて説明せられる。

私は、一千九百十年十一月號アトランテック・モンズリー誌所載コルネリア・エー・ビー・コーマア筆の近頃の一短篇に關説する。そは「門出」(The Preliminaries)と題した。それは、私の考では、眞に役に立つ現實主義と深き象徴主義との著しき統一である。出て來る人物は甚だ現實的な人間である。問題は日常生活の最も普通なる出來事—二人の若い戀人の結婚申出の適不適に關

する問題である。問題の條件は、われらの混亂せる現代の條件の下にあつては不幸にして充分に屢々なる一般的型の困難なる事實である。これらの事實は、この物語に於ては、かゝる人々がまさにとそれを見るべきが如く見られて居る。而もこゝに含まれたる論點は、若い戀人のすべての問題と同じく、宗教のすべての關心、靈的世界の實在の全問題と結びついて居る論點である。これらの論點はそれが眞にあるやうに取扱はれ、その結果として、たゞ悲哀を通してのみわれらが達し得べき内觀の根源に、古くはあるが而もいつも新に訴へることに於て立派に超自然的になつて居る。

従つて、問題は必然的に申込まれた結婚の豫想に關係し、問題の初めの述べ方は近頃の實用主義の精神と充分に調和して居る。「われわれは結婚すべきである。」といふ主張の眞理は、たしかに實用主義者がいはんとする如く、この主張をなした若い戀人らがこの結婚が將來導くべき具體的生活に於ての結果と全く分離し難いものとして認むるところの眞理である。然らばかゝる眞理は全然經驗的なものであると或はいふかも知れぬ。實用主義の御得意の文句を用ふれば結婚申出は一個「功用ある假説」である。かゝる假説は經驗の試みにかげられねばならぬ。かゝる試みは

一つも絶対ではないやうに見えるであらう。哀れなる人間はわれらの運命の眞價について何を知り得ようか。然るに一方では善惡の全問題が問題になる。結婚は、特に一定の條件の下にありては、或種の悲哀に導くであらう。吾人は果して人生に對する眞に深い信頼の情を持ちながら、悲哀に面することが出来るか。人生にはそんなに多くの悲哀があるのに、人生は、一體、眞によいものであらうか。用心深い人なら人生について恐れるのはあたり前のことではあるまいか。戀人は運命を物とせず明かな世間的分別心を見捨てるならなければならないものであらうか。

かくの如きは問題の最初の言明である。この賞讃すべき短篇に於ての問題の取扱ひ方は、善惡の性質についての一個の内觀——近頃の力の讚美思想のために、現代の個人主義の厭はしき盲目さに、眞理の單なる一時的有効性に關する誤つたる教義に、非精神的なる世俗的能率の單に光り輝く外見に、あまりに支配されて居る今日の物語作者の心には現はれること甚だ尠しと私には思はれるところの内觀を示して居る。私は、近頃、實用主義の流行的なつまらぬ解釋によつて、また「理性の法則」を同様につまらないものとして無視する風に甚だしく荒された文學の中に、なほこの短い物語を書いた賢い婦人が例證して居るやうな、永遠の眞理についての極めて眞向きな

實際的な認識の存する餘地があるといふことを發見してよろこぶのである。

この特殊な結婚申込に關する論點は物語の開卷第一に直ぐさま述べられてある。

「若きオリヴァー・ピカースギルはピーター・ランニソーンの娘と戀に陥ちた。ピーター・ランニソーンは金圓私消の廉によつて懲治監に六ヶ年の服役中であつた。」

若き主人公は自己の社會に於て誰からも認められた幸福な社會的地位を占めて居る高潔な青年として描かれてある。彼の戀人は、父の罪はたゞ一時的な人情的弱點、窮迫や家族のあまりに煩しき需要に心が混亂した結果であると確信して居る孝行なる乙女である。この乙女は、父の墮獄を以て、忍耐の足りないことや、徒らに悶ゆる不満足、自分の母親の世俗的野心等に不當にも歸することはしないで、戀人の申込みに對して、元氣を出して率直にかういつて答へる。「私は決して不同意の現在のこの唯一の根據に關してはとにかく容易に折合がついた。この青年は、内心には困難がないではなかつたが、戀人の父の災難に對するこの娘の解釋を直ぐさま採用する。兎に角、戀はこの青年をして單なる世間的氣兼ねには無頓着ならしめる。而してこの青年は一個罪



人の娘の親切なる夫として自己の社會に面する自己自身の力について、何等の不安をも持たなかつた。—この場合、その父の實際上の犯罪については何等疑の餘地なく、ランニソン自身もその宣告の正當なることを認めたと一般に知られて居つたのであつた。

けれども、愛することと、氣を大きく持つて希望を懐いて居ること—これは、かゝる結婚が慎重である、或は實用主義者たちのいふやうに「得な功用」を持つて居るらしいといふことを他人に説得するのと同一ではない。若きオリヴァーは、一方にはルスの母を、一方には自分自身の父を、かゝる結婚は合理的であるといふことを説得せねばならない。ところが兩人とも納得させるに困難である。若き戀人たちが一般に答へねばならぬ世間的用心の普通の躊躇にかへ、加へて、この親たちは、一見答辯に困るやうな抗議を容易に附け加へる。

母—罪人の妻—今や輝くばかりに聰明になつたが仕方なく狭量になつて居る病身者—この世の失意の女—は悲哀の苦々しき經驗のために幾分か實用主義的に啓蒙された。けれどもそれがために何等一層深い内觀を得たといふではなく、娘の戀人を見るに、娘の平和と自分自身の寂寥を破る闖入者を見る眼を以て對する。彼女はいふ。自分は不幸なる結婚の苦々しさがいかなるもので

あり得るか、またあるかといふことを知つたと。もしも自分の夫の失脚の不名譽の責任の一端を自分も擔はねばならぬとすれば、そのことが却つて、この暗い世界に於ても、彼女がなほ掴むことの出来る眞があることを示すだけだ。

「私は娘たちを結婚なんざさせたくない。」—これ彼女にとつては全體の事柄の歸結であつた。彼女自身の結婚の苦々しさは彼女にこの教訓を教へた。そしてこの教訓を彼女は傷けられたる誇の熱情を以て、高く買はれた人生の教としてこの青年に細々と説き聞かせた。けれども、勿論、彼女の認めて居るとほり、彼女のいふことは誤であるかも知れない。そこで彼女はこの青年に獄裡の夫に相談して呉れといふ。彼—囚人は一體は善い人である。彼は失脚はしたが心から罪人ではない。彼は自分の娘にこの新たなる悲劇の重荷を取上げさせようとするかどうか聞いて呉れといつて、母親は話を閉ぢた。

青年は當惑した。けれどもなほ望を失はず、次に轉じて、相談をし、また勇氣を附けて貰はうと自分自身の父のところへ向ふ。けれども、今や彼は一層高尚ではあるが、而も彼にとつては甚だしくが、つかりさせられる分別の教を傾聽せねばならない。オリヴァーの父はこの世の眞に高潔な

人で、その思想の背景には純粹な宗教的感情があつて、自分の息子に深く傾倒して居つた。けれどもこの結婚問題には、彼は自然的に恐怖を感じて縮み上つた。世の中にはよい娘が充ちて居る。何故、そんな悲哀を持つて來ない女を選ばないのか。ピーター・ランニソンは罪は犯したが、實際、免れて耻なき多くの人々より決して悪い人といふのではない。甚だしきに至つては彼は大體に於てはよかれかすと計つたのである。而も大失敗をしてついに罪を犯すやうな事になつたのである。そして彼は男らしくその刑罰を受け、それが正當であるといふことを認めた。しかし要するに彼は發見されたのである。かゝる汚點は後までも残る。それは後悔によつてとり去られ得ない。この結婚問題はたゞ不幸に導き得るのみである。要するに「事件の何たるかを知つて居る」ピーター・ランニソンその人にしろ、もしもどうかと人に聞かれたら、この父のいふことを認むる最初の人であらう。もしもお前が親切な父の智慧を飽くまでも輕んじようとするならば――よし、ピーター・ランニソン自身のところへいつて相談して見よ。獄家にある囚人に、その人とこれから結婚しようと思ふ女の家族に男は何を要求し期待すべきかを問うて見よ。これ父の確乎たる而も親切なる最後通牒である。

繰返へされたる警告の嚴肅さに恐れを懷き自己の最も大切な問題を、囚人その人の決定に托さねばならぬといふことに氣を腐らしながらもオリヴァーは、この止むを得ぬ事に面しようと思ひ決する。彼は監獄での面會の手續をし、看守に導かれて、監獄の圖書室内に囚人とたゞ一人残された。この青年がこの男と向き合ふと忽ちにして、彼は恰かも或る超自然的なる力によつて何か變貌でもさせられた人の前に出たやうな感に打たれる。囚人の人柄については筆者は次の如くいつて居る。――

彼の容貌は不規則であり別に著しいところもなかつた。けれどもその全體は、力の印象を與へた。それは強い顔であつた。而もそれは嘗ては弱い顔であつたことの解るものであつた。それは恐ろしく人間味のある顔であつた、見えざる戰の壓迫のために、威かされ痕を留められ皺づけられた戦場のやうな顔であつた。……決して勝利の顔ではない。而もその中には平和があつた。なんとはなしにどうもこの人は何物かを獲て居るやうである。或るところに到達して居るやうである。而してその旅の記録は痛ましく恐ろしくあつた。その顔は驚きと同様に恐れを以て人の眼を惹くが、決して憐れみの情を加へることは出來ない。

オリヴァーはこの新らしい出現に安堵の思をなし、自分が最後に、人生に何も恐るゝところのない人に遇ふやうになつたのをよろこんで、出來るだけ充分に彼の主要問題を物語る。彼の戀人

の父は、初めはこのことを聞いて驚いたが、ついには眞面目になつて傾聴する。オリヴァーは、自分が、將來の妻の家族に於て期待すべきところのものについて、この囚人の意見を知りたいといふ彼自身の父の訴へを繰返へす時、話を打切らねばならぬやうに思はれた。そしてそれから彼自身の位置の残酷なのを鋭く感じて一息つく。けれども、最後の巖まで打碎く激情の犁を感じることに、とうにから慣れて居るランニソーンは、自分の答を完全に準備して居る。青年が一息ついて新なる訴を始める時――

その人は見上げて、まあまあと止めるやうな手つきをした。「あなたのために、少し道を拓けさせて下さい。」彼はいつた。「こゝへ来て、私に會ふといふことは、あなたにとつては困難な事でした。私はあなたの來たのをよるこびます。大概な若い人なら來ることを拒んだでせう。或は異つた氣持で來たでせう。私は、もしもルスの眼に、私の妻の眼に、またあなたのお父さんの眼に私の忠告が價値があるならば、それはあの人たちが、私が物があるがまゝに見ると思つて居るからだといふことを、理解してほしい。そしてそのことは、何よりも先に、私は罪を犯しその刑罰を受けつゝある人であると、自分で知つて居るといふことを意味します。私はその罰を満足して受けて居る。私が正義を見る時それは正しいものである。故に、もしもあなたが、必要上私の罪に關説したので、私がひるむやうに見えるならば、それは罪の償の一部である。私は、あなたが必要以上に、私を損ひ或は私を傷

けて居ると感じて貰ひたくない。あなたは私の前に事があるがまゝに置き得たのだ。」

この言葉の中、この冷やかな忍耐強い態度、この人の類の忍耐性の中に在る或るものが、オリヴァーをして痛切に感動させ、例へば、こんなところでこんな風に自分に應對することの出来る人の心に識せられる、宇宙には道徳的平衡に誤なしとの感、その報償に甘んじて服すること、またルスの心にあつたのと相似たる奇異な誇等いろく新らしいことを感じさせた。

こゝに於てか、この青年は、全く目を醒まさしめられて、この問題が何故に若い人々にはそんなに困難に見えるのか。長上たちはどうして皆かゝる恐るべき「氣落し」を主張するのか。またいかに自分は人生の眞理を知りたいと渴望して居るか、自分の父やルスの母の持つて居るやうな疑や狐疑は皆充分の根據があるのかどうかを知りたいと思つて居るかを、自由に物語る。遂にこの囚人は答を初める。

「彼等は視點を擱んで居らない。」彼はいつた。大なる冒險であるところのものは人生である。戀ではない。結婚ではない。仕事ではない。それらは書冊の各章であるに過ぎない。大切な事は恐れなく路を進むことです――自己の生活を生きるの勇氣を持つことです。」

「勇氣？」

ランニソーンは肯いた。

「それは偉大なる言葉です。あなたは、あなたのお父さんの視點や私の妻のそれを何が惱ますかが解りませんか。一方家内はルスの絶對的安全を希望するのです。お父さんはまたあなたの絶對的安全を要求するのです。而して安全——これこそはまさに人間が持つことの出来ない一事、もしも人がそれを得たが最後、その人の破滅であるところのものです。富める者の天國に入ることの甚だ難き所以は、富者は安全といふことについて誤つた考を持つて居るからです。安全を要求することは、實に人を崩すことです。私はどうしてさうかは知らない。けれども事實さうです。」

オリヴァーは不安さうに頭を振つた。

「あなた。私は全然、あなたの説に従ふことは出来ません。人間は安全を計つてはならないのですか。」

「人は計るべきです。さうです。それは普通の用心です。けれども肝腎な點は、あなたは何を爲し、或は何を得たとして、あなたは結局、安全ではないといふことです。世の中には安全といふやうな條件はない。そしてあなたが安全を要求することが激しければ激しいほど、あなたは危険を冒します。だから、人間は、自分の金について、自分の幸福について、自分の生命について、出来るだけ合理的な用心をし、その他はお任せしなければならぬ。世界中のあらゆる人が求めて居るところのものは、人生の主となる感じだ。けれども、君、こゝにほんといふそれを與へるたつた一つのものがありますよ。」

「さうしてそれは……？」

ランニソーンは明かに躊躇した。何んとなれば彼がこの世慣れぬ若者に語らうとして居つたところのものは、彼の最も尊い所有であつたからである。それは彼が年來の生活で購ひ得た智慧の價であつた。何人もかゝる智慧にさうたやすく與り得るものではない。

「それは」彼は力を籠めていつた。「耐へ忍ぶ力の認識と共に来る。それはさういふものだ。あなた、あなたに起り来るあらゆる事に堪へることが出来る時にのみ安全である。その時、そしてその時だけ！ 忍耐は人間の尺度だ！……時とすると私は、私のやうに、受くるに價するものよりは受くるに價しないところのものを耐へるはわれわれに一層困難なやうに思ふ。私はあなたも知つての通り恐れた。私の妻やその他のすべてのために恐れた。とにかく私の言葉を信じなさい。勇氣は安全である。世に他の種類の安全は一つもない。」

「そんなら——ルスと私は——」

「ルスは私の心の髓です！」ランニソーンは口籠つていつた。「私は、彼女がせねばならぬ以上に彼女を苦まさせる位なら寧ろ死んだがよい。けれども彼女も他の人々と同様に成行に委すより外仕方がない。それが事の法則だ。もしもあなたが、自分で彼女に適するといふことを知り、そしてたしかに彼女の面倒を見ることが出来ると合理的に感ずるのなら、あなたは將來を誓ふ権利があります。私自身としては、私は世には將來を託すべき或るものがあるといふことを信じます。」

この苦勞の結果で得た智慧を語つた人は、神へのこの訴への後、彼の最後の重々しい言葉を、

父親の愛の心からの如くに語る。そしてそれで會見は終らねばならぬ。作者は結ぶ。

その後數分にして監獄の構内を出たオリヴァーは、春の蒼空に對して屹立する高壁を見ともなしに打眺めた。彼はその壁がほんとのものとは思へなかつた。彼の心中には夫程な光りと軽やかさと豁やかさの感じがあつた。

外見上、彼は一時間前に居つたところと丁度同じところに居つた。なほ戦ふべきすべての戦は彼に残つて居る。けれども眞に、彼はそれが既に打勝たれたのを知つた。彼は、あの嚴めしい監獄の閫を越すと共に少年時代を後にすてた。蓋、今の一時間が彼を大人とし、囚人が彼にあらゆる戸を開く大鍵を與へたからである。

## 六

偕、これが、(私は主張する、)内觀である。それは決して「軟」教義ではない。それは瞬間的成果の吟味を受ける實用主義流を遙かに超越して居る。それが行はれる限り、それは宗教的内觀である。加之、それは或る禍(然り、われらの知る最高善そのものに論理的に必然なる條件を除くでなければ、存在からひたすらになくすることは、原則上出來難く、よし神の力を以てするも不可能なりし或る禍)の性質に對する内觀である。靈に於ける生活は、一にこれらの惡が例證するところの條件を假定する。

こゝに於てか、もしも吾人にして、自己のこの行爲は、自己の現在の見地より見れば、一個の罪惡であると充分に告白しなければならぬとすれば、自己自身の今や避け難き行爲を充分に認識することにも増して悲しいことがあらうか。けれども、個人的表現の範圍、自由の範圍、選擇をなす力の範圍が抑々自由に開放されてある以上、どうしてかゝる禍が簡単に排除され得ようか。われらの同胞の生活の或る形相に對して自ら責任を負ふことに含まれる危險を豫想することなくして、吾人はどうして靈的效果―青年が最も熱心に要求するところの特權―を領有することが出来るか。われらの失策に關しては、われら自身の失策をなすの特權、或は少くともその失策の適當なる配分を受けるの特權にも増して尊い特權をわれらすべてが要求するであらうか。われらが行爲する時、一一の行爲は、それが取返へしのかぬものであるが故に、永遠的になされる。われらが愛する時、われらは他人の運命をわれわれ自身の運命と結びつけるの特權を要求する。故にわれわれ自身の世界の如き、かゝる世界の悲劇は、吾人にして、その自由選擇の範圍、その行動の効驗性の範圍の二つについてのあらゆる個人的人格を除き去るの用意がない限り、簡単に存在から一掃し去らるべきやうなものではない。故に、かゝる世界に於てわれらが悩む時、われらは

一體世界がなければ、ほんとに、こんな苦しみをする必要はないのといふことを知る。しかしながら、まさにわれらの禍がわれら自身の人としての意志と最もよく結びついて居る時にこそ、われらは、かゝる悪の單なる除去は、われらの精神的自由は、効果あることに對するわれらの渴求、われらが他の人格との融合を愛する心等が、われらをして最高善の條件と認めしめるところの一切の條件を廢除するでなければ決して行はれ得るものでないといふことを知る。いかなる神も、嘗に誤つて選擇するの特権のみならず、諸君の誤つた行の結果に諸君の同胞をも巻き込むの特権をも諸君に許すことなしには、自己表現の善を諸君に與へ得るとは考へられない。何んととなれば、諸君が諸君の同類を愛する時諸君は、その同類の生命の中の一要素たらんことを目的とし、而して、諸君からこの特権を奪ひ取ることは、諸君の全然の失敗を保證する事であらうからである。しかしながら、もしも諸君がこの特権を所有するならば、諸君は、精神的關係のその意義、その深さ、その幅、その豊富さに比例して悲劇の可能性に充ちて居るところの生命に與る。けれども、かゝる悲劇に面せよ。然らばそれは諸君に何を示すか。それは可能性、悪を絶滅するのでもなく、或はそれをかなしむことを止めるのでもなく、第一、諸君の悲哀の觀念化を通して

て、まさにこの悲哀を縁として、われわれ個人の相互關係、社會的秩序、生活全體に對する關係の意義の深さを見ることにより、第二、諸君の運命の忍受により、第三、かゝる悲哀を縁としてのみ贏ち得べき善を精神の威力によつて獲得するの精神力を示すの可能性である。

これらの善が何であるかは、たとひ小部分に於てはあるが、かの囚人が丁度今われらに告げた。グリセルダはそれらについてなほすつと深い或るものを告げた。蓋、災難と忠誠とは實に明かに分離し難い友であるからである。忠誠なる人が、彼自身の内的生活に親しく屬し喰ひ込んだ災難に自ら遇はないところの世界では、忠誠はあり得ない。このことの眞であることは、あらゆる誠忠なる經驗の保證し得るところである。

偕、かゝる悲哀、かゝる觀念化されたる悪、(もしも尊いかなしみが全然なくならしめられるならば、かゝる悩みのみが可能ならしむるところの勇氣、誠實、精神的自恃、災難を経、災難の中にあり、またそれを超越しての平等もまたなくなされるやうに、善とからみ合つて居る悪) — それらはたしかに「悪は除去さるべし。」といふ抽象的原理の誤なることをわれらに示す。それらの悪は神聖なる意志もまた困苦を縁として完全にされねばならぬものだといふことをわれらに示

す。既にわれらはかゝる経験の意味を、たゞ斷乎たる活動を通じて、勇氣を通じて、忠誠を通じて、精神の力を通じて、のみ理解し得る限り、これらの経験は決して怠惰をも、單なる受動的態度をも、或は神秘的懈慢をも是認しない。かゝる悲哀に對する能動的なる處置は、ジエームスその人の嘗ていしくも言明せるが如く、生命に新たなる延長を與へる。いかなる経験もかゝる悲哀の経験がなすより以上に、われらは、われらの忠誠に於て、またわれらの勇氣に於て、人生の主（悲哀を縁として克服をなすところの）といかにして一となりつゝあるかをわれらに示すことに於て優るものはない。

然らば、破壊者たる人をして、世には、たとひ人が神であつたにしろ、どうしても破壊されない一つの悪が存在する、もしもそれを破壊すれば、或る世界の悲哀に堪へ、これに打克つことによつて神と一つになることを渴望する（アキレスのそれに優ること無限なる）大望によつて鼓舞される人々のすべてが持つことを喜ぶ一切の精神的勇敢をも、それと同時に破壊することになつてしまふやうな悪があるといふことを記憶せしめよ。

われらはかく内觀の根源を示した。その根源が啓示するところのものについてもつと語るこ

とは、直ぐさま、諸君の知らるゝが如く、基督教一切の教の中最も重要なもの即ち、贖罪の教義に近く私を導くであらう。けれどもかゝる研究は他の領域に屬する。

## 第七篇 靈の統一と見えざる教會

私の現在のそして最後の講演は「靈の統一」なる名辭によりて私が意味するところのものゝ若干の説明を以て始めなければならぬ。次に私は、「見えざる教會」なる名辭の私の用法を定めなければならぬであらう。かくして後、われらは宗教界の全體を通じて、日々その指導に訴へるところの人々によつて、種々に解釋されて居るほど、それほど遍在的なる宗教的内觀の一根源の考察に自由に專注することが出来るであらう。われらの論議の結果は、希くば、諸君の或る者を助けて、もしも私の考にして正しいならば、あらゆる高等宗教の心核たる、かの眞の忠誠の開拓に於て最も大なる助けが見出さるべき領域の方へ諸君の注意を一層向けしめ得るであらう。

### 一

本講演に於て、私は宗教的對象即ちそれについての知識が人間の救ひに助けとなる對象を、屢々繰返へして「超人間的」及び「超自然的」對象と呼んだ。これらの對象が超人間的で超自然的

であると私が思ふ所以については、論議の進行につれて私は多少充分に説明した。けれども、熟知された傳統的な名辭を用ひると兎角誤解を惹き起し易いものである。私が問題の傳統的な言葉を宗教的對象を説明する形容詞として選んだのについては完全に確かな理由がある。けれども私は、私の使用法が熟慮的に含まうと企てるところのものに關しては諸君の心に何等の疑をも残したくない。私は、或る人間的なるものが或る超人間的なものと比較され、自然なるものと超自然的なるものが比較された時、諸君の心中に這入つて來る漠然たる聯想を悪用するやうに見えることを欲しない。われらの論議のあらゆるところに於て、われらは暗黙の間に豫想して居つたが、而も今や宗教的内觀の根源のわれらの目次の中にその確かなる位置を取ることになつたところの精神生活の一形相を私がこゝに論ぜんとするこの結語は、この新根源そのもの及び「宗教はそれに訴へるの合理的權利を持つて居るところの」その他のあらゆる超人間的なる超自然的なるものゝ二つが共に、私の心には、實在であり、而して人間的の内觀の一つの根源或は一つの對象であるといふ精確なる意義に關する記載をなすことによつて、無用の誤解を豫防する最良の機會を私に與へる。故に私は今力説したところの二つの形容詞を、私がこれまでに述べたよりはいくらかそ



の意味を十分に叙述して説明しよう。たとひこの新説明は説明の都合上専門的事項に互ることありとも、超人間的なるもの及び超自然的なるものについてのわれらの長い説明によつて、希くば、われらは今や充分にそれを理解するの準備が出来て居ることと思ふ。

われらの衷にわれらの救ひの要の意義を喚起したところの人間性の特質についての私の一般的概説に於て、私は我が第一講及び第二講の二つに於て、自然に構成せられたるまゝの人間の一つの主要なる缺點、普遍的なる缺點は見渡しが狭いことであるといふことに重きを置いて説いた。私はこの狭さを、その最も實際的に注意に價する事例の或るものによつて説明した。私はその後

の講義に於ても、われらの生活のこの同一形相に繰返へし繰返へし論及した。

偕、人間はもともと人生に對する見渡しが狭いといふことは、第一に、私が人間意識の「形式」と呼ばねばならぬところの或るものに依るのである。私がこの形式によつて何を意味するかといふことは、私が丁度今關説したところの事例そのものによつて既に充分に諸君に説明した。けれどもかゝる題目に關する専門的の明瞭さは之を獲るに困難である。然らば、それが人生の問題及び實在の問題についてのわれらの論議に於て普通無視されて居るだけそれだけ、われらの全運命

を形造る上には大いに勢力ある事柄について、私が幾分の注意を以て主張することを許せ。

人間は或瞬間にはたゞ甚だ狭い範圍の事實にのみ注意することが出来る。常識的觀察はこの事を諸君に示す。心理學的實驗はそれを種々の方法に於て力説する。旋律的な拍子——太鼓の音——或は機關の響、或は通りを通り過ぎる馬の足音に耳傾けよ。諸君はこれらの打音或は其他の響、或は何等かの種類の旋律的諧音句の甚だ短い連続より以上には、完全にはつきりと直接には掴めないであらう。もしも規則的に繰返へさるゝ音響の一組の旋律があまりに長過ぎるか、或はあまりに複雑過ぎると、それは諸君に取りて混亂してしまふ。諸君は少くともそれが繰返へされて慣れて来るまでは、それが何であるかを直接な注意によつて見分けることは出来ない。數個の對象をして同時に諸君の前に持ち來らしめよ。もしもそれが注意されるように停止して居さへすれば、諸君は、今は一つのもの次には他のものと、任意に注意を向けることが出来る。けれども、倏忽の間に之を見る時には、同時にそして一目には、甚だ僅かのはつきりした對象のみが見え、その一瞬間の現はれにより、それがどんなものであるかと認識され得る。もしもその對象が暗中に於て電氣の火花によつて諸君に顯はされるか、或は諸君の眼の前に急速に運動する遮壁内の一つの

裂け目を通して—その対象は、裂け目が対象と諸君の眼との間をじかに通過する時の極めて短い時間の間だけ、諸君の観察に曝露されるやうに見られるならば、數個のはつきりした対象を一度一緒に見る諸君のこの制限は實驗的に吟味することが出来る。かゝる實驗から出た結果は、こゝではたゞ最も一般的な方法に於て、われらに關係するだけである。われらはたゞ—かゝる吟味が示すが如く—吾人が以てわれらの意識の範圍とよぶところのもの、われらの意識がわれらの生活の個々の瞬間に於て多くの事實を掴むの力は極めて制限されてあるものであるといふことを知れば、それで充分である。われらが一度に見得、辨別し得、認識し得、われらの前に明かに保持し得る同時に見られる事實の數に關しては制限がある。またわれらが旋律的なる繼起或は然らざる繼起の特質を直接に理解し得るやうに相對し得る繼起的事實の數及びその繼續時間に關しても制限がある。

諸、われらの意識の範圍のこの制限は、私は繰返へしていふ、意識的生活の人間の型の永遠の缺點である。これ實に私がそれを以てわれらの意識的生活の「形式」に於ける一個の缺點であると稱する所以である。それは單にわれらの感覺器官のどれかが役に立たないといふ缺點ではない。

それは觀察すべき事實の充分なる多様をわれらに供給することを眼或は耳が爲し得ないといふことではない。否、却つてわれらの眼とわれらの耳とは共に、殆んど斷へずわれらに印象の過多を注ぎ込んで居る。特にわれらの一層散漫なる覺醒時に於て然りである。もしもわれらが事實を知り明瞭さを獲得しようとならば、われらは一層注意深き直接な見方のために、時々刻々、これらの印象の中から僅かのものを選び出さなければならぬ。故に、いかなる場合に於ても、この制限はわれらの感覺器官の缺陷によるのではない。これはわれらの意識の範圍のこの制限によつて表はさるゝところのわれらの意識の全體の組立て、事物を注意するわれらの特色ある方法である、この計劃の下にわれらの人間的意識は形成される。われらの注意の型はかく構成されて居る。われらはすべてかういふ風に生くべく運命づけられて居る。或瞬間には僅かに二三の事實或は觀念のみを明瞭に把握するのはわれらの人間としての運命である。而して、われらはかくの如きものであるが故にわれらはわれらの人間的性質を最もよく利用しなければならぬ。

しかし一方に於ては、われらはいつてもこの自然的な範圍の狭さの結果と戦ひつゝあるといふことは、合理的生物としてのわれらの本質そのものである。われらが何か意義あるものを知らうと

し、何か意義あることをしようと試みつゝある限り、われらは常にわれら自身の意識の形式に積極的に謀叛しつゝあるのである。われらはたゞ二三のことではなく、一時に多くの事を把握したいと思ふ。われらは單に瞬間的な一瞥に於てではなく、長い擴がりに於て人生を見たいと思ふ。われらは、われらの繼續的瞬間がわれらの前に開きまた再び急に閉ぢてしまふ裂け目を通して宇宙を見なければならぬものに常に似て居る。而もわれらはこの瞬間的裂け目を通してはなしに何等障げる壁なしに、廣き達觀に於て、而もそのすべての眞の多種と統一とに於て、事物を見たいと思ふ。なほ意識のこの單なる形式に對するわれらのこの謀叛は、決して單なる怠惰な好奇心でもなく、或はたゞ多様の空しき豊富さを氣むづかしく求めて居るのでもない。達觀の一層廣き明かさを得んとするこの苦闘には、救ひそのものが賭けられてある。われらの見通したところによれば、最も賢明なる人々の心も、或る瞬間に於てわれらの意識の形式が把握する事を許す以上に、觀念及び對象についての一層大なる多種を見たいと欲する點に於て、常識の分別と一致して居る。われわれの意識の範圍の自然的狭さによりてわれらに課せられ、われらがその中に生きる意識の形式によつてわれらに課せられたる制限から脱却すること、——これ科學及び宗教の共通の問題

題、われらの高等な性質の一層冥想的な形相、一層積極的な形相の共通の問題である。われらの意識の形式はわれらの主要なる人間的悲哀の二である。

諸事實をわれらの注意に旋律的に現はすやうな工夫を設ければ、われらは——たいしたことも出來ないが——われらの意識の範圍を擴大すべく幾分のことをなすことは出来る。けれども、大概はわれらは、範圍のわれらの制限からたゞ間接な、直接でない脱出をなし得るのみである。われらの救ひはかゝる間接なる成功の獲得に依存する。われらが、われらの習慣を作る力、記憶の力、抽象作用の力を用ひて、瞬間的經驗の諸對象が廣い幅を持つた意味を獲得するやうにし、それがために、われらがわれらの瞬間的注意の前にこれらの對象の僅か二三を得る時でも、なほ且つわれらは、われらの意識範圍の狭い形式では直接に掴めないところの、事實の連續、連絡、統一等をわれらの人間的仕方によつて理解することが出来るやうにする限り、われらは間接に解脱を得る。かくて、相似たる經驗の繰返へしは、習慣——過ぎ行く經驗の或る新らしい瞬間の各の要素が、われらがわれらの過去の生活をふりかへる時、われらが過去の經驗の全體の経過から出來たものと想像するやうな意味を以て満たされて、われらに來るやうな習慣を形成する。而して、

習慣形成のかゝる限りなく變化する経過によつて、われらはそこに僅少の事實の瞬間的現はれが、與へられたる瞬間に於て、われらが決して直接には掴む事の出来ないところのもの、一個間接的會得の價値―即ち、人間の廣い遠觀の價値をわれらのために獲得するやうな内觀の階段に到達する。われらが普通智識と呼ぶところのものゝすべては、瞬間がたゞわれらに暗示し得るのみなるものゝかゝる間接なる把握によるのである。(但し、われらは普通この間接な現はれは恰かもそれ自らで一個直接な内觀であるかの如く感じて居るが。)私をして例證せしめよ。或る花の香は、われらがわれらの生涯のすべての夏の全體の結果と認むべき意味を擔うてわれらに來る事が出来る。老人の皺のよつた顔は、その一々の瞬間に表はれた痕跡に、われらが彼の生涯の經驗と思ひ、徐々に得られたこの人の品性であるとなすところの微候をわれらに示して居る。而して、全く同じ方法で、殆んどすべての過ぎ行く經驗は、人間的生活の數年、或は甚だしきに至つては幾十年の聲を以て語るやうにわれらには思はれる。なほ他の例を取れば、たつた一本の樂器の絃も、その絃が惹き起す樂曲のわれらの以前に聽き得た範圍のすべてを要約して居る。

かゝる方法に於てわれらは、われらの狭さにも拘らず、恰かもわれらが廣く見るかの如く、生活する。而して、われらの生活の如何なる瞬間に於ても、決して充分には實際上翻譯されないが、而もいつもたゞ人生の一層廣き吟味が證明するであらうところの解釋として豫想されて居るところの事實の意義及び連絡を、われらは絶えず、恰かもそれがわれらの實際の經驗であるかの如く見て居る。かく、過ぎ行く瞬間の堅い殻に閉ぢ籠められて、われらは(或る方法に於て、そしてわれらの意見はいかにともあれ)自らを經驗の無限の領域の王者だと思つて居る。或はもしも、われらがハムレットのやうに、われらをしてわれらの解釋の正鵠を疑はしめるところの甚だ多くの「惡夢」を見て居つて、われら自身の意識の形式のこの頑固な自然的牢獄からの脱出に對する要求でも感じて居ない限り、さうするのを好むであらう。故に、われらは、われらの眞理探究のすべてに於て、われら自身の現在の見解よりはより廣い一個の見解に訴へる。

われらの狭い意識範圍の結果から間接に脱却するの最も組織的な方法は、われらの思惟過程即ち抽象的概念、概括的概念に對するわれらの處置が例證するところの仕方である。

かゝる抽象的概念概括的概念は、既にもいへるが如く、目的に至るの手段である―決して目的そのものではない。われらは、概括或は抽象の手段によつて、漸次、示されたる經驗の對象の長

き系列に多少成功的に置き換へ得る標號を選択することが出来るやうになる。而してわれらはまた事物を評價し或は記述する積極的な方法——われら自らをして人生の仕事に對する是等の積極的態度を思ひ出さしむることによつて、われらが人間經驗の數年或は甚だしきに至つては數十年の意味を一瞬時に要約することが出来るやうにわれら自身に思はせ得るやうな方法に、自らを訓練することが出来る。かゝる標號、象徴及び態度は概括的概念抽象的概念のわれらの蓄藏を構成する。われらの多少系統的にして有意的なる思惟は、或瞬間に於て、甚だ僅かのこれらの標號及び態度の連絡及び意味を同時に觀察する一つの経過である。われらはこれらわれらの觀念を積極的に一緒にまとめて、その瞬間に於て、われらの意識の範圍の狭さに拘らずその時その場に現はれ得る小さな連絡を見守る。これ、例へば、われらが數字の桁をメめる時、問題を解く時、或はわれらの實際的生活の計畫を立てる時起るところのものである。けれども、用ゐられる觀念のおの／＼、これらの標號、象徴、態度のおの／＼は多かれ少なかれ安全に、經驗の事實の或る大塊と置換へ得るが故に、われらがわれらの狭い範圍に於て、またそれを通してのみ觀察するところのものも、間接には經驗の甚だ廣い範圍、その範圍がわれらのよりはすつと廣い意識のみがこの眞

の意味を直接に現はし得るやうな或るものを會得することに我々を助けることが出来る。

かく、あるがまゝの意識の形式と範圍とに閉ぢ籠められて、われらは、われらが直接に得るところとは出来ないところのもの、すなはち、われら以外の他の形式の意識のみが獲得し得るが如き眞理及び意味の發見を間接に完成せんとする方法の獲得或は工夫の中にわれらの生涯を送る。偕、私が第三講及び第四講に於て主張せるが如く、われらの此の間接の手續の妥當性及び價值の全體は、事物についてのかゝる一層廣き見解、意識のかゝる一層大なる統一、われらが間接に而も間斷なく目指すところの意味のかゝる直接の把握は宇宙に於ける空想でなく一個實なるものなりといふ原理に依存する。かして私の主張した通り、宇宙そのもの、實在性全體は、事物の全體の意義のかゝる包含的にして直接なる把握が實なりとの名辭に於て決定されなければならぬ。私はこゝにたゞこの提言は何人も自家撞着に陥ることなしには否定することを得ざるものなり、といふ私の意見を繰返へし得るのみである。

偕、われら人間が持つて居るところの意識の狭い形式と、人生に意味を付けやうとする常識のあらゆる努力、經驗の全體的評決を發見せんとするあらゆる科學的努力が、その實在なることを

豫想して居るところの、これよりも廣く而して最も廣き意識の形式との間の相違——すなはち、これらの二つの意識の形式の間の相違は、一つの形式（われらすべての持つて居る形式）を人間的と呼び他の形式（さながらの經驗を見る一層廣い意識の形式）を超人間的と呼ぶことによつて文字通りにいひ表はされる。今指示した工夫によつてわれらがたゞ間接にのみ與るところの事物についての一層廣き意識の見方は、たしかに人間的ではない。何んとなれば、いかなる人間も嘗てそれを直接に所有したことがないからである。それは夢ではなく實なるものである。何となれば、われらの我が理性の研究に際して見たるが如く、たとひ、諸君は或る形に於てはこの斷定を否定しても他の形に於てこれを再び確かめて居るからである。蓋、諸君はたゞ諸君が斷片的に見るところのものを全體として見る一層廣い見解を豫想してのみ、諸君自身の意見の眞偽を規定し得るからである。眞理に關する意識の直接の見解と接觸を得んとするわれらの間接的努力の一切に於て、われらが豫想するところのこの意識の統一はわれらの意識の水準以上のものである。この統一はわれらがわれらの意識の形式に於てわれらの前に實際に得るところのものを含む。それはまたわれらが間接に掴まようと試みつゝあるところのすべてを含む。備、人間的ならずしてわれ

らの水準以上なるもの、而してわれらの内觀の一切を含み、而も、われらの間接の努力を超越し之を是正するところのものは之を超人間的と呼ぶのが最もよい。かゝる超人間的意識は實在なりとの提言はわれらの經驗は或る瞬間に於てわれらが直接に掴むところの連絡の單なる斷片以上の何等か實在なる意味或は連絡を有すといふ斷定と精確に同一なる提言である。

なほ進んでは、かゝる一層大なる意識——われら自身の意識を含むが、而もそれがものを見渡す時の範圍の大きさ、變化の多様、連絡の完全さの大なること等により、形式に於てわれらと異なるところの意識——この意識を超自然的意識と呼ぶことは、充分に緻密に、またもしも諸君が望まれるならば、専門的に辯護され得る言ひ方を用ふることになる。「自然的」といふことによつてわれらはたゞ、われらの經驗科學がその特質と作用とを研究し得るやうな種類のものに適用される法則に支配されるといふことを意味する。もしも諸君にして直接な注意の活動によつて、諸君の人間の意識に於て諸君が今その關係を直接に掴み得る經驗の三つか四つの眼の前に現はれた事實でなしに、幾千といふ經驗の意義及び連絡を一度に、一人で親しく而もはつきりと掴み得るといふことを急に發見するならば、諸君は實に自分は奇蹟的にも、その内觀が天使のやうな豊富さ

と明瞭さとを獲得したところの別なものにされてしまつたといふのであらう。

しかしながら、もしも諸君にして(人間的経験の事實の眞の連絡に關するあらゆる科學上の學說及びあらゆる常識意見が、斷定することを諸君に要求するが如く) 人間的経験の材料の管に幾千といはず無數の集合體は、いかなる個人も嘗て直接に觀察したことのないやうな完全<sup>\*</sup>に連絡ある全體的意義及び意味を實際上所有して居るのであるといふことを斷定するならば、その時はいつも、事實の報告たらんと企て、明かに經驗の事實に關係するこの諸君の斷定は、意識生活のわれら自身の自然的領域の眞性質及び連絡のかゝる超人間的達觀が存在するといふ斷定を含む。われら自身はわれら自身の意識の形式を決定するところの自然的條件によつて嚴密に制限せられる。而してこれらの條件が自然的であるより以上に一層特色的に自然的であるいかなる條件もわれらによつて認められることは出來ない。われら人間にとつては、無數の材料を一度に見渡すことによつてこれらの條件を超越することは、われわれの意識の型を支配するとせられる自然法に對して極度の例外を要求することになるであらう。誰かが嘗て太陽系及び星の系統の物理的連絡の範圍全體の直接の見透しを一度に成就したと信ずることは——換言すれば、天文學上の經驗の全範

圍をたゞ一度の注意で擱んだと信ずることは、——或る最も信じ難い奇蹟が何時か起つたといふことを信ずることであらう。——苟もわれらが今所有する知識が、われらをして人間がその制約の下に生き、その制約の下に人間的形式に於て意識する自然的條件が許すところのものを豫見し得しむる限り、これ一個の信じ難い奇蹟である。けれども他の一面に於ては、われらすべてがなすが如く、天文學の報告するところの人間の經驗の材料のこの科學的解釋の妥當性を受け容れるといふことは、かゝる解釋は、もしもそれらの事實がたとひ、その全體としては何人も經驗することは出來ないが、或る限定された意味に於て經驗的でないならば、何等の意味もないところの事實の系統を多かれ少かれ完全に記録して居るといふことを承認することである。即ち、天文學上の實眞理の承認は、われらには全く超人間的に思はれるところのかゝる意識は、星が實在なるが如くに實なるものであり、諸星の軌道が實であり諸星相互の關係のすべてが實なるが如く精確に實であるといふ承認を含む。けれども、いふまでもなく、われらは、天文的事實に關するかゝる超人間的な展望をして心理學的に可能ならしむる自然的條件をわれらに規定せしめる經驗を研究しようなど、企てることは出來ない。

自然科学は、われらの意識の形式では直接に證明することの出来ない経験の連絡の妥當なる解釋なりとの承認は、そのあらゆる歩みに於て、意識のかゝる超人間的形式、かゝる超人間的統一は實なるもの也といふことを論理的に豫想する。蓋、科學上の事實は實なる経験に於ての事實及び實なる経験に對しての事實としての外は規定し難いからである。けれども他の一面に於ては、われらは物理學的知識或は心理學的知識に於ては、われらをしてわれらの一層高い意識の形式をわれらの自然法と呼ぶところのものの下に持ち來らしめ得るほどの進歩を望むことは出来ない。故に意識の超人間的形式はわれらのためにまた超自然的に残る。もしわれらの世界に關するあらゆる斷定が或は眞であり或は偽であるためには、意識の超人間的形式はまた超自然的だといふことはわれらの承認せねばならぬところである。何んとなれば、すべての斷定は経験についてなされ経験の眞連絡についてなされ、経験の系統についてなされるからである。けれども、いかなる條件が、いかなる自然的原因が、意識のかゝる超人間的形式をして存在せしむるに至るかは、われらの研究し得ない所である。蓋、自然或は自然法に關するあらゆる斷定は、自然的事實及び法則はそれがかゝる一層高い意識の統一に知らるゝ對象である限りに於てのみ實在であると云ふ事

を豫想して居るからである。茲に問題になつて居る統一そのものは決して自然的對象ではない。然るに、一切の自然的事實はかゝる統一に對する對象であり、かゝる統一の意味の表現である。われら自身に優れる意識の諸形式は實在なりといふこと、またかゝる意識の形式はすべて結局一つの世界包括的な内觀、同時にまた世界意志を表現する特質を持つて居る内觀に統一されて居るといふことを主張する私の理由はかくの如く明白である。かゝる一層高い意識の統一を超人間的にして超自然的なりといふ、私の根據もまたかくの如く確實である。「靈の統一」といふ名辭によつて私はたい、これらの超人間的なる意識の形式に屬するところの意味の統一をいふ。われらは、われらをして意識の一層高い形式、即ちその全體に於て世界を知り、世界を評價し、世界の生命に於てそれ自らを表現するところの靈と接觸せしめ、之と調和せしむるとこの眞理と生命とを、如何なる方法にてもよし、われら自身の意識の形式が許すところの仕方にて、われらが發見し表現する限り、自らこの統一を分擔し、われらの生活に於てまたこれに與るのである。

われらはわれらの合理的生活のあらゆる實行に於て、超人間的なるものにかくの如く近く、超自然的なるものにかくの如く近いのである。他の一面に於ては、人間的なるもの及び超人間的な



るものの實在をわれらに證明し、或はそれに對するわれらの合理的關係を規定するためには、何等の魔術も奇蹟も、或は潜在意識からの神秘的な鼓舞をも積極的に要としないのである。而して、われら自身の意識の型とこの一層高い生命との間の本質的相違は、形式上の相違である。而してまた意識的内觀のその一層廣くしてまた最も廣き範圍が、意識の超人間的型は意味の深さ、表現の完全さ、事實の豊富さ、靈觀の明瞭さ、われわれの意識の形式の狭さの故にわれらに屬さないところ目的の成功的體現等を含む限り、精確に内容の相違でもある。

吾人は超自然的なものや超人間的なものを見せて貰ふに何の奇蹟をも必要としない。諸君は靈の統一は世界に於ける一個の事實であるといふことを證明するために、休徵しよしや、奇蹟を必要としない。常識は靈の統一の實在を暗黙の間に豫想してゐる。科學は經驗の秩序を支配するところの法則の中にこの超自然なるものゝ生命が表現されるその仕方を研究する。理性はその眞實在に對する内觀をわれらに與へる。忠誠はそれに奉仕し、そしてその奉仕を悔いない。救ひとは實に、この超自然なるものの目的とこの超人間的なるものゝ表現とのわれらの積極的調和を意味するものである。

## 二

われらをしてその性質が今や再び定義されたところの靈的世界との確定的にして實際的な關係に至らしめるところの内觀の諸根源の中にて、最も有効なるものゝ一は、純粹なる目的原因に忠誠たらんと思つて居る人々、彼等の共同の目的原因に對する奉仕を通じて靈的同朋の或形式の中に既に一緒にされて居る他の人々の、生活及び言葉である。靈に對するかゝる同朋的奉仕者の生活のこの眞の統一こそは、それ自らで超人間的なる意識的實在の實例である。而してその成員は宇宙の目的との調和に自らを至らしめんと専念して居る。かく靈に於て忠誠に生きるとこの人々の同朋團體は、私の見地からすれば、まさにそれが一單にその成員の訓練と傳統との故に偶然にも彼等がそれに専念するやうになつた特殊な目的原因のみならず、一切忠誠なるもの共同の目的原因にも奉仕せんと努力によつて實際的に動かされて居るのに比例してその性質に於て本質的に宗教的なる同朋團體である。かゝる同朋團體はそれが實に人間的であり、而してそれ故に狭いものである限り、一切忠誠なるものゝこの共同の目的原因如何といふことを甚だ明白に決

定し得ないであらう。蓋、その成員は思索的に反省ある人々ではないであらうからである。けれども、もしも彼等が一方に於ては、彼等自身の完全にほんとな兄弟的統一を得て喜んで居るのみならず、彼等はまた一般人の間に同朋團體を發達せしむるを愛するの心によつて實際的に導かれてあるならば、すなはち、もしも彼等にして、彼等が他人の忠誠を了解する限り、その忠誠をも尊敬するならば、もしも彼等にして管にわれらの社會の同朋の間に不和を蒔かないやうにするのみならず、隠されてあることの出来ないのみならずまた他の都市の模範たる丘の上に立てられたる都—忠誠の精神を播布するの中心たらんとするならば—かゝる本質的に生産的なる同朋團體の成員は實際に諸目的原因の目的原因に忠誠である。彼等は彼等の生活を知れるすべての人々、彼等の生活の意味を正しく味ふところのすべての人々に對する内觀の根源である。而して忠誠の王國とはかゝるものである。而してかゝる人々が形成し奉仕するところの社會は本質的に宗教的社會である。各人は靈の統一の一個の實例である。各人は超人間的世界に屬するところの一つの實在を代表する。

人間的條件の下に現はるゝところの社會的形式の變種は、豫め預言し得ざる程老成なる變種で

あり、而も人間を導く動機は無限に複雑であるが故に、忠誠なる人々の相異れる各種の社會は最も多種なる段階に於てのかゝる宗教的特質宗教的價值を有し得る。何んとなれば、かゝる變種は、人は或る瞬間に於ては、彼等の意味するところの全體を知らないといふ人間意識の形式の狭さから起るからである。同朋團體及び合名會社其他人間の工夫する社會的組織を、これに關係せる人々にとつて意識的に宗教的なるところの團體と、一層大にして一層深き忠誠に對する關心を缺くがため世俗的なる團體とに區別する確然たる線を引くことは出来ない。それによつてかゝる區別がなされるべき吟味標準は原則上確定的なる標準である。けれども、この吟味標準をあらゆる可能なる場合に適用せんとせば、人間の心情の探求、及びわれらが無智なるがために、われらは甚だ一般に不妥當なる評價しかなし居ないところの行爲や動機の一個正當なる評價を要する。商會の如きは一般に宗教的組織の模範であるやうには見えないであらう。而もそれは此の商會員及びその使備人から正當に忠誠を要求する。もしもそれが單に利益のためにばかり生き活動するならば、それは實に世俗的である。けれども、もしもその仕事が社會的に有益であり、もしもその目的原因が尊敬すべきものであり、もしもその取引が正直であり、もしもその同盟者、その

商敵に對する取扱方がその社會及び（その影響がそこまで廣がる時）世界の商業的生活全體の信用、誠實、安定を助長するやうなものであるならば、もしも公共的精神及び眞の愛國心がその行動を鼓舞するならば、もしもそれがその時來らば、名譽のためには利益を犠牲にするの用意がいつでも出來て居るならば、——然らばそれが眞に熱烈なる宗教的同朋團體となり得ない理由、またさうあり得ない理由は一も存在しない。たしかに家族は一つの宗教的組織となり得る。而して人間の最も舊い傳統のあるものは、それが宗教的なものであるべきことを要求した。世にはまた、而して正當に、國家を以て一つの神聖なる制度なりとする愛國の宗教がある。かゝる宗教は完全に純粹な方法に於て靈の統一に奉仕する。世界歴史上最も重大なる宗教運動は、かゝる觀念化されたる愛國心から發達した。基督教は、猶太に起つた地方的名稱を一個天國的な世界に移すに際して、愛國心がその一層高い水準に於て要求するところの神聖さを證據と頼んで居る。

要するに、與へられたる人間的同朋團體が宗教的組織であるかないかといふ問題は、一にその眞の動機に關する眞理にのみ依つて、その同朋團體が自身で決定すべき問題である。その團體の目的原因が忠誠の一個適當なる目的原因を標示すべき特質を持つか。その團體はその目的原因

に奉仕するに當り、その奉仕に依つて靈の神聖なる統一の（熱誠なる人間の形式に於ける）表現を管にそれ自身の同朋内に於てのみならず、その影響の廣がる限り廣く増進せしめるやうに奉仕するか。もし然らば、それは本質的に宗教的組織である。なほ、その世界的影響の範圍が決して諸君をしてこの團體がこれらの要求に適應するの程度を判斷せしめ得るのではない。その成員人數が決して、何等か本質的な標準を作るのではない。いづこにてもあれ、二人或は三人が一緒に相結び、彼等の出來得る限り、神聖なる意志（一切人間の忠誠なる統一を意志するところの）が彼等に要求するところの靈に於て生きつゝあるところには——そこに實に靈の仕事がなされる。而してその組織は一個の宗教的同朋團體である。宗教團體はそれをして宗教團體たらしめる何等人間の掟を要しない。たとひそれが一つの住む人もなき島の上に住み、その成員のすべてはすぐに死んで人々から忘れられても、その忠誠なる行爲は永遠の世界の變更すべからざる事實である。而して普遍的生命はこゝに少くとも神聖なる意志が人間の活動に於て表現されたるを知る。けれども、かゝる團體が存在し、またその生命に於て、その意圖に於て、宗教的なものと明白に認め得る限り、これらの團體はその影響の下に來るすべての人に對して、宗教的内觀の一

個の源泉を形造る。かゝる根源は、依つて以てわれらのこれまでの根源の或るもの、或はすべてがわれらに開かれ、効果あるやうになり、實を結ぶの、手段として活動する。従つて、この新根源に於て、われらは宗教的内觀の冕冠たる根源を發見する。

この最後の言明は、それにも拘らずその適用を一定數の宗教的團體に、(そしてそれらにのみ) 限りたいと思ふ所の多くの人々或は、或る場合に於いては、その適用を何か一つの宗教的團體にのみ限りたいと思ふ人々によつて採用せられるところのものである。例へば、世にはいろいろな特殊な理由から宗教的内觀の冕冠の根源は見ゆる教會であるといふところの多くの人がある。この名辭によつては、その傳統の意味に於て夫を用ふるところの人々は、たゞ一つの宗教的組織のみ、或は高々のところで宗教的組織の或る一團をのみ意味する。見ゆる教會は、一定の傳統により、一定の實なる或は想像されたる歴史により、多かれ少かれよく決定されたる信條により、及びその宗教がその起原及び典據をそれに負ふところの神聖なる啓示に關する一層進んだ斷定によつて特色づけられるところの一つの宗教的組織或はかゝる組織の集團である。この定義の理解に含まるる教義上の問題には、本講演は、諸君の今や承知せらるゝが如く、何等直接な關係を持た

ない。われらの現在の目的に對しては、かく定義された見ゆる教會は實に、而して明かに、而してわれらの現在の意義に於て、一つの宗教的組織であるといふことをいへばそれで充分である。見ゆる教會は、こゝにわれらに關係するこれらすべての歴史的形式に於て、人々に救ひに至るの道を示さんと企てた。それはその成員を一つの靈的同朋團體に結合することによつてその仕事を遂行した。それは理想に於てその關心を全人類にまで擴げた。それは普遍的同朋團體を目あてとした。それは忠誠を規定しこれを呼び出した。見ゆる教會はこの忠誠を以て神への奉仕、全人類の目的原因への忠誠と考へた。見ゆる教會の傳統、見ゆる教會の奉仕者の生命、見ゆる教會の奉仕、見ゆる教會の教等は見ゆる教會が嘗てそれに影響を及ぼし、而して今なほその多種なる形式形體に於て影響を及ぼしつゝある大多數の人の宗教的内觀の不盡の根源であつた。また現にさうである。故に見ゆる教會の起原及び歴史に關する見ゆる教會自身の教義を採用する人々が、かゝる見ゆる教會を以て、嘗に宗教的内觀の甚だ最も重要な根源となすのみならず、全然獨自なる位置を占有する一つの根源と認むるはもとより不自然なことではない。

本講演の計劃の注意深き制限は、私が今、諸君の注意を喚起したるが如く、諸君の大多數が歴

史的基督教會のある形式に與へんとする位置のこの想像されたる獨自性を詳細に亘りて考察することを禁ずる。私は、靈的生命が人間の間に取つたところの而して今なほ依然として取つて居るところの形式の性質と變種とについて、既に述べて置いたから、私が今こゝに見ゆる教會の傳統の正確さを判斷する事を試みないで、見ゆる教會の生命は人類の一層高き宗教的生命に對して、全體に對する部分の關係に立つて居るといふこと、人類の一層高き宗教生活の甚だ廣大なる範圍が、基督教の影響以外に發達し繁昌したといふ事を直ちに指摘しても、諸君はそれにも拘らず、驚かないであらう。而して人類の宗教的生活がその歴史的連絡に於て見られる時、基督教そのものは、その内觀に對し、その力に對し、多くの異つた源泉に依存して居つたといふ事、而してその源泉の或るものは、基督教が存在するに至つたずつと以前に人間の間に現はれたのみならず、自己自身の精神的豊富さを、基督教そのものが轉回し同化せんと企てた猶太教の傳統に依存せしめなかつた所の民族や文明に於て現はれたといふことを主張することを、眞理はわれらに要求する。基督教は、その起原に於て、その教義もその精神の型も共に常に猶太教的なるのみならず、また異教的でもある。基督教は異教主義の基督教以前の世界を通じて廣くその根源を廣げて居つ

たところの宗教的動機の綜合である。基督教自らの内觀は一部分非基督教的の世界に因つて居る。

然らば、事實として、靈の統一即人間的同朋の形式に於て具體化されたところの、また現にされて居るところの宗教的生命は、決してある一時代或は或る國民の特殊の領有ではなく、また何等獨自なる見ゆる教會に屬して居るものでない。而もかゝる統一は宗教的内觀の一根源である。われらは、われらがそれを發見する時はいつでも、またいかにしてそれがわれらに近づき得べくなつたに拘らず、それをを用ふるの權利を有する。實際上、われらすべては、歴史的根源の選擇に關する何等か一つの原理に従ふことなしかゝる内觀を用ひる。ソークラテース、プラトーン、ソフォクレスはわれらがそれを知ると知らざるとに論なく、その人からわれらすべてが直接或は間接に學んだところの宗教的教師である。われわれ自身の獨逸系の祖先、羅馬帝國の傳統は忠誠に對するわれらの型に影響を及ぼし、われらが然らずんば知らなかつたであらうところの靈的眞理をわれらに教へた。

加之、私が一切忠誠なる人の目的原因と呼んだところのもの、すなはち靈的世界全體の眞の統一は單なる道徳的理想ではない。それは一つの宗教的實在である。その奉仕者及び教役者は、宗

教的同朋團體が眞摯な心からの表現を見出すところではどこにでも存在する。人間の眞の目的及び効果ある行爲に就ての完全に眞に而も超人間的なる知識の光明に照らせば、すべて忠誠なる人は、彼等が個人的にはその事實を知ると知らざるとに拘らず、一つの純粹にして宗教的な同朋である。また過去すべての時代に於てさうであつた。人間の狭さ、及び浮世の有爲轉愛が忠誠なる者のこの團體についての知識を人間の眼から隠した。而して今なほ隠して居る。しかしながら、或る見ゆる靈的團體の忠誠が、何等かの種類の傳統を通じ、風習を通じ、歌或は物語を通じ、或は賢明なる言葉或は尊き行爲を通じ、いづこにてもあれ人々の間に於ける忠實なる魂の中に於て忠誠なる生命の新たな表現を惹起する様になる時には、いつもそれは間接に明るみへ現はれる。私は忠誠を通じて救ひを求めたところのすべての人の團體を見えざる教會と呼ぶ。それをしてわれらに見えざるものたらしむるものは、人間の歴史の事實に對するわれらの無智である。なほ一步進んでは、靈的眞理のわれらの味得に於けるわれらの狭さである。而して、私が、見ゆる教會のいかなる形式が人間の宗教的生活のために、どのやうなことをなし或はなさんとするにもせよ、宗教的内觀の冕冠の根源は、われらすべてに取りて、積極的の忠誠、奉仕、專念、受苦、獲

得、傳統、實例、教訓、一切忠實なるものより成る見えざる教會の勝利であるといふことをいふ時、私はたゞ人間的なるもの及び超人間的なるものの純粹なる事實を報告して居るのである。而して見えざる教會といふことによつて、私は如何なる國土にてもあれ、靈に於て生きるすべての人々から成つて居る同朋團體を意味する。

われらの名辭は今や私の時間の許す限り、嚴密に定義された。私はこゝに人間的同朋についての漠然たる情操に、或は人間はやがてさうなるかも知れんとわれらがたゞ希望するやうなことに ついての單なる道徳的理想に訴へて居るのではない。而して私は、吾人が人間を以てわれらの現在の肉體的及び精神的の存在を支配するところの自然法に従ふところの人々の單なる集合として考へる限り、人間の單なる崇拜に我自らを一時たりとも委ねはしない。自然の單なる産物として見られたる人間は充分に心狭きものであり、充分に墮落したものである。その生命は理解されぬ悪及び相互の誤解を以て充たされてある。それは宗教的敬畏の一個適當なる對象ではない。却つてそれは救ひを要する。それは忠誠を通じて救ひを見出しつゝあつた。而して眞の目的原因、純粹なる團體、忠誠なるものほのんとした靈的同朋團體は一個超人間的なるものであり單に人間的

なる實在ではない。眞の目的原因は忠誠なる人の生命の中にそれ自らを表現する。これらの表現が直接或は間接にわれわれ自身の純粹の忠誠を鼓舞する限り、彼等はわれらに内觀を興へる。かゝる内觀から見れば、諸君が見ゆる教會の或形式との融合から何を學び得るにしても、それは一つの實例であり——一個特殊なる具體化である。然らば、見えざる教會は決して單なる人間的な世俗的な組織ではない。それは一個實なる超人間的なる組織である。それは見ゆる教會のあらゆる形式を包含し、之を超越する。見えざる教會は、われらが享けて之を喜ぶことを望むことが出来るところの一切の靈的賜がそれに屬するところの能動的な主體である。もしも諸君の靈眼にして開かれてあるならば、人間の言葉のいかなる相異も、儀式、風習、其他奉仕の形式のいかなる差も、傳統、象徴或は信條のいかなる偶然的奇異も、諸君の靈觀からその完全性を隠さないであらう。見えざる教會は至る所に靈の統一を信じ、而して人間を克服して、靈それ自らの統一への意識的奉仕に至らしむることによつて彼等を救ふことを目的とする。而して見えざる教會は諸君に許すに、諸君が諸君自らの外から獲得することの出来るあらゆる宗教的内觀の賜を以てする。もしも諸君にして眞に宗教的であるならば、諸君は見えざる教會の中に、また見えざる教會のた

めに生きて居るのである。諸君は見えざる教會の生命を諸君自身の仕方にて、而して疑もなく、諸君自身の時代と信條との制限の下に考へる。けれども諸君は、見えざる教會の現前から逃れることは出来ない。而して諸君の救ひは、この見えざる教會の實在、諸君の奉仕、及び憐れみを敢へて受ける人々、靈の力に於て打克つところの人々の、限りなく變種ある見えざる教會の仲間との諸君の融合の中に横はる。

私をして、見えざる教會のこの生命の或るものについて諸君に語らしめよ。

### 三

而して最初に私をしてその成員たるの資格について語らしめよ。われらは今や、繰返へし繰返へしかゝる成員たる資格の標準を規定した。見えざる教會は忠誠なる者の靈的同朋團體である。たゞ人の心をよく探り得る者のみ全く確實に誰が眞に忠誠なるかを知ることが出来る。われらは忠誠の性質に關して確實である筈である。而も忠誠そのものが人間の意識に、最も多様な形式と階段とに於て而も悲劇的なる誤解に曇らされて入り來らねばならぬといふことは、人間意識の

狭い形式及び人間の妄情の盲目さと變種とがそれを餘義なくするのである。

もしも人あつて、盜賊或は海賊がその仲間やその船に忠誠であるが如く、狭くして悪い目的原因に忠誠であるならば、靈的世界全體の統一に奉仕せんとする意識的努力の一は、一見したるところこゝに問題になつて居る忠誠の性質から排除されるやうに思はれるかも知れぬ。けれども、一個の目的原因をして惡たらしめ、忠誠なる奉仕の價値なからしめるものは、その奉仕が他人の目的原因を破壊させるものであり、従つて惡目的原因は、それに奉仕するところの人々の靈的同胞の忠誠を食ひ物にするものであり、よつて以てこの目的原因の奉仕者は人間に積極的の惡をなすものであるといふ事實である。けれどもこの事實そのものは、個々の盜賊或は海賊によつては理解されないかも知れない。彼は全幅の心情を捧げ、全心全靈全力を盡して彼が知れる限りの最善の目的原因に専念して居るのかも知れない。故に彼は人生の主は彼の目的原因を認可し給ふと眞面目に考へて居るのかも知れない。その場合に於ては、而してこの信念が眞面目である限り、その盜賊或は海賊は一個純粹に宗教的な人であり得る。

この言明は諸君にとりて一個馬鹿々々しい屁理屈のやうに見えるか。然らば人間の過去の歴史

を調べて見よ。十字軍士の少くともあるものは純粹に宗教的であつた。その事は、われらのすべてがすぐさま承認する。けれども、彼等は明かに大概は、盜賊であり殺戮者であつた。而も時とするに海賊であつて、もしも今日彼等が地中海を航海し或は島嶼を荒しつゝあるならば、最も宗教的でない型であると今われらは思はねばならぬ底のものである。「ハクルイトの航海」(一五五二年頃から一六一六年まで生存せる英人リチャード・ハクルイトが一五九九年に出せる三卷の大著作)に於てエリザベス時代の英國の探検家及び武人らが彼等の大事業を成し遂げた精神の説明を讀め。これらの説明に於て愛國心及び基督教の一個純粹なる宗教的型が、西班牙人に對する向見らざるの嫌惡、單なる自然的貪慾の最も明かなる表現を敢へてする殘忍なる性情、と相並んで屢々表現されてある。大不列顛國初期のこれらの英雄たちは、往々にして、彼等が寧ろ冒險的商人であるか、英國に對する忠誠なる武人であるか、或は基督教信仰の防護者であるか、或は單なる海賊であるかを殆んど知らなかつた。實際上彼等は同時にこれらのものゝすべてであつた。十八世紀に至るまでのありしがまゝの蘇格蘭高地の族長下の團體を考へて見よ。彼等の養ひ成した精神はその後、蘇格蘭人の忠誠心の中に、または人間の知つて居る中で最も高尚なる目的原因の或る



ものに對するその後の影響遠大なる奉仕に於て、著しき表現を見出して居る。而もこれらの氏族は家畜を盗むことを好み、彼等の敵をひどく苦しめた。彼等は何時ほんとの愛國者となり、人類の奉仕者となることを始めたのか。何時彼等は眞に心から宗教的であるやうになり始めたのか。われらの中果して誰か之を知らうや。

貪慾及び盲目は人間に自然なるものである。人間の意識の形式は、多くの場合に於て、甚だしきに至つては既に一切忠誠なる人の目的原因に對する眞面目な靈的關係に人が入つた時ですらも、人をしてこの貪慾とこの盲目との不合理性を自覺せしめるやうになし得ない。われらの知り得るところのものは、貪慾及び盲目は決してそれ自らでは宗教的でないといふこと、而して救ひの道は忠誠の道であるといふことである。けれども私は、貪慾なる盲目のいかなる程度が、私が丁度今その成員たるの資格を規定した「見えざる教會」の實際の一員たること、調和するかを知らない。しかしながら、私が、或は蘇格蘭の氏族人に於て、或は十字軍士に於て、或は英國、リザベス朝に於ける海賊的なる自國信仰の保護者に於て、或は英國人の嫌ふ西班牙人に於て、その何れたるを問はず普遍的忠誠の精神が表現されて居るのに會する時、私はこれらの人々の貪慾

或は妄情ではなく、而も彼等の宗教的勇敢さ、彼等の目的原因に自らをやすやすと投げ出すことを、内觀の一つの根源として用ふることが出来るやうにありたいと思ふ。

故に、見えざる教會に於ける成員たるの資格は、單なる約束によつて決定さるべきではなく、自己の良心の指揮に従つての彼等の忠誠なる生活に表現さるゝが如き忠實なる人々の内的精神によつて決定さるべきである。けれども、最も明かに靈の奉仕に屬するやうにわれらに見えるところの人々の中から、—その人の熱誠にわれらすべてがいふべからざるほど大なる負ひめを負うて居るところの—或る甚だ有力なる衆團を數へ上げることが容易である。われらが第一講に於てその人たちの内觀に諮り、それからずつと諸講に互つてそれを用ひて來たところの賢者、詩人、豫言者等はいかなる衆團を形成して居る。いかなる風土の國、或はいかなる國語の國に、或は眼に見えるいかなる宗教的團體に彼等が屬したか、或は今日屬して居るかは、われらに取りては無頓着なことである。彼等は眞摯に靈の目的原因に奉仕した。彼等は、われらに取りては、宗教的内觀の絶えざる根源である。われらが開講に際して引用せる皮肉家及び叛逆者等ですらも、彼等は實に、多くの個々の場合に於て、たゞ彼等が自覺的に光を見たいと要求した如くに光を見ることの

出来なかつた人、御都合のために虚言をつくことを忠誠に拒んだところの熱烈なる宗教家であつた。かゝる人々は往々にして、靈の目的原因に對し、彼等の言葉を諸君がたゞ氣に食はぬやうに思つて居る限り諸君には了解し難き白熱さを以て奉仕した。彼等は往々にして恰かも彼等が靈の統一に敵對するものゝ如く見える。けれども、多くの場合に於て、彼等の攻撃するところのものは、われらの性質の狹隘さ、われらの不靈なる妄情の混沌、われらの因襲の空しき形式主義である。而してかゝる攻撃は、われらの眼を、そこからみ慰安と解脱が來り得るところの靈の統一へ仰ぎ向ける。故に、かゝる人士は往々にして、間接には、人間の救ひの新らしき道の「誤解されたる」豫言者である。彼等が忠誠なる時、彼等の頑固そのものは彼等の毅く信頼し得べき性質による時、彼等は、往々にして一層深き宗教的生活の最も効果ある友の中に數へられる。

單なる因襲から全く離れて、諸君がよつて以て、宗教的なることを伴ひ或は宗教的なやうに見えるところの精神を吟味し得、見えざる教會の成員を成員ならざるものより辨別し得る一つの著しい標準は、豫言者アモスの標準「身を安くしてシオンに居る者は禍なるかな。」である。是、私の前にいつた如く、奉仕する人々と單に享樂する人々とを區別する事に、道德家たちが適用した得

意の吟味標準の一つである。それがまた一つの宗教的吟味の標準であること、而して何故にそれが一つの宗教的吟味の標準であるかは、忠誠の精神とのわれらの近づき、われらにそれを示した。宗教は、それが勝利を占むる時、實に内的平和の經驗を含む。けれども、緊張的なる忠誠的奉仕を通して獲得せられたのでない平和は虚偽のものであり、人を腐敗させるものである。救ひとなるところのものは艱難を通し艱難を越えての克服である。宗教を以てたゞ悲哀からの安らかなる離脱と考へ、不安の心地よき消滅となし、苦痛から單に脱れることゝなす者は、惡のいかなるものであるか、われらの人間的性質はいかなるものであるか、われらの救ひの要はいかなることを意味するか、或は人生の主の意志が何を要求するかを知らないのである。故に、單に苦惱の治療、或は艱難の豫防の形式に於て出現するところの「見ゆる教會」は忠誠が意味するところのものゝ充分の意義に於いて缺けて居るやうに私には思はれる。實にや、苦惱はそれ自らに於ては決して宗教的實修ではない。けれども、それは往々にして深く宗教的なる生活への一つの有効なる準備である。また時とすると、自然的氣分の變化に應じての比較的無害な宗教的生活の附隨物である。たしかに、たゞ苦惱がないといふこと、たゞ感情的な平靜の單なる獲得、これは決して見

えざる教會の成員たるの標準ではない。皮肉家、或は因襲的な宗教的形式に對する叛逆者、或は悲觀主義者、或は惱める魂の方が、——もしもたゞかゝる人が自己の良心の指揮に従つて緊張的に忠誠でありさへするならば——、宗教は忠誠のないたゞ靜かなる崇拜だと思つて居る人よりも増しである。けれどもいふまでもなく、平靜なる人の多くはまた忠誠である。このことが眞なる時のみわれらはたゞ彼等の「獲得」を享けて喜ぶことが出来る。

もしもわれらにして、見えざる教會への成員たるの資格を含むやうに思はれるところの精神の型のもつと他の例を探すならば、私自身は、近頃の時代に於て、日進月歩の自然科学の目的原因への一層熱烈なる奉仕者たちが、われらに示すところの純粹なる宗教的精神の事例よりもよいものを知らない。而して科學界の多くの偉人は、その個人的氣質と訓練との結果として、見ゆる教會の形式に興味を持たず、加之、甚だ往々にして、彼等の天職が宗教的意義を持つといふことを承認することを嫌ふが故に、かゝる事例は特に教訓的である。けれども事柄を正當に觀察する時には、吾人は、偉大なる科學者は常に自ら深く忠誠なるのみならず、また現在に於ては、恐らく現代人が奉仕する他の特殊なる目的原因の何れがなすよりも以上に、あらゆる種類の健全なる人

間活動を統一し、人間の一層高き興味の手てを一一に結び、種々の國土、種々の民族の人々を、靈に於て統一することに於て、多くを爲すところの一つの目的原因に奉仕して居るといふことを見る。眞面目なる科學者の目的原因は、私の見地からすれば、まさに私が既に諸君に説明したところの理由により、一個超人間的なる目的原因である。

個々の科學的研究家は、普通形而上學に興味を持たず、また、往々にして見ゆる教會の利害と自己の事業との關係について考へない。けれども、實に彼は、心情のすべてを盡し、全心全靈全力を捧げて、彼が價值ありと思惟する一つの目的原因に奉仕して居るといふことを知つて居る。彼はまた、この目的原因は善を爲すのであるといふこと、彼の科學が既に實際上の應用を持つて居ればよし、それでなくとも、自然に關する知識はそれ自らで人間に對する一個向上的な擴大的な影響を持つて居るものであるからして、その目的原因は人間活動の指導に於て大なる役目を演じて居るといふことを知つて居る。科學者はまた、自己の個人的經驗は自己がたゞ自分だけでそれに事實の新らしき觀察を期待する根源であるからして、彼の私的觀察は、他の研究家が彼の成果を證明して呉れ得る限りに於てのみ、科學に對して寄與をなすといふことを知つて居る。従つ

て、彼の科學的生活の全體は、彼の最も尊重する發見を、個人的人間經驗に屬するのでない而も科學界のすべての研究家の組織されたる經驗の共同の所有であり、或は忠誠なる努力を通じてさういふ所有になるやうな傾向のある一つの評價の、嚴密なる吟味に致すことに成立つのである。こゝまでは、熱心な研究者も彼の仕事について自ら意識して居る。

けれども熱心なる科學者は、自己の理想及び價値を評價するに際して、反省をしないか或は反省はしても謙遜なのかの理由により、時とするとこの點以上には進みたがらないやうに見える。けれどもその光明に於て科學的成果が吟味されるところの人間經驗の統一、その發達と豊富とに科學者が専念するところの人間の經驗の統一は、實にわれらが今論じた型の超人間的實在であるといふことをわれらが思ひ起す時、われらがまた、科學的理想がわれらの時代に於ける人間生活のすべての部分に對して有するところの深き價値を思ひ出す時、なほ進んでは、われらにして、もし眞の研究者は、ほんとの靈の統一なるところに彼のもてるすべてをいかに斷乎として寄與するかを見る時、われらは完全に没頭的な科學研究者—例へばフアラデイの如き人にも増して本質的に心から宗教的な人があるかどうかをほんとの疑ふ。私が幸にして、自己の學問のため

なら潔く死にしよう（もしも實驗或は觀察が危險を要求するならば）科學のためなら世間的不如意の幾年月、眞理のためなら、自分の利害は堅く放擲した幾年月の生活をも、意としないといふやうな眞に偉大なる科學者のことを聞く時、而も偶然にもまた彼等の或者は非宗教的なる人だと呼ばれ、或は恐らく甚たしきに至つては、自分でさう呼びさへしたといふことを聞く時、私はカリーの濱邊をウォーヅウォースと並んで歩んだ少女のことを思ひ出すといふことを告白する。ウォーヅウォースは彼女の持った種類の宗教的經驗を、私が熱烈忠誠なる科學界の英雄に適用したいと思はさせられたやうな言葉に於て評價した。

「汝は終年アブラハムの胸に住む、

そして殿堂の最も奥の宮にて崇拜す

神はわれのそれを知らぬ時汝と共にありて。」

こゝにまた、いかにして「神を信ぜぬ天文學者は狂者である」かをわれらに告ぐる詩人ヤング

(一六八三年に生れ一六七五年に死したる英國の宗教的詩人エドワード・ヤング)の聊か陳腐になつた詩句がある。私は寧ろ、自ら不敬虔だと思つて居る眞に忠誠なる科學者は、實は少しも狂者ではなく、而も、カレーに於けるウォヅウオースの若き同伴の如く、自分に對する觀察が足らずまた自分に力を附けて呉れるところの美はしい戀人のことを知らないのだといひたい。何んとなれば、眞に忠誠なる科學者は、實に星斗爛たる天と呼べる、機械的にして物理的なる現象のあの莊嚴なる集合以上の、すつと神聖なる或るものに對する愛によつて鼓舞されて居るからである。彼の仕事の中核は、その最も擴大された形に於ける靈の統一への奉仕である。

見ゆる教會の或る團體に屬して、彼等の良心の指導に従つて神に眞面目に忠誠なる人は皆、同時にまた見えざる教會の成員であるといふことは、私がいつたところに従へば、これ以上の説明を要しない。

けれども、もしも諸君にして、あらゆる種族、あらゆる部族、あらゆる國民、あらゆる言語の民からの、何人も數へ盡せないほどなこの多數を一瞥して、見えざる教會へ這入ることは、あまりに高くない或はあまりに強くないやうに諸君に思はれる柵によつて護られて居るといはれるな

らば、私は、この成員たるの資格は、實に最も嚴格なる規則によつて吟味されるのだと答へる。汝は汝の心情を盡し、全心全靈全力を捧げて、超人間的なる而して實に神聖なるところの或る目的原因に奉仕するか。これ、すべての人間的同朋團體の中で最も靈的なるこの團體に、入らんとするすべての人の答へねばならぬところの間である。

#### 四

見えざる教會は、われらにとつて内觀の一根源たるべきものである。このことは、もしもわれらにして忠實なる人々の内觀の成果を享けて喜ばんとせば、われらは忠實なる人々との或種の融合に入らなければならぬといふことを意味する。而して、忠誠なる奉仕の吾人自身の生活そのものから離れて、恩寵を受くる主要なる方法——即ち、忠誠の精神に於て教訓を獲、その辛勞に於て勇氣を得、その悲哀に於て慰めを得、而して堪へ忍び勝利を得るの力を得る主要なる方法——即ち、何人にも開かれて居る恩寵を受くる主要なる方法は、忠實なる人々とのかゝる融合、及び忠實なる人々が彼等の生活に於て表現する靈の統一とのかゝる融合に横はる。われらは、この融合の經

過を、われらの自身の特殊なる目的原因への同じ奉仕仲間との、直接なる個人的關係を通して開始せねばならぬといふことは自然なことである。従つて、見ゆる教會のどの部分かに屬する人々が、自分自身の團體の融合に入ることから生ずる精神的利益に關し普通いふところのことは皆、われらの現在の見地から見れば、靈の統一への忠實なる奉仕者の何等かの團體の熱誠と宗教的生活が、かゝる言明がまさにその團體自身の成員に適用された時、それに與へ得る眞理を皆持つて居るものとして採用され得るであらう。けれども、見えざる教會の聲はわれらすべてに同じやうに語る―見えざる教會はその忠告によつて、―われらすべてを同様に支へる。―常にわれら自身の個人的目的原因、及びこの目的原因への奉仕の同朋がわれらに知られて居る範圍に限らず、われらが忠誠なる生活を理解するの用意が出來、その忠誠なる生活によつて鼓舞さるべく準備しつゝある限り、たとひ、その意圖及びその價值を身を以て例證する人々はその經驗の型から見ても、その奉仕の仕方にあつても、われらからすつと離れて居る時ですら、―その忠告によつてわれらすべてを同様に支へる。

諸君は忠誠の左の法則を覺えて居るであらう。「もしも出來るならば、汝の奉仕により、汝が影

響を及ぼすあらゆる人が、彼自身の目的原因の一層熱心なる奉仕者とならせられるやうに、また依つて以て諸目的原因の目的原因―一切忠誠なるもの、統一への一層熱心なる奉仕者とならせられるやうに、汝の目的原因に奉仕せよ。」偕、見えざる教會を内觀の一つの根源として用ふるの規則は次の如くである。「諸目的原因の目的原因即一切忠誠なる者の統一に奉仕するあらゆる人が、その奉仕によつて、汝自身の特殊なる目的原因への汝の個人的奉仕に於て汝を助けるやうにさへなるやうに、他人の目的原因及び奉仕を解釋し同情的に理解するやうに準備せよ。」忠誠がどの様にして見出さるゝに拘らず、また、どこにそれが見出されるゝに拘らず、忠誠に對する理解と尊敬とを涵養することは、諸君自らを見えざる教會との一個適當なる融合に準備することである。而して、私はかゝる融合の中に宗教的内觀の冕冠の根源を發見する。然らば私のいふところのもの、見ゆる教會がその會員等に對して尊いものと思はれるといふことを認めること然と全調和する。けれども、私は、見ゆる教會は、それが實に靈の統一に對して熱烈であるが故に、即ち、見えざる教會の一部、見えざる教會の一機關であるが故に、かくの如く尊いのであるといふ事實を今一度指示する。

私は、我が内觀の冕冠たる根源のこの極めて不完全なる概説を結ぶに當り、見えざる教會のこれらの現在の教義に、聖パウロの靈的資に關する永遠に眞なる教を適用せざるを得ない。

パウロの弟子なるコリント人らが、彼等の小團體に於て、その各種の成員がその資と力との差別に基いて共同の目的原因に奉仕しようと企てたところの資と力との相異の問題に面したるが如く、一資のこの相異が其當初から教義上の意見の相異を惹起するの傾があつたが如く、その差別は同胞を互に衝突せしめて忠誠を脅かしたるが如く—丁度それと同じように、否それにも増して、無量の複雑さを以て、宗教的世界全體即忠誠なる者の見えざる團體は、内觀の力及び形式の相異、無限に變化ある氣分、能力、人間の種類條件等に因る相異にいつも面した。また今なほ依然として面して居る。コリント人の教會は、パウロがその状態を叙述したるが如く、宗教的人間世界の縮圖であつた。忠誠なる人が行くところのすべての道は、理性がそこではわれらの頭の上を覆ふ天であると同時に、あらゆる忠誠なる個人を人生の主結び附けるところの大いに活氣をつ

ける底の熱烈であるところの靈の領域にまで向上せしめる。けれども、われらの宇宙に於ては、一は多を要求する。無限は有限を通して肉を着けたものとなる。忠誠なる者を永遠の知識へと導く道は、われらの眼の前に、多岐の小徑と解りにくひ迷路とを以て、この現在の世界の曠野を貫いて通つて居る。神聖なる生活は苦惱を通じて獲得される。而して宗教の歴史は苦惱の物語—時々刻々、彼等の同胞の心を狹隘に誤り讀むことに依つてのみ、神を思ひ起すことの出來たところの同胞の間に於ける相互の誤解の物語である。靈的資に關する意見の相異は宗教史上に宗派心の永遠の戦を發展させた。見えざる教會は屢々「われらのだけが眞の靈的資である。われらの勝利を通してのみ世界は救はるべきである。われら自身のエルサレムが普遍的に認められた聖都である時にのみ人は救ひに達するであらう。」といふ宗派の形式に於て意識された。

皆、單に多を無くすることにのみよつて、多を一に引下げることには無用である。その信條が宗派の別をなくするやうな或る新宗派を作ることには無用である。何か一つの信條の下に、或は宗教的實修の何か定つた組織を以ての見ゆる教會の統一は一個獲得すべからざるまた望むべからざる理想である。ジェームスの意義に於ける宗教的經驗の變種は無限である。この相異は、強くして忠

誠なる人格にも無数の相異がある位大きい相異である。コリント人の教會によつて彼に提出された縮圖の場合に於て、聖パウロが見たところのものは、すべての眞の資、従つて宗教的問題を理解する上に於ての避け難き相異のすべて、及び個人的宗教的内觀のすべての相異は、豊富なる宗教的生活に必要であるといふこと、而して、もしもたゞそれらの相異にしてパウロが愛と定義したところの靈的資に從つて考へられ、用ひられる限り、靈の統一に役立ち得るといふ事であつた。

情、パウロの愛は、既に自己の同胞團體を承認したところの兄弟たち、自分らの目的原因は一であるといふこと、自分らの奉仕する靈は一であるといふ事を意識的に知つて居るところの兄弟たちの團體の特色を表はすべき忠誠のその形式であるに過ぎない。かゝる兄弟たちに取りては、忠誠はもとより己を求むることを要せぬ、或は熱烈に己を主張することを要せぬところの自己屈服の形を取る。蓋、こゝに問題になつて居る團體の「見ゆる統一」は、そこに居るすべての忠實なる人々によつて既に承認せられ、従つて各人はたゞ自分だけでなく自分の兄弟たちをも教化せんとし、而してまた、自分の兄弟を一つの新しい信仰に改宗させようとはせず、たゞそれを、その團體によつて既に認められた一つの信仰の中へ入れようとするやうになるからである。けれ

ども、コリント人らは資の差別について争つて共同の靈を見失ふやうになつたからして、パウロはたゞ、—自己の團體の共同の目的を充分に自覺して居る同朋團體に忠誠の原理がどう當て嵌まるかの専門的に眞なる言ひ表はしでもあるところの—彼の愛の詩によつて、彼等の旗印のところへ彼等を再び呼び戻す。

けれども愛に關するパウロの描寫をわれらは甚だよく知つて居るが故に、一つの宗教的同族の内に支配權を握るべき「忠誠についてのこの説明」を、信仰が信仰を理解しない世界、意見の對立が當面の人々にとつて靈の團體を許さないやうにするやうに見ゆるところの世界、聖徒のやうな人でさへもが、或は信敵に對する迫害心のためにその心を攪き亂され、或は一見誤れるやうに見えるところの信仰を嫌ふあまり、その戰鬥的血潮を沸かさしめられるやうな世界に於ける問題に適用することは之を困難ならしめる。而してパウロ自身ですらも、彼が「偽の兄弟」と呼んだところの人々に關説した時、或はまたその思想及び精神に彼が負ふところ甚だ多き希臘—羅馬的精神の特性を述べた時、そのいづれに於ても、彼は愛の言葉に於て語ることは出来なかつた。靈的資について争つて居つたコリント人は、宗教的戰に導いたところの動機の一つ縮圖的代表であ



つた如く、パウロ自身も或る争の事柄が彼の心の内に起きた時、すぐさま愛を以て語る事が出来なかつたといふ事實は、見ゆる教會が、(そのすべての形に於て)、吾人が眞理也と思ふところのものに熱中する忠誠なる緊張と、吾人がその意味を理解することを得ざる他人の信仰に對する寛容の精神とを、結びつけるのに際して、遭遇せねばならなかつたところの困難を縮圖に於て示すものである。

けれども、パウロが愛についていつたところのものは、もしもそれが眞であるならば普遍化されねばならぬ。われらがパウロの愛を普遍化する時、その愛は、も一度忠誠—事實として、今やいくらか偏した自分自身の忠誠を求めることも是認されるが、而もなほ且つそれが愛である限り愛は愛らしく眞理に於てよろこびを感じるころの忠誠—となる。たとひ民族或は信條の區別が、われらをして、遠く離れた兄弟たちがそれで以て自己の靈的資を具體化して居る人柄とか、實修とか、意見とかを好くやうに感じさせることを困難ならしめ、或は不可能ならしめる時ですらもかゝる忠誠は忠誠を愛する。

かゝる忠誠は寛容である。寛容は、その人の特殊なる目的原因を、今、理解することの出来ない人々とわれらが交渉せねばならぬ時の愛のはたきである。忠誠は、—恰かも眞理か無差別であるが如くではなく、或は世俗的と靈的との間には著しき對照がないが如くではなく—、寛容であり、—忠誠への最もよき奉仕、宗教への最も良き奉仕、靈の統一への最もよき奉仕は、まさに、われらの兄弟をわれら自身のためではなく彼等自身のために助けることに於て成り立つ限り、寛容である。かゝる忠誠は靈の永續及び靈の最高の統一に對する純なる信仰を含む。

パウロがコリント人に説いたところの教義をかく普遍化することによつてのみ、われらは、内觀のこの冕冠的根源—見えざる教會の數限りなき形式及び表現に於て具體化される教義・事例、生活、靈感—を充分に用ふるの準備を爲すことが出来る。

見えざる教會の事業—これまさに本講演のすべてが諸君の注意をそれに向けつゝあつたところの事業である。内觀の諸根源は、それ自らでわれらの精神に於ける見えざる教會の精神の功用である。

もしも私が諸君の中の何人かの心をして、これらの功用に眼を開かしめるに何事(たとひそれは價値のないものではあらうとも)かをなしたであらうならば、私の斷片的努力は空しくはな

つたであらう。私は諸君自身の内観を決定する何等の權威をも持つて居ない。それが見出さるべきところに内観を求めよ。

スロイ 宗教哲學 (終り)

大正十二年二月十二日印刷  
大正十二年二月十七日發行

(ロイス宗教哲學)  
定價二圓五十錢

著者

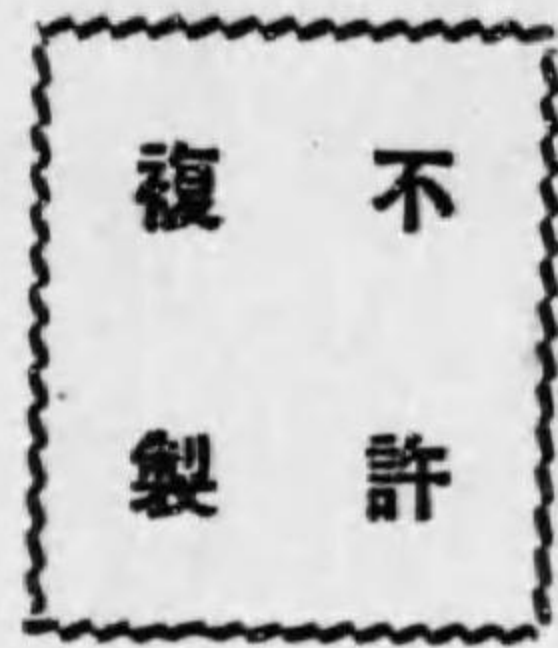
鈴木龍司

發行者

東京市神田區南神保町十四番地  
鶴岡五郎

印刷者

東京市神田區松下町七番地  
小林實



發行所

東京市神田區南神保町  
振替東京一九二三三番

日進堂

電話九段一四二五番

近代の人文的革新生活樹立の好資料

鈴木俊行著	文士	現代哲學思潮	四版上	定價六圓	送料二圓	最近哲學思潮を捉へて、縱横に論述し、各思想の依て來る系統を明示し、一讀直ちに各思想の理解せしむる快著なり。
入澤宗壽著	文士	教育學	四版上	定價六圓	送料二圓	日進の文化に連れ、教育も亦其歩を一にせざる可らず、本書は此の意に於ける最近教育學を説ける良書なり。
太田善男著	文士	現代思潮批判	四版上	定價六圓	送料二圓	混沌とした亂麻の如き現代思潮界に、嚴正なる觀察を下し、適切透徹なる批判を縱横に加へ、其歸趨を啓示せる良書なり。
伊藤惠著	文士	倫理學	四版上	定價六圓	送料二圓	吾人一切の社會活動を倫理的に其根源を置かんとする、當今倫理學を知るは何人にも緊要なり。本書は明快に適確に説ける良書なり。
瀧村斐男著	文士	美學思潮	四版上	定價六圓	送料二圓	最近浸々として擡頭し來れる美學を、説き、各系統を根柢を索り、藝術に關する論破せる近來の快著なり。
佐藤清譯	文士	モーリスの藝術論	四版上	定價六圓	送料二圓	ウヰリアム・モリスの藝術を、直接關したる主要論文を集めたれば、彼の體験よりなる藝術と生活の關係を、視ふに好個の良書なり。
綱本正三郎譯	商學士	マルクス經濟學と唯物史觀	四版上	定價六圓	送料二圓	世界新人イロチの原著を、篤學な譯者の靈筆により、其眞面目を遺憾なく發揮せる良書なり。
島木愛之助著	文士	人格の出發	四版上	定價六圓	送料二圓	倫理學を文化的に説き、現代人の道徳的懷疑を教ふべく、人生の日常生活に交錯せしめ、其歸趨を暗示せる良書なり。
十一博士共述	博士	思想問題十五講	四版上	定價六圓	送料二圓	戦後混亂せる思潮をよく、理會し、新生活を樹立せしめんと、現代思想界の權威たる十博士の眞率なる共述書なり。
十二博士	博士	文化問題十五講	四版上	定價六圓	送料二圓	東西文化の融合こそ、將來の新勢力ならんべし。吾人の内面生活の考察に、適切なる
三學士共述	學士	文化問題十五講	四版上	定價六圓	送料二圓	は蓋し、吾人の内面生活の考察に、適切なる

505
46

終